KYOTO TACHIBANA UNIVERSITY HISTORICAL HERITAGE RESEARCH REPORT 2013

京都橘大学 歴史遺産調査報告 2013

醍醐寺旧光台院本堂、芦屋神社境内古墳、鹿谷古墳群茶ノ木山支群

2014年 3 月
京都橘大学　文学部

はじめに

本学の歴史遺産学科の前身となる文化財学科は1996（平成８）年に設置申請、同年12月に認可、1997（平成９）年４月より開設された。その後の2012年４月１日に文化財学科から歴史遺産学科へ学科名を変更した。

文化財学科を開設した当時の門脇禎二学長は「①文化財・伝統文化を尊重する心と専門的知識・技能の基礎を身につけて、研究者・職業人をめざしたりあるいはすぐ社会生活に入る学生の育成と、②体系的な「文化財学」の創出をめざす研究の進展、を目的においた」とした。

そのうちの専門的知識・技能の基礎を身につける学びの一環として、本学では2000（平成12）年３月に京都市伏見区にある法琳寺跡の測量調査を行った。それ以降、近畿地方北部のフィールドを中心として、発掘・測量調査を継続して行ってきた。調査には多くの学生が参加し、現場での実践的な調査の方法や技能を学び取っている。

本年度は主に、芦屋神社境内古墳などの諸調査を実施した。ここではそれらの成果を中心として報告するものである。報告書を作ることもまた、学生が調査から報告書発行までの一貫した流れを知るための大切な作業であり、これらの活動全体を通し、文化遺産のより一層の周知に役立てられれば幸いである。

さて、学科名を歴史遺産と銘打ったのは、近年世界遺産や文化的景観など、多様化する文化財とその周辺学の拡がりを省みた結果である。「人類の所産のうち、考古資料、彫刻、絵画、工芸品、歴史資料などの動産遺産と、建造物、近代化遺産、都市・文化的景観、史跡、埋蔵文化財といった土地に定着した不動産遺産、これらの２つの領域の文化遺産情報を対象として歴史遺産という認識の学びに高める」ためのものである。

今年度より文化財調査報告から歴史遺産調査報告に書名も変更した。昨年度から内容も従来の遺跡調査に加えて、建造物も含めることにした。

我々がここで歴史遺産に関わる作業と勉学に向かえるのは、ひとえに調査にあたらせていただく際の現地の方々や、多くの関係者の方々のご理解・ご協力の賜である。今後とも文化財調査についての変わらぬご理解、ご協力、ご指導を賜りたく、お願い申し上げる次第である。

2014年３月31日

京都橘大学文学部

例　言

1．本書は、京都橘大学が2013年度に実施した京都府亀岡市鹿谷古墳群や京都市醍醐寺旧光台院本堂、兵庫県芦屋市芦屋神社境内古墳などの歴史遺産学科歴史遺産コースを主とした調査の報告書である。

2．調査した遺跡と遺構には、国土座標世界測地系によってその位置を示した。

3．本文の執筆には、第１章を鈴木知怜、第２章を登谷伸宏、第３章を一瀬和夫・荒木瀬奈・鈴木茂、第４章を荒木瀬奈、第５章を北垣巴恵があたった。なお、第６章の文章作成には古代学研究会、奥田尚氏に玉稿を賜った。

4．本書の編集は、一瀬和夫・鈴木知怜が担当し、各執筆者や参加学生がこれを助けた。

5．調査にあたっては、總本山醍醐寺文化財管理室、高島市教育委員会、高島市歴史民俗資料館、書寫山圓教寺、泉佐野市教育委員会、京都大学大学院工学研究科建築史研究室、兵庫県教育委員会、芦屋市教育委員会、西宮市教育委員会、芦屋神社、芦の芽グループ、亀岡市文化資料館、龍潭寺、長瀬福男、山本晃子、白井忠雄、大樹玄承、鈴木陽一、大関逸子、山岸常人、土屋みづほ、堂ノ本智子、山西康司、竹村忠洋、森岡秀人、森下真企、藤川祐作、菱田哲郎、櫃本誠一、森下章司、宮川禎一、富山直人、諫早直人、前田俊雄、三好　玄、笹栗　拓、樋口隆久、黒川孝宏、土井孝則、奥村弥恵、瀬口眞司をはじめとする関係機関、諸氏諸嬢にご高配を賜った。記して感謝したい。

目　　次

はじめに・例言
目次
第１章　2013年度の文化遺産調査概要と経過……１
第２章　2013年度の建造物調査……５
第３章　芦屋神社境内古墳墳丘測量・石室実測調査……９
第４章　鹿谷古墳群茶ノ木山支群18号墳測量調査
（ゴーランド・コレクション調査プロジェクト）……24
第５章　丹後地域における弥生時代後期墳墓の埋葬施設……35
第６章　芦屋神社境内古墳の石室の石材と芦屋神社の石造物……48
報告書抄録

図・表目次

図１　下醍醐伽藍配置……５
図２　醍醐寺旧光台院　配置……７
図３　醍醐寺旧光台院　本堂平面……７
図４　醍醐寺旧光台院　本堂棟札……８
図５　芦屋神社境内古墳及びその周囲の遺跡分布……９
図６　芦屋八十塚古墳群　古墳分布……10
図７　芦屋神社境内古墳位置……12
図８　芦屋神社境内古墳　墳丘及び境内西半……14
図９　芦屋神社境内古墳　墳丘……15
図10　芦屋神社境内古墳　墳丘断面……16
図11　芦屋神社境内古墳　石室……17
図12　芦屋神社境内古墳　玄室内ラントウ……19
図13　芦屋神社境内古墳　猿丸神社西側石垣……22
図14　芦屋神社境内古墳　猿丸神社宝塔……22
図15　芦屋八十塚古墳群（有袖式）　玄室幅・玄室長
比率分布……23
図16　鹿谷古墳群及び関連古墳分布……25
図17　行者山南麓古墳分布……26
図18　鹿谷古墳群大市支群Ⅲ・Ⅳ群墳丘復元……27
図19　鹿谷古墳群茶ノ木山支群とその周辺古墳の
分布……29
図20　鹿谷古墳群茶ノ木山支群　18号墳墳丘……30
図21　丹後地域弥生時代後期主要遺跡と大型墳墓
及び大型前方後円墳の分布……35
図22　丹後地域弥生時代後期墳墓埋葬施設
検出状況（１）……37
図23　丹後地域弥生時代後期墳墓埋葬施設
検出状況（２）……38
図24　墓壙規模の分布……41
図25　箱型木棺規模……42
図26　Ｈ形木棺規模……42
図27　各類型木棺の採用……42
図28　鉄製品器種別出土……42
図29　丹後地域弥生時代後期墳墓埋葬施設出土遺物
分類模式……46
図30　芦屋神社境内古墳の石材の石種分布……48
図31　芦屋神社の石造物の位置……50
表１　芦屋神社の石造物の石種と時期……51

第１章

2013年度の文化遺産調査概要と経過

１．2013年度の調査状況

今年度の考古学調査の現地調査作業については、夏季を中心に、兵庫県芦屋市芦屋神社境内古墳で測量・実測調査を行った。整理については、同古墳を中心に作業するとともに、年度下半期には鹿谷古墳群茶ノ木山支群の調査分も併せ実施した。

建造物調査については、京都市醍醐寺旧光台院本堂、滋賀県高島市旧大溝城下町などで実施した。

本書の全体の整理作業にあたっては、考古学実習の授業を中心に、明智礼華、足羽　悠、大原晴貴、奥村祥子、門脇　彩、酒井仁美、坂本　海、重盛早耶、清野友理、辻　翔太、藤倉図南、村上宏絵、鈴木知怜、広瀬侑紀、竹村亮仁が行った。

これらに加えて、昨年度に引き続き、本学と財団法人滋賀県文化財保護協会と連携して、「地域貢献・社会貢献の一環として人材育成とその展開のための教育プログラム」を８月に実施した。

こうした中、今年度に主として歴史遺産コースが実施した主な調査の概要は、以下に紹介する通りである。

２．蟻通神社社殿の実測調査

蟻通神社は大阪府泉佐野市の長滝に所在する。社伝によると、開化天皇の時代に創立されたという。1289（正応２）年書写の『和泉国神名帳』に「従五位上有通社」とあり、鎌倉時代の日根荘を描いた「和泉国日根庄日根野村荒野開発絵図」には「穴通」と記される。また、近世には蟻通明神と呼ばれ、この地域の有力な神社のひとつであった。

1574（天正２）年の豊臣秀吉による根来攻めの際に社殿が焼失したが、慶長期には豊臣秀頼が社殿の再建に着手した。さらに、1640（寛永17）年に岸和田藩主として入封した岡部氏の崇敬を受け、社殿の造営、所領の寄進が進んだ。その後、1942（昭和17）年に明野陸軍飛行学校佐野分教所（佐野飛行場）が建設されることとなり、長滝の集落内の現社地へ移転した。なお、旧社地は今よりも北の熊野街道沿いに位置していた。

境内は南北に長く、南側を正面とする。中央奥寄りに本殿があり、軸線を揃えて拝殿、舞台、表門が南北に並ぶ（写真１・２）。舞台の南西には絵馬堂が立つ。表門の前に池を設けて石橋を架け、その南西に南手水舎を配する。一方、本殿の北西には裏門があり、その北東に北手水舎を設ける。社地の移転により、境内周縁部の景観は失われているが、本殿・拝殿などからなる中心部は社殿の配置を踏襲しており、移転以前の社頭景観をよくとどめている。

今回の調査は、泉佐野市教育委員会の依頼にもとづき実施した。境内の建造物のうち、本殿・拝殿・透廊・後門および東西透塀・舞台・表門・南手水舎・石橋・絵馬堂・裏門・北手水舎の11棟について実測調査、および史料調査を実施した。具体的には対象建造物の平面の実測、改造状況と復原についての調査、棟札・関連文書などの調査、建立年代の確認、建築的特色の記録、写真撮影を行った。

調査は登谷伸宏を調査主任とし、2013年５月26日、７月26・27日、10月27日に行った。

調査参加者は、大場彩加、磯谷充子、小塩咲由、小林千里、松本真理である。

３．旧大溝城下町の文化的景観調査

大溝城下町は、滋賀県高島市に所在する。比良山地の山裾を通った北国街道が高島平野へと抜けるこの地域には、古代から湊がつくられており、陸上交通と湖上交通の交わる要衝に設けられた城下町である。

城下町の建設は、織田信澄により1578（天正６）年頃から始められた。信澄は大溝城を、琵琶湖・乙女ヶ池を堀とする水城として築城するとともに、①北国街道の城下への取り込み、②周辺地域からの町場・寺院の移転、③大溝湊の整備を行うなど城下町の建設を進めた。これにより大溝は、湖西における政治的・経済的拠点として機能することとなった。その後は、丹羽長秀、加藤光泰、生駒正親、京極高次が相次いで城主となり、1619（元和５）年に分部光信が伊賀上野から入封してからは、大溝藩分部家の城下町として近代まで存続した。

大溝藩は２万石の小藩であったため、大溝は城郭を持たない陣屋町として発展した。1664（寛文４）年の『大溝城下古図』（高島市歴史民俗資料館所蔵）によると、陣屋（藩庁）は現在の高島市民病院のあたりにあり、その西側に堀で囲まれた武家地が広がっていた。武家地は「郭内」と呼ばれ、北、南、西側にはそれぞれ門が設けられ、北門に近接して惣門が置かれた。城下には、北国

街道（＝本町通）が通るとともに、琵琶湖の主要な湊のひとつであった大溝湊があり、町人地は、北国街道沿いとその西側に広がっていた（写真３・４）。寺社は町人地、および城下町の西側の山麓に点在する。

今回の文化的景観調査は、高島市教育委員会の依頼にもとづき、京都大学大学院工学研究科建築史研究室と共同で実施した。具体的には、寺社や町屋のなかから城下町の景観を特徴づける建造物を選び、対象建造物の平面の実測、改造状況と復原についての調査、棟札・関連文書などの調査、建立年代の確認、建築的特色の記録、写真撮影を行った。

京都橘大学側の調査は、登谷伸宏を調査主任とし、2013年５月19日、８月１・５・６・23日、12月７日に行った。

調査参加者は、磯谷充子、上部歩美、大場彩加、西田祐樹、早柏千晶、松本真理、宮島稜、髙橋　侑である。

４．醍醐寺旧光台院本堂の実測調査

醍醐寺は京都府京都市伏見区に所在する。醍醐寺の院家のひとつである旧光台院は、笠取山麓に広がる下醍醐の伽藍のうち、金堂五重塔などからなる伽藍主要部の南に所在する。現在、光台院は院号のみが残り、その敷地には2000（平成12）年に伝法学院が設けられた。それにともない、敷地に残存していた本堂は伝法学院の西側に移築されることとなった。

旧光台院本堂については、これまで文化財としての調査が入っておらず、歴史的な評価が定まっていなかった。そこで、今年度は本堂の実測調査、および史料調査を、醍醐寺の協力のもと実施した。具体的には対象建造物の平面の実測、改造状況と復原についての調査、棟札・関連文書などの調査、建立年代の確認、建築的特色の記録、写真撮影を行った。

調査は登谷伸宏を調査主任とし、2013年８月21～22日、12月16日に行った。

調査参加者は、磯谷充子、上部歩美、小塩咲由、小林千里、西田祐樹、早柏千晶、松本真理、宮島　稜、髙橋侑である。

５．書冩山圓教寺法華堂・金剛堂の実測調査

圓教寺は、兵庫県姫路市に所在する。姫路市中心部の北方の書写山上に立地し、平安時代中期に性空上人により開かれた天台宗の寺院である。

圓教寺の伽藍は、仁王門、摩尼殿などからなる東谷、大講堂・食堂・常行堂のいわゆる三之堂と奥の院からなる西谷により形成される。山上には中世・近世の建造物が多く現存し、2014年の段階で12件21棟が、国指定、県指定、または国登録の文化財となっている。

今年度は、圓教寺の伽藍のなかで、西谷に所在する法華堂と金剛堂について調査を行った。

法華堂は、西谷のうち大講堂・食堂・常行堂からなる伽藍主要部のやや南西に位置する（写真５）。前述のように、圓教寺の主要な堂舎は、多くがすでに重要文化財や兵庫県指定文化財などに指定されているが、法華堂については、これまで文化財としての調査が入っておらず、歴史的な評価が定まっていなかった。そこで、今年度は本堂の実測調査、および史料調査を、圓教寺のご厚意のもと実施した。具体的には対象建造物の平面の実測、改造状況と復原についての調査、棟札・関連文書などの調査、建立年代の確認、建築的特色の記録、写真撮影を行った。

一方、金剛堂は、法華堂のさらに西側に位置する。この建物は1544（天文13）年の建立で、重要文化財に指定

写真１　蟻通神社　本殿正側面全景

写真２　蟻通神社　境内全景

写真３　旧大溝城下町　本町通の景観

写真４　旧大溝城下町　大溝湊の全景

写真５　圓教寺　法華堂正側面全景

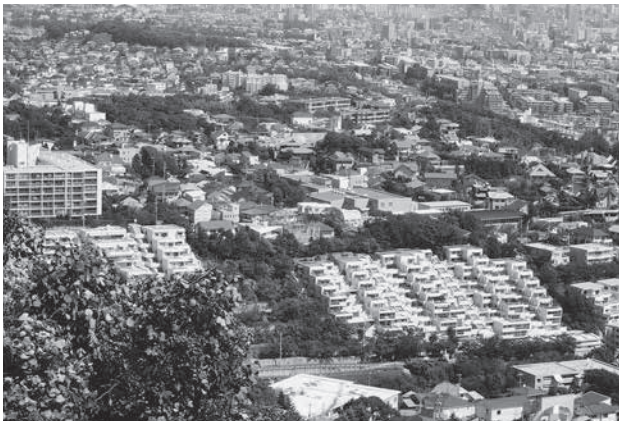


写真６　芦屋神社　遠景（会下山遺跡より）

写真７　芦屋神社境内古墳　正面

写真８　芦屋神社境内　猿丸神社

写真９　芦屋神社境内古墳　実測調査風景

写真10　芦屋神社境内古墳　測量調査風景

されている。1958（昭和33）年から59年にかけて修理工事が行われ、その際に詳細な実測調査が実施された。そのため、今回は法華堂の類例調査として平面の実測、技法調査を行うにとどめた。

調査は登谷伸宏を調査主任とし、2013年９月４日に行った。

調査参加者は、磯谷充子、上部歩美、大場彩加、小林千里、志知雅一、時岡佳弘、西田祐樹、早柏千晶、松本真理、宮島　稜、山田智司、山根征哉、足羽　悠、清野友理、髙橋　侑である。

６．芦屋神社境内古墳墳丘測量・石室実測調査

芦屋神社境内古墳は、兵庫県芦屋市所在の芦屋神社境内の西端に位置する。天井石まで残る横穴式石室をもつ円墳である。南北を参道によって削られているものの、全体的に残存状況は比較的良好である。築造時期は７世紀頃とされており、現在は弥都波能売神を祀る水神社となっている。また同神社境内にある伝猿丸太夫之墓には鎌倉時代後期製作と考えられる宝塔が所在する。江戸時代の地誌に当時の旧跡として猿丸太夫之墓と記されているが芦屋と太夫の関係については明らかではない。

今年度実施した調査では古墳の墳丘測量と、石室実測、および同神社敷地内にある宝塔（伝猿丸太夫之墓）、その周辺の石列の実測を行った。

調査は一瀬和夫を調査主任とし、墳丘測量・石室実測を８月１日～11日、墳丘測量図・石室実測図見直しを８月23日～９月３日、宝塔・石垣実測を８月23日～９月２日、補足測量・実測を12月20日に実施した。

調査参加者は、徳泉翔平、伊藤慶人、河合芽久実、岸　薫美、阪口綾香、志知雅一、竹村弘平、鶴山優梨子、田中愛梨、仲谷真麻、長谷川智哉、福添暁久、堀　絢夏、岬　栄里、宮島　稜、矢嶌芙雪、安田朝香、山本彩有里、小栗　実、清野友理、門脇　彩、足羽　悠、辻　翔太、大原晴貴、酒井仁美、村上宏絵、重森早耶、鈴木知怜、荒木瀬奈、鈴木　茂である。

７．鹿谷古墳群茶ノ木山支群18号墳測量調査
（ゴーランド・コレクション調査プロジェクト）

鹿谷古墳群は京都府亀岡市薛田野町鹿谷一帯、行者山南麓の低丘陵上に群集する古墳で構成される。その南側の扇状地に展開する鹿谷遺跡の墓域と考えられている。イギリス人のウィリアム・ゴーランドが調査を行った古墳の所在は長らく位置不詳とされてきた。ところが2009年、薛田野町鹿谷大市を中心とした龍谷大学考古学研究会の踏査で新たに確認された古墳のうち１基が、ゴーランドにより石室撮影されたものと関連することが分かってきた。

そこでこの３年間、その古墳とその周囲の実態をつかむため、ゴーランド・コレクション調査プロジェクトのメンバーとともに測量調査を行った。本年は、昨年に引き続き古墳周辺とともに、尾根上の石棚のある円墳を中心に墳丘測量を行った。20㎝コンター、縮尺1/100の図化である。

今年度の調査は山頂にある茶ノ木山支群の整理作業を行った。現地については2012年11月23日、12月29・30日、2013年３月23日に測量調査を実施したものである。

現地調査の参加者は、浅井千鶴、小栗　実、奥村祥子、清野友里、鈴木　茂、荒木瀬奈、竹村亮仁である。

８．上御殿遺跡、金ヶ森遺跡の発掘調査
（「地域貢献・社会貢献の一環として人材育成とその展開のための教育プログラム」）

昨年度に続いて本学と財団法人滋賀県文化財保護協会が連携して行った、発掘調査を通した人材育成を目的としたプログラムである。

本学学生は高島市安曇川町三尾里所在の上御殿遺跡と守山市金森町所在の金ヶ森遺跡の発掘調査に参加した。

上御殿遺跡は、弥生時代後期（もしくは古墳時代）の木棺墓、古墳時代前期の竪穴住居、古墳時代後期の溝、奈良時代頃の掘立柱建物、平安時代後半の掘立柱建物や溝、祭祀遺物などが検出されている。

金ヶ森遺跡は、弥生時代～中世の建物跡や溝跡など集落に関わる遺構、滑石製模造鏡や有孔円板などの特徴的な遺物が出土している。南側に隣接する横江遺跡では、平安時代の建物跡などが検出されている。また、西方の発掘調査でも、鎌倉時代～室町時代の区画溝をもつ非常に大規模な集落跡が確認されている。さらに南側の下長遺跡では、古墳時代前期の区画を伴う大型建物や独立棟持柱建物などの遺構とともに、鏡・石釧・柄頭・儀杖・団扇状木製品などが出土したことから、湖南地域における古墳時代前期の拠点集落のひとつと考えられている。

調査参加者は、木田拓馬、西田祐樹、高橋　侑、鈴木知怜である。

第２章

2013年度の建造物調査

１．調査経過

今年度の建造物調査は、夏期を中心として、大阪府泉佐野市蟻通神社、滋賀県高島市旧大溝城下町、京都府京都市伏見区醍醐寺、兵庫県姫路市圓教寺で行った。蟻通神社、旧大溝城下町、圓教寺の調査については、別途報告書を刊行する。ここでは、醍醐寺の旧光台院本堂の調査について詳細に報告する。

２．醍醐寺旧光台院本堂の調査

（１）光台院について

醍醐寺は、貞観年中（859～877）に聖宝より創建された真言宗の寺院である。笠取山山頂と西山麓に伽藍が展開し、それぞれ上醍醐、下醍醐と呼ばれる[1]。

光台院は、下醍醐の伽藍の南側に位置する院家のひとつであった。現在は院家の実態はなく、2000（平成12）年に伝法学院が光台院の敷地に設けられることにともない、本堂はその西側の現在地に移転した（図１）。

光台院の創建については、史料が非常に少なく不明な点が多い。第80代座主義演の編纂した『醍醐寺新要録』によると、もとは上醍醐の院家のひとつで、1376（永和２）年に堂舎の供養を行ったことがわかる。堂内には本尊として阿弥陀三尊を安置し、六口の僧侶が勤仕したとする[2]。さらに、近世につくられた上醍醐の絵図である「上醍醐寺総画図」では、上醍醐のうち寂静院谷に光台院とその墓所が描かれている[3]。

その後の経緯は不明だが、1887（明治20）年に真言宗の別格準本山に列格し、1895年には境内地を上醍醐から下醍醐へと移した[4]。さらに、1900年には醍醐寺が真言宗醍醐派として真言宗から独立したことにより、醍醐派の別格準本山となっている[5]。

現在の旧光台院は、仁王門前を南北に通る道に表門を構える。表門は一間薬医門、切妻造、本瓦葺である。冠木より上部の構造に技巧的な特徴を持つ非常に興味深い遺構だが、今回は調査の対象としなかった。建立年代は虹梁絵様から19世紀前期と考えられる（写真11・12）。

本堂は表門の南東に位置し、現在は役行者を本尊とする。本堂前には、砂を敷き詰めた区画を設けて四隅に錫杖を立て、中央部に自然石に円形の造り出しを付けた礎石を据えている。

（２）旧光台院本堂について

今年度は、本堂の建築的価値を明らかにするため、平面の実測、改造状況と復原についての調査、棟札・関連文書などの調査、建立年代の確認、建築的特色の記録、写真撮影を行った。その結果を以下に示す。

旧光台院本堂

桁行三間、梁間三間、入母屋造、向拝一間、背面軒下張出付、桟瓦葺

昭和３年（1928　棟札）

角柱　切目長押　内法長押（正面中央間のみ切り上げ）頭貫　大斗肘木　中備なし　一軒半繁垂木　妻飾木連格子　向拝角柱　頭貫　木鼻　三斗枠肘木　実肘木　中備蟇股　一軒半繁垂木

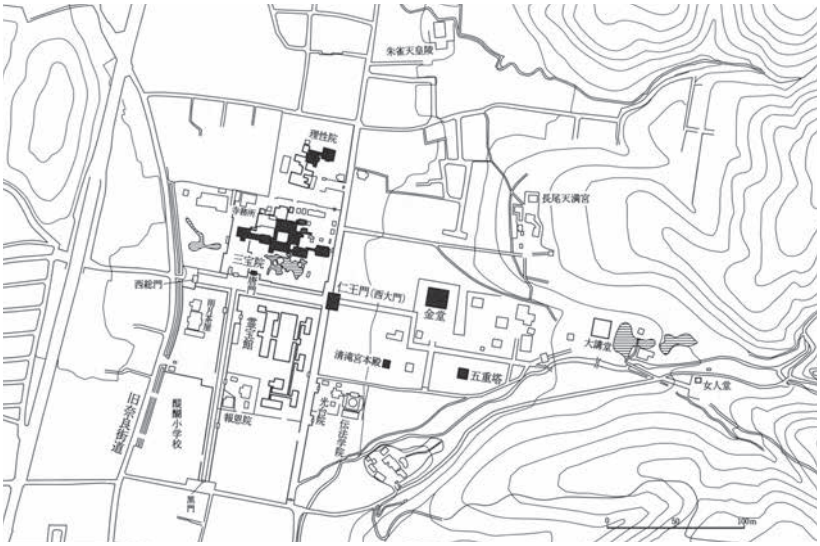


図１　下醍醐伽藍配置（『醍醐寺大観』第１巻　岩波書店　2002年より）

小規模な方三間堂である。梁行に比べ桁行の柱間を大きくとっており、横に長い長方形平面となる。開口部は、正面中央間のみ双折れの板唐戸で、他は舞良戸を入れる。

身舎は角柱上に大斗肘木を組むのみで、端正なつくりである。垂木は強い反りを持ち、下端にやや大きな面を取る。一方、向拝は、面取りの大きい角柱で、柱上に三斗枠肘木を組み、中備に大ぶりな蟇股を入れる。蟇股の彫刻は左右対称で非常に擬古的である。さ

写真11　醍醐寺旧光台院　表門正側面全景

写真12　醍醐寺旧光台院　表門軒廻り詳細

写真13　醍醐寺旧光台院　本堂正側面全景

写真14　醍醐寺旧光台院　本堂背側面全景

写真15　醍醐寺旧光台院　本堂軒廻り詳細

写真16　醍醐寺旧光台院　本堂向拝詳細

写真17　醍醐寺旧光台院　本堂向拝見返し

写真18　醍醐寺旧光台院　本堂向拝蟇股詳細

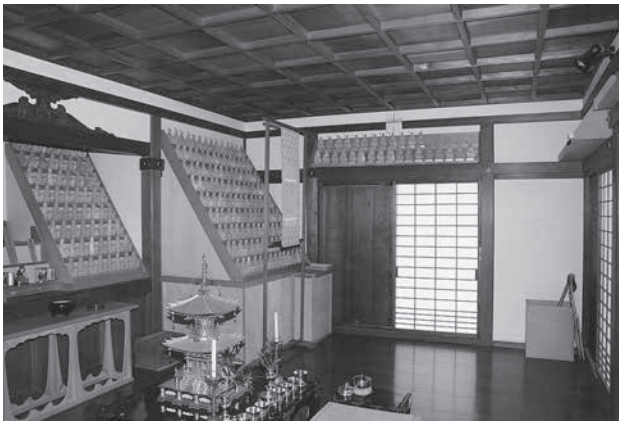


写真19　醍醐寺旧光台院　本堂内部

写真20　醍醐寺旧光台院　本堂内部蟇股詳細

写真21　醍醐寺旧光台院　本堂小屋組

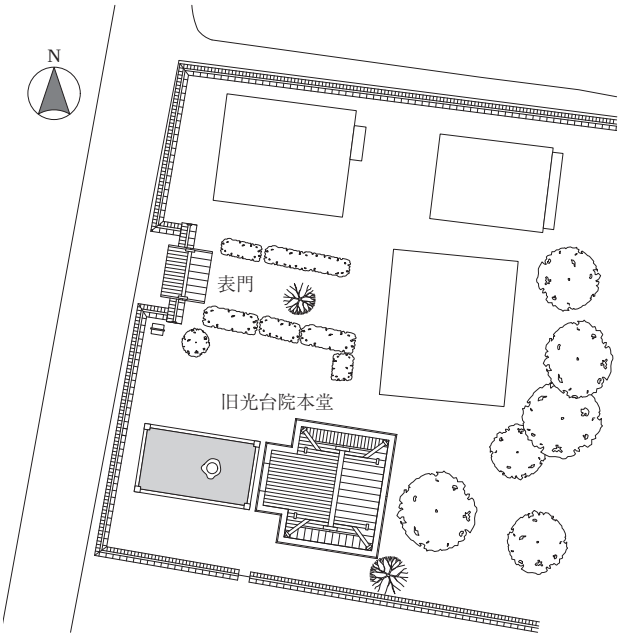


図 2　醍醐寺旧光台院　配置

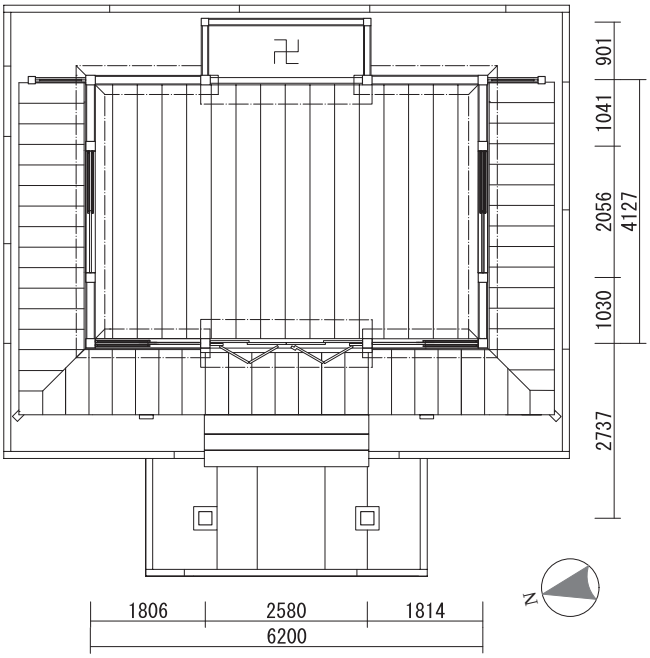


図 3　醍醐寺旧光台院　本堂平面

らに、頭貫木鼻も上下端を伸ばした、近代の寺社建築によく見られる形状となっている。

内部は一室で、背面中央部に張出を設けて壇をつくり、役行者を祀る。背面中央間のみ実肘木と蟇股を一体としたような形状の蟇股を入れる。本尊の両脇、および壇の左右には階段状の棚を設けて、多くの役行者の木像を安置する。

小屋組は、移築の際の修理によって大きく材が取り換えられている。だが、母屋・棟束・野垂木などは新しくなっているものの、修理前の本堂に使用していたと考えられる隅木などは、桔木や母屋などに転用されて現存している。

建立年代は、棟札から1928（昭和３）年であることが判明する（図４）。向拝の蟇股や木鼻の擬古的なつくりはその裏付けとなろう。醍醐寺では、1930年に醍醐天皇千年遠忌を執り行うにあたって伽藍内の諸建物の造営・整備を行っており、この建物もその一環として行われた可能性がある。

小規模な仏堂だが、醍醐寺の近代の歴史を明らかにする上で重要な遺構であるとともに、近代の擬古的な意匠を用いた寺社建築の事例としても貴重である。

注

（１）醍醐寺の歴史と伽藍については、その概略を『京都橘大学 文化財調査報告 2012』（京都橘大学文学部　2012年）で述べたので、そちらを参照していただきたい。
（２）醍醐寺文化財研究所編『醍醐寺新要録』上（宝蔵館　1991年）。
（３）山岸常人『中世寺院の僧団・法会・文書』（東京大学出版会　2004年）。
（４）京都府宇治郡役所編『京都府宇治郡誌』（復刻版）（臨川書店　1984年）。
（５）『京都市の地名』。

※圓教寺については、『姫路市書寫山圓教寺調査報告書』2013年度　京都橘大学文学部歴史遺産学科を参照されたい。

棟札翻刻

棟札名の下に記した註記は、棟札の所在位置、棟札の寸法、木取り（柾目か、板目か）、材種、仕上げ工具である。棟札の寸法は、中央部長さ・端部の長さ・上幅・下幅・厚みの順にミリメートル単位で記した。

醍醐寺旧光台院本堂棟札　本堂小屋裏内棟束打付（取りはずさず）　707 690 165 134 7　柾目・檜・台鉋

（表）

上棟　昭和三年十二月十日
執行長　岡田戒玉
当主　水本良光
門跡大僧正　平野亮禅

（裏）

大六
設計監督　清水六郎太
（見えず）
「　」次郎　岸　清一　大西辰志郎
中野久太郎　丹羽小三郎
「　」三郎　西川浅吉　山川市太郎　岩渕亀三郎
岩渕藤三郎　沢井新太郎　高田勇造　北脇忠次

図４　醍醐寺旧光台院　本堂棟札

第３章

芦屋神社境内古墳墳丘測量・石室実測調査

１．芦屋神社境内古墳周囲の地理的・歴史的環境

2013年８月１日～同年９月３日に芦屋神社境内古墳墳丘と芦屋神社境内西側、伝猿丸大夫墓宝塔周辺の平板測量による調査、芦屋境内古墳石室と伝猿丸大夫墓宝塔の実測を行った。

芦屋神社は、六甲山南麓部兵庫県芦屋市東芦屋町20番３号にあり、古墳は境内の西端に位置する。

芦屋市は、旧国名では摂津の国の西側に位置し、旧武庫郡に所属した。芦屋市域の北に六甲山が広がり、南には大阪湾に面する。市域内には六甲山から流れる２本の主要河川があり、西に芦屋川、東に宮川がある。海岸部にはデルタが発達せず、芦屋川や宮川が形成した扇状地が冲積低地を広く覆っている。芦屋川扇状地は扇形の形態を示さず、海岸部へ舌状に張り出していることが特徴的である。芦屋川と宮川はともに人間によって流路の固定化がされており天井川化している。また、六甲山の恩恵による花崗岩が豊富な地域であり、周辺にある古墳群の横穴式石室の石材だけでなく、江戸時代には徳川氏が大坂城を築城する際に芦屋市内の花崗岩を使用している。そのため、刻印石が八十塚古墳群周辺に多く残る。

芦屋神社がある芦屋市の歴史が確認されるのは後期旧石器時代からである。該当する遺跡は、打出小槌遺跡、朝日ヶ丘遺跡、岩ヶ原遺跡があり、ナイフ形石器や刀器・彫器・尖頭器が出土する。縄文時代は朝日ヶ丘遺跡、芦屋廃寺遺跡、若月遺跡、山芦屋遺跡がある。なかでも山芦屋遺跡は西摂地域の中では縄文時代最古の遺跡であり、黄島式を特徴づける文様である押型文水平施文の縄文土器が出土する。弥生時代の遺跡としては寺田遺跡、業平遺跡、城山遺跡、会下山遺跡、三条岡山遺跡、三条

図５　芦屋神社境内古墳及びその周囲の遺跡分布

九ノ坪遺跡、寺田遺跡、芦屋廃寺遺跡、冠遺跡、月若遺跡、打出岸造り遺跡がある。堂ノ上では銅鐸が出土する。会下山遺跡では、長さ200m、幅15mの尾根上に竪穴住居７棟、掘立柱建物１棟、祭祀場跡２か所、土壙墓４基、焼土坑３基など多数の遺構が検出される。

古墳時代では西側の神戸市に３世紀に西求女塚古墳が築造される。鏡12面などが出土した。その他、会下山二本松、夢野丸山古墳、得能山古墳といった前方後円墳が築造され、４世紀には武庫川左岸に水堂古墳や、万籟山古墳が築造される。

芦屋市内では阿保親王塚古墳が築造される。これは宮内庁よって平安時代初期に活躍したという「阿保親王墓」として治定されている。阿保親王古墳周辺には古墳６基があったことが江戸幕府による『五畿内志』のうちの「摂津志」の記述によって考えられるが、現在では阿保親王古墳のみが遺存する。

また、阿保親王塚古墳は周囲356mの方形区画内にあり、径36m、高さ約３mの円墳であることが測量図からうかがえる。出土遺物として、鏡７面の出土が記され、内３面が描かれるが、現存するのは、完形２面と破片２個である。阿保親王墓とされるが出土鏡などから４世紀中頃の時期と考えられる。

さて、金津山古墳は芦屋市春日町に所在する、帆立貝式古墳であり規模は、墳長55m、後円部径42m前方部長13m、前方部幅18m、残存部高は6.5mである。周濠は、前方部前面側３m、くびれ部付近11m、後円部側７mであることが推定されている。円筒埴輪や朝顔形埴輪が出土し、周壕底から出土した須恵器から５世紀末頃と考えられる。

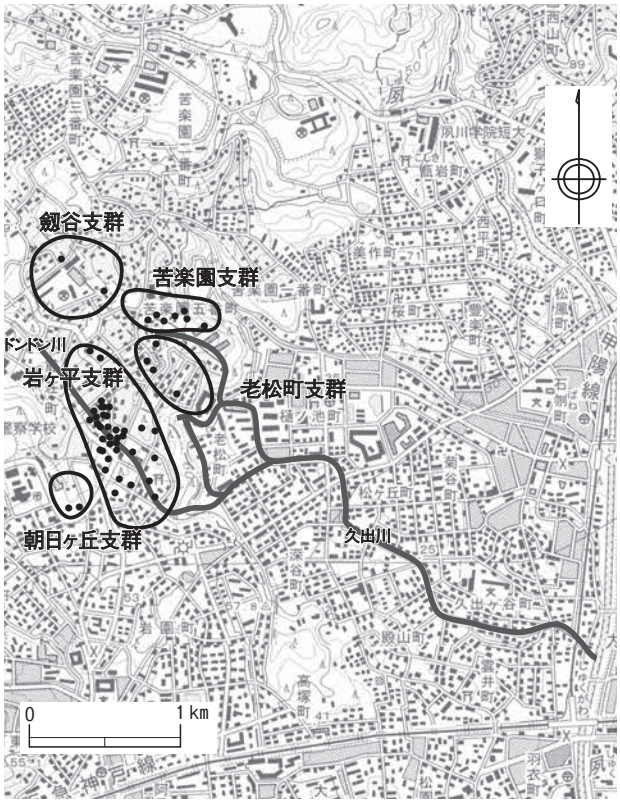


図６　芦屋八十塚古墳群　古墳分布

６世紀には芦屋市内において、笠ヶ塚古墳群、八十塚古墳群、城山古墳群、三条塚古墳群、翡翠ヶ丘古墳群、朝日ヶ丘古墳群などの横穴式石室を中心とする古墳群が築かれる。朝日ヶ丘古墳群からは、金製耳環などが出土する。さらに城山、三条古墳群からはミニチュア竈などが出土し、渡来系氏族に関係すると考えられている。

八十塚古墳群周辺は1929年以降に開発が進んで以降、多くの古墳が消滅してしまった。しかし、芦の芽グループの活動、芦屋市・西宮市教育委員会などの積極的な対応によって1960年以降は分布・測量・発掘調査等が行われている。現在では60基程度の古墳が確認されておりそのうち35基は発掘調査が行われた。また、近年では関西大学文学部考古学研究室などによってさらに調査が進んでいる。八十塚古墳群は、６世紀後半ころから７世紀前半頃まで築造されたと考えられる。古墳の分布範囲は広く、現在の芦屋市の北東から西宮市の西まで広がり、南方に派生する４本の尾根上に分かれて立地し、地形に則して北から剣谷・苦楽園・老松町・岩ヶ平・朝日ヶ丘の５支群がある。現在では、老松３号墳、岩園天神社境内岩ヶ平13・14号の２基、保護樹林公園内にある１基を見学できる。老松３号墳は径10mの円墳で、横穴式石室は全長6.34m、幅1.82m、高さ２m以上の右片袖式である。玄室はやや胴張り状で、1995年兵庫県南部地震の時に天井石が落下した。出土須恵器などから７世紀初め頃の築造となる。また、苦楽園支群では７世紀以降に築かれた終末期の古墳が目立つ。さらに、岩ヶ平１号墳からは、陶棺が出土する。

さらに、芦屋川の西側にある旭塚古墳も跡地ではあるが見学できる。旭塚古墳は1961年に小林行雄によって石室内部が発掘調査され、その後2007年には芦屋市教育委員会によって石室内部や墳丘の一部が再発掘調査された。古墳は７世紀中頃に築造された特異な構造、墳形をもつ。墳丘裾は石積みを行って多角形に作り、内部に横口式石槨の影響を受けた横穴式石室が構築される。石室は全長9.8m、玄室長4.1m、幅2.1m、羨道は長5.7m、幅1.6m残存高2.1mを測る。石室の一部などに竜山石が多く用いられている。

古墳時代の集落遺跡としては、弥生時代から続くものが多くみられ、４世紀頃の寺田遺跡、三条九ノ坪遺跡、芦屋廃寺遺跡、月若遺跡がこれにあたる。住吉宮町遺跡では竪穴住居、木棺墓が検出される。森北町遺跡では搬入土器が多数出土する。５世紀頃に入ると月若遺跡、寺田遺跡が継続する。芦屋市外周辺において多くの集落が出現することから、この時期に大規模再編されたと考えられる。また、寺田遺跡からは西摂地域における初現期の竈が検出される。６世紀は引き続き月若遺跡、寺田遺跡が営まれるが、この時期の特質として、全般に竪穴住居から掘立柱建物へ移行することがあげられる。

飛鳥～平安時代の遺跡は、寺田遺跡、月若遺跡、三条九ノ坪遺跡があげられる。寺田遺跡では、奈良時代末から平安時代前期頃の倉庫群とみられる掘立柱建物や柵跡、溝などが検出され、瓦は白鳳期のものが出土する。三条九ノ坪遺跡では寺田遺跡と同じく奈良時代～平安時代前期頃の掘立柱建物などの遺構が検出され、さらに灰釉陶器、石帯や木簡などの遺物が出土する。これらの遺跡は「葦屋駅」との関連が考えられている。また、芦屋市内では、飛鳥時代の寺院は確認されていないが、白鳳期には芦屋川扇状地上に芦屋廃寺がある。白鳳期法隆寺系瓦が出土する。さらに、1692（元禄５）年刊『寺社御改委細帳』に記されている、行基によって建立された塩通山法恩寺の伝承が芦屋廃寺に該当すると考えられている。

鎌倉、室町時代の遺跡は、芦屋市三条岡山遺跡、津知遺跡、鷹尾城、城山南麓部遺跡、大原遺跡、打出小槌遺跡、打出岸造り遺跡、月若遺跡、冠遺跡等があげられる。三条岡遺跡では龍泉窯系青磁が出土する。津知遺跡では室町時代の井戸、集石遺構、水田跡、河川跡などが検出されるだけでなく、土器などの日常雑器も多数出土している。鷹尾城は室町時代の山城であり摂津地域の土豪である瓦林政頼によって築造された。城山南麓部遺跡は鷹尾城の城郭の一部であるとともに、同時期の集団墓が検出された。このころになると水田が盛んに営まれるようになり、大原遺跡、打出小槌遺跡、打出岸造り遺跡、月若遺跡、冠遺跡で検出される。なかでも冠遺跡は標高50mの高い台地上にありながら犂溝が検出される。

近世では、芦屋地域はまず豊臣氏の直轄地となり、その後、江戸時代になると徳川氏の直轄地になった。この時期の遺跡としては月若遺跡、徳川大坂城東六甲山採石場として芦屋呉川遺跡があげられる。月若遺跡は江戸時代中期に酒つくりの際に使用されたと考えられる半地下式の竈が検出される。芦屋呉川遺跡は採石場から大坂城への石材海送ルートの中間地点となる。また、八十塚古墳群の石室の使用石材もこの時期に抜き取られている。

２．芦屋神社境内の測量基準点の設置

芦屋神社境内での平板測量を20cmコンター、縮尺は1/100で作成するため、基準点を設置した。

基準杭は世界測地系に基づき3-1から4-9までの計16本を設置した。以下にそれぞれの杭の座標を記しておく。

3-1　：X＝-139092.761　Y＝88819.811　Z＝81.020
3-2　：X＝-139101.538　Y＝88792.598　Z＝81.948
4-1　：X＝-139086.202　Y＝88843.566　Z＝80.348
4-2　：X＝-139052.897　Y＝88837.694
4-3　：X＝-139069.142　Y＝88766.754
4-4　：X＝-139056.720　Y＝88756.526
4-5　：X＝-139044.534　Y＝88750.676　Z＝87.524
4-6　：X＝-139049.295　Y＝88740.133　Z＝87.070
4-7　：X＝-139069.500　Y＝88746.021　Z＝87.711
4-8　：X＝-139081.818　Y＝88745.259　Z＝83.982
4-9　：X＝-139073.061　Y＝88777.031　Z＝84.055
4-5-1：X＝-139049.225　Y＝88752.863　Z＝86.326
4-5-2：X＝-139045.803　Y＝88747.957　Z＝86.736
4-8-1：X＝-139070.614　Y＝88746.253　Z＝84.837
4-8-2：X＝-139074.412　Y＝88745.851　Z＝84.709
4-8-3：X＝-139077.839　Y＝88745.488　Z＝84.255

以下には調査を行った、墳丘、石室、境内の順にその成果と所見を述べていく。

３．芦屋神社境内古墳周辺測量調査成果

（１）墳　　丘

調査方法

墳丘の測量調査は他の部分と同じく平板測量で行い、測量図は20cmコンター、縮尺１/100で作成した。

立　　地

当古墳の墳頂部の標高は約87.75mである。古墳周辺は芦屋川と宮川の形成する扇状地の扇頂部付近の斜面上に位置しており、背後に広がる六甲山麓から南側の大阪湾へ向かって傾斜している。これらのことから大阪湾への眺望が開けており、さらに石室の開口方向もほぼ南向きであることからこのような立地を意識していたことが考えられる。また、北東の山麓には八十塚古墳群をはじめとする、同時期に築造されたと思われる古墳が多く分布している。当古墳は、神社の敷地内ということもあり単独で分布しているように見られるが、本来は八十塚古

墳群なども含めて周辺一帯に後期群集墳が分布していた可能性がある（図７）。

墳　　丘

墳形は円形であり、径19.0m、高さ3.5m、周溝（掘割）を含めた全長は24.5mとなる。以下に各部分の詳細を述べる（図９）。

北東側の参道と建物の間の約５m四方の部分には旧地形が残っており、コンターが古墳に沿って円形に回るのでこの部分も墳丘の盛土であるとし、残っている旧地形の一番下のT.P.84.4mのコンター付近を墳丘裾とした。また、南側墳丘は、石柱列や参道などの神社関連施設の造成による改変を受けており、不明瞭であるがT.P.84.2mのコンターを南側の墳丘裾とした。両方とも、本来はさらに墳丘裾が広がる可能性がある。西側と東側は現状では神社関連施設の造成や近接する住宅地のコンクリート塀などによって削平・改変されている。特に墳丘東側のT.P.85.4～87.4m付近には、木板を木杭によって固定されている状態の土留めが７～８段設置されており、この部分のみ不自然な急傾斜になっている。本来は現状よりも東西に墳丘盛土が続いていたと考えられる。北側は、T.P.86.0mよりも北方は神社関連施設などの影響で平坦地となっており、古墳築造時の丘陵切断痕跡などは確認できないが、測量図の様子から古墳に沿うように敷設された参道が丘陵稜線部との切断痕であったと考えられる。現状の墳丘は、北側T.P.86.2m、南側T.P.84.8m付近で墳丘の傾斜が急になり、径9.5m程が土饅頭状に盛り上がっており、この部分は本来の墳丘盛土を残していると考える。その周辺の旧地形は上部の墳丘より緩やかな斜面を形成しており、土饅頭の土台のように見える。墳丘盛土が残っている部分は截頭円錐形になり、墳頂部に平坦面が見られない。現状では北側より南側の墳丘のほうが高い。

石室の前面部分での旧状については、神戸深江生活文化史料館の藤川祐作氏が50年程前に撮影された芦屋神社境内古墳の４枚の写真の提供を受けた。南側から撮影されたものが１枚、南東側から撮影されたものが２枚、東側から撮影されたものが１枚である。墳丘東側は現在では住宅地が墳丘裾付近まで迫っており、著しく改変されているので、南東・東側から撮影された３枚の写真は、削平される以前の墳丘の様子がわかるという点で大変貴重である。これらを見ると墳丘東側は墳頂部から緩やかに傾斜していることがわかる（写真22～25）。

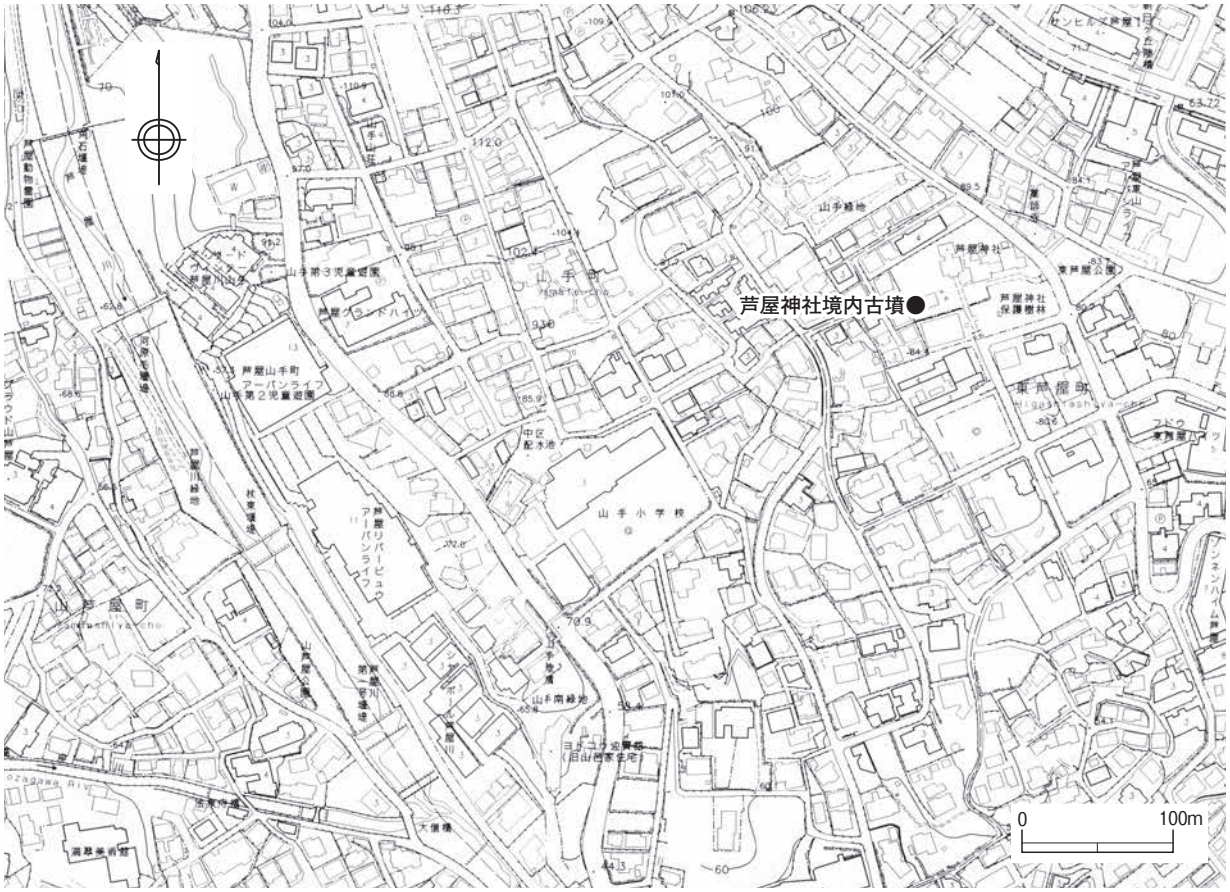


図７　芦屋神社境内古墳位置

外表施設

葺石・埴輪・外護列石などは見られない。

北から北東側に古墳に沿うように幅約２ｍの半円形の参道が通っており、古墳に伴う周溝であった可能性がある。また南側の石室に続く参道付近は、この部分だけレベルが低くなっており、さらに南側の旧地形が残っている部分になるとレベルが高くなるので、参道付近に幅約２ｍの掘割状の周溝がめぐっていた可能性がある。テラスについては明確には指摘できないが、北東側の旧地形のＴ.Ｐ.84.6～85.2mの部分と南側のＴ.Ｐ.84.2～84.6mの部分が、上部の墳丘盛土の急斜面よりも緩やかな斜面になっているので、この部分に幅約２ｍのテラスがめぐる可能性がある。

内部構造

埋葬施設は南方向に開口する横穴式石室である。平面プランは右片袖式である。詳細は石室の項目で述べる。

周辺地形

古墳の南側の参道のさらに南に、南北約５ｍ、東西約12mの範囲に旧地形が残っている。この部分は、古墳に沿うように幅約５ｍの帯状地形となっており、古墳築造時の削り残しの痕跡である可能性がある。この帯状地形より南側は建物により削平されているが、建物の西側にわずかに旧地形が残っており、南に向かって緩やかに下がっていく（図９・10、断面ｅ－ｇ）。これらのことから当古墳は、北から南に向かって緩やかに傾斜する丘陵上に築造されたことが確認できる。

神社関連施設など

当古墳の北・東・南側には境界を区画する目的があると考えられる石柱列が設置されている。この石柱列は西側のコンクリート塀と合わせて台形状に墳丘を取り囲む。北辺約13m、東辺約15m、南辺約７ｍである。ただし、南側の石室入口付近は石柱列が途切れている。石柱は径約0.15～0.16mのものが多く、それぞれの角には他の部分より大きな石柱が使われており、径約0.2～0.25mを測る。古墳の北・南側の参道は幅約２ｍであり、北側のものは古墳に沿って円形にまわっている。

採取遺物など

今回の調査では遺物を採取することはできなかった。

（２）芦屋神社境内古墳横穴式石室

調査方法など

横穴式石室については手測りの実測調査を行い、縮尺１/10の図面を作成した。以下に、芦屋神社境内古墳の

写真22　芦屋神社境内古墳

写真23　芦屋神社境内古墳

写真24　芦屋神社境内古墳

写真25　芦屋神社境内古墳

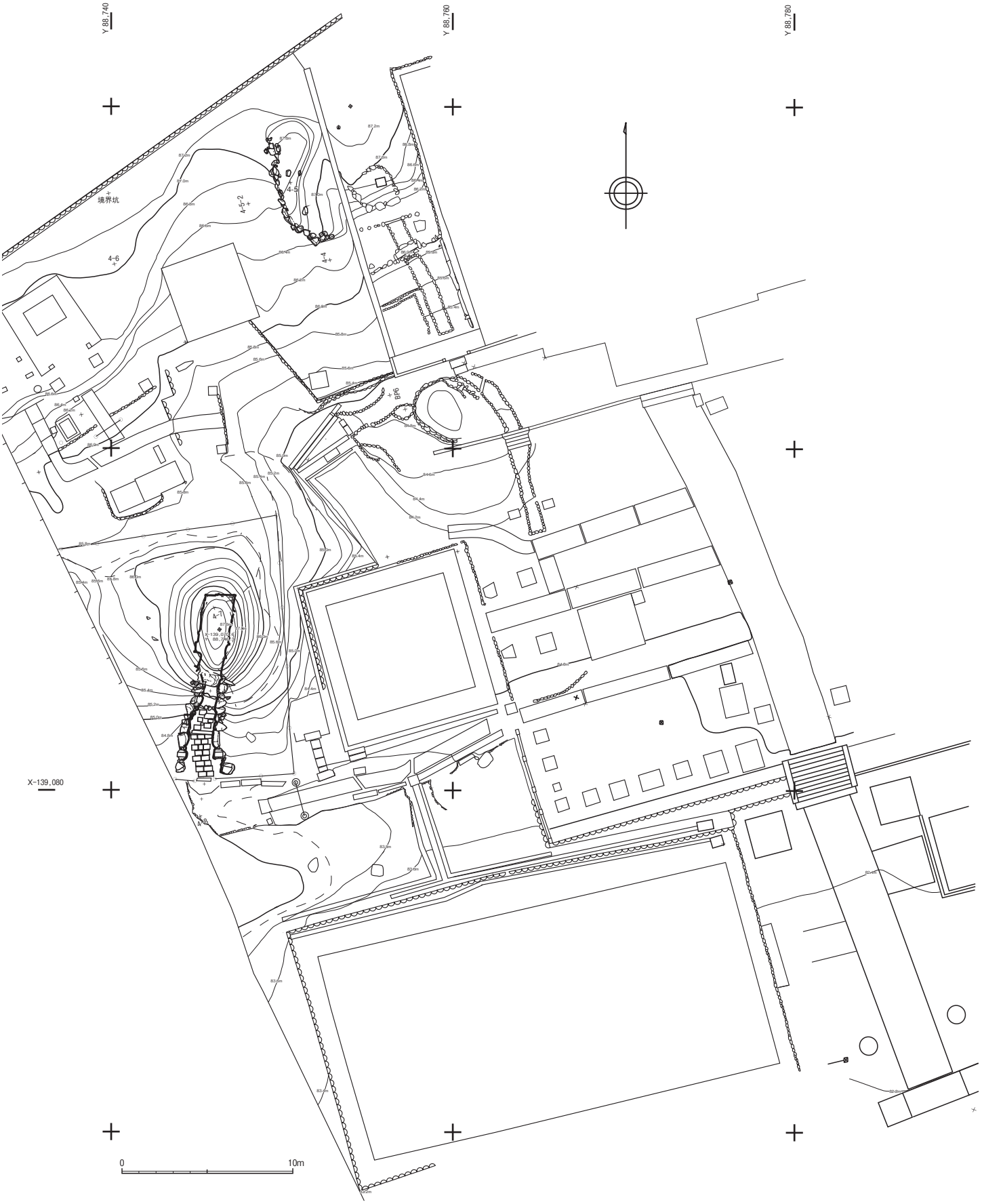


図 8　芦屋神社境内古墳　墳丘及び境内西半

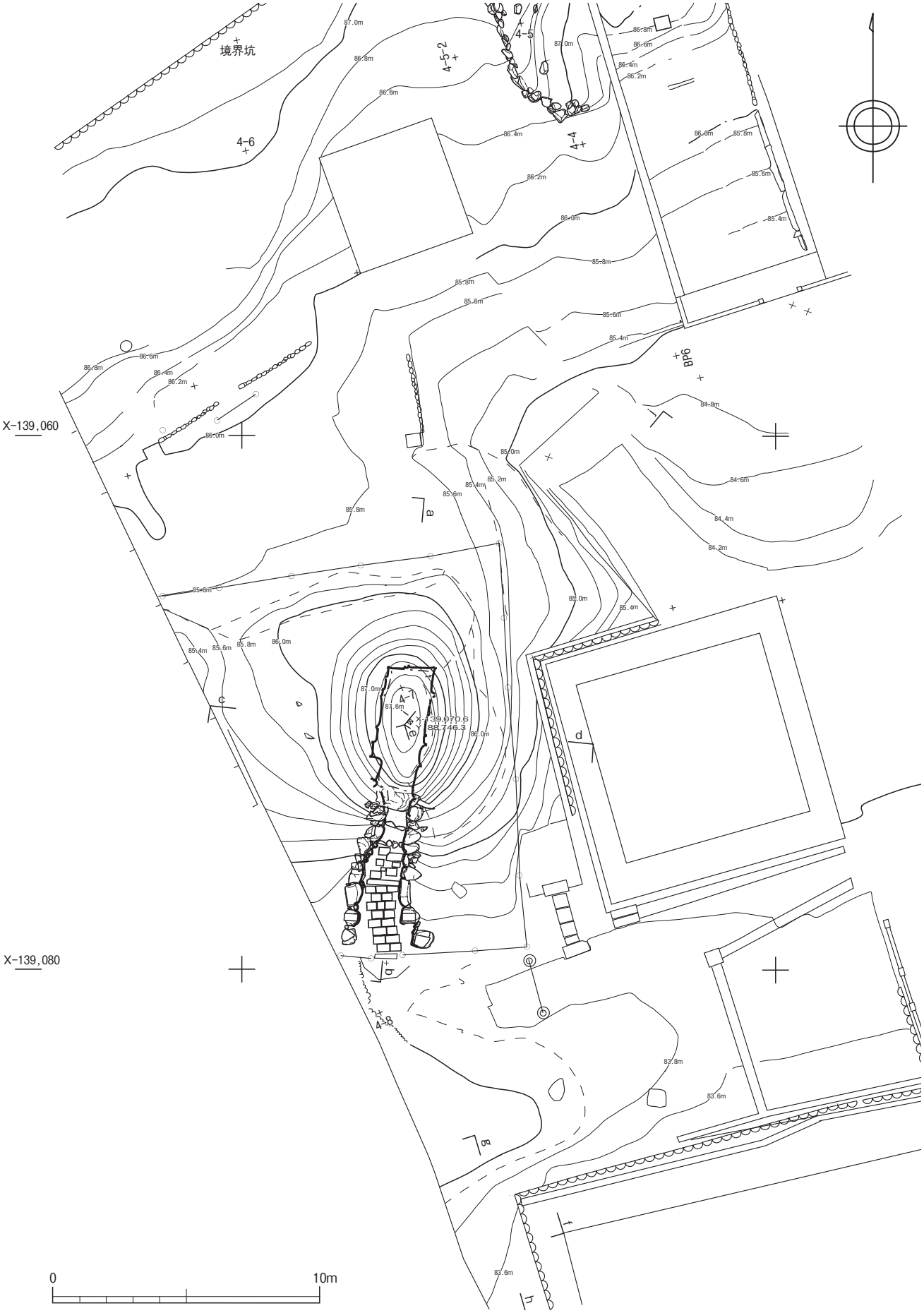


図 9　芦屋神社境内古墳　墳丘

横穴式石室実測調査の成果を報告する。

基本データ

玄門～玄室付近は天井石まで残っており、残存状況は良好であるが、羨道は全体的に残存状況が悪く、残存する石材も参道敷設などによる後世の改変があり、築造当時の様子が残っているとは言い難い。その中で羨道左側壁の玄門から南へ２ｍほどの地点までは石積みがよく残っているように見えるが、これらの石の裏には本来あるはずの裏込めの土などが認められなくなっており、不安定な状態で積まれている。このことから、後世に積み直された可能性が高い。床面も石畳や川原石敷きやコンクリートなどでかなり改変を受けている。これらのことを踏まえ、羨道は南端の石燈籠の乗っている石材付近まで実測した。以下に各部分の基本情報・数値を整理する。

平面プラン：右片袖式、玄室は平面長方形
主　　軸：S－8°－W
全長（現状）：約10.4m
羨　　道：長さ（現状）6.2m、幅（北端）1.2m・（南端、石燈籠付近）2.0m
玄　　門：幅1.4m、高さ1.2m
前　　壁：幅1.2m、高さ0.8m
玄　　室：長さ3.6m、幅1.7m、高さ（最大）2.1m
使用石材の種類：黒雲母花崗岩Ａ・花崗斑岩・石英斑岩・輝石安山岩の４種類の石材が使用されており、すべて自然石である（奥田尚氏の鑑定による〔第６章参照〕）。

平面プラン

右片袖式で玄室は平面長方形である。羨道は改変されているが、袖石から2.3m程南に進んだ部分から、羨道幅が開いていく。玄門幅は玄室幅の約４分の３になる。

羨　　門

現状では神社関連施設による改変により、どの部分が羨門に相当するのか不明瞭である。

羨道右側壁

袖部から階段付近の側壁は、石材の底や隙間に土が充填されており、後世の改変を受けている。袖部付近の壁面は南側から見ると土砂の影響かやや外反しているように見える。玄門付近の床面の階段部分から石燈籠の乗る石材までは、大きさ0.3～0.9mの石材がほぼ一列に並んでいる。石材の多くは横置きである。今回の調査では床面は未検出であり、現状で確認できる石材の下にさらに石材が存在する可能性もあるので、これらの石材が壁面の石積みのどの部分に該当するのかは不明である。階段を下りた付近には、大きさ0.1～0.2mの他の部分と比べて小形の石材が集積している。石材の状況から石室の閉塞石の可能性があるが現状で区別できない。閉塞石であるとすれば、この付近が羨門の可能性が高い。また、この付近から石列が西方向にわずかに広がり、床面の幅が開いていく。

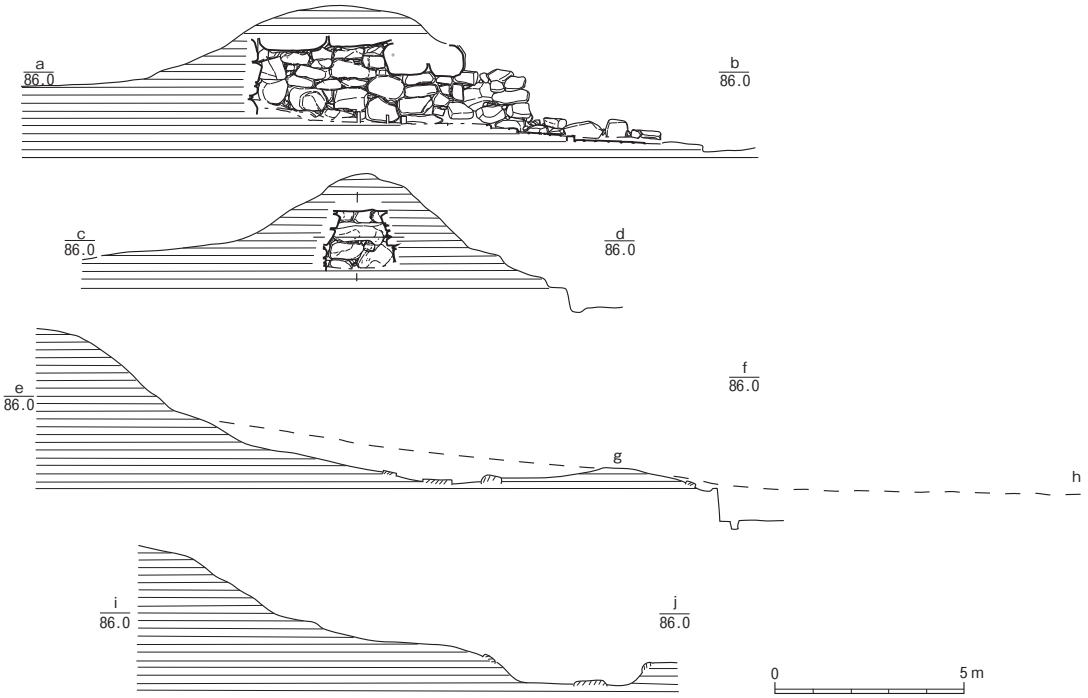


図10　芦屋神社境内古墳　墳丘断面

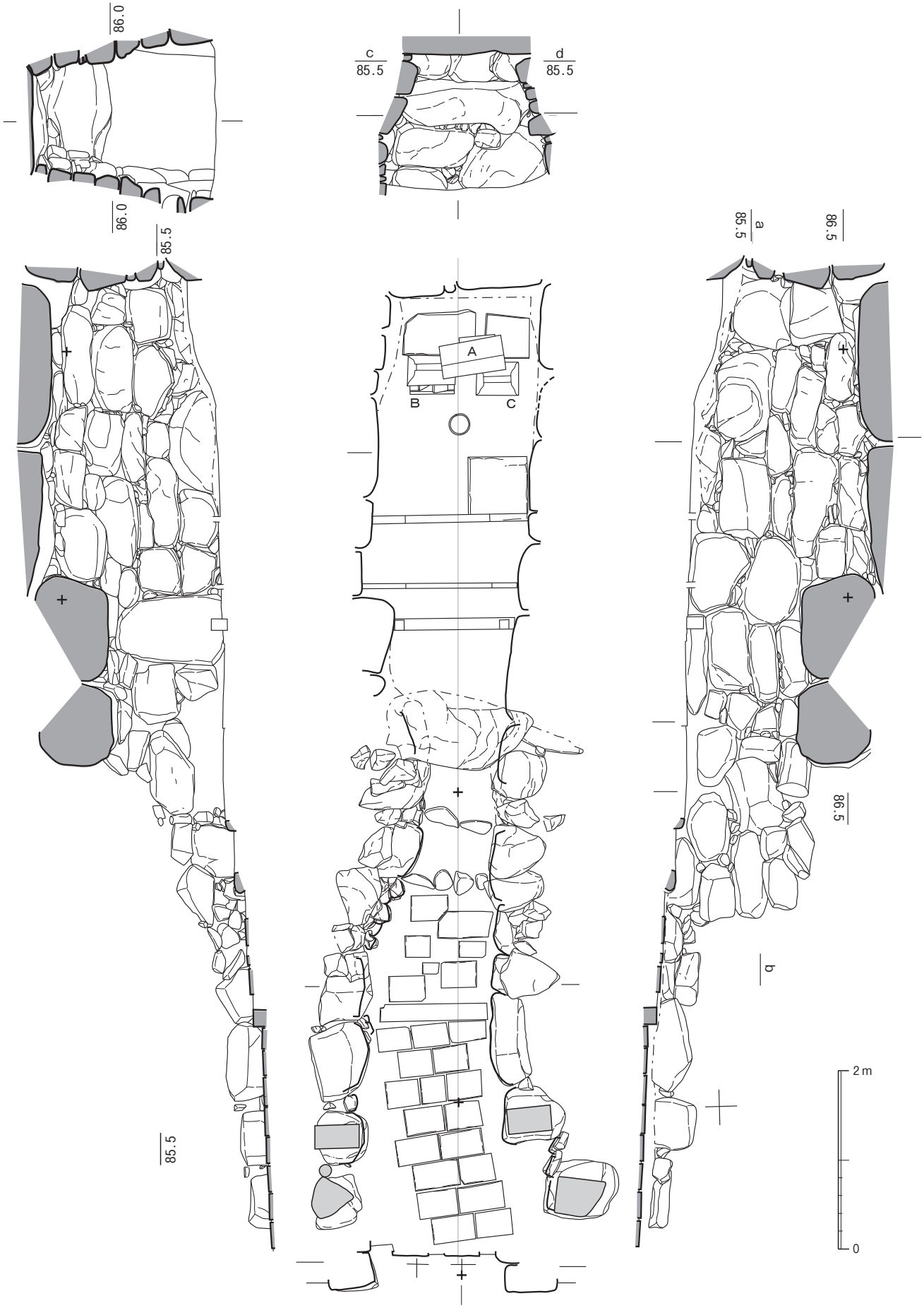


図11　芦屋神社境内古墳　石室

羨道左側壁

玄門から南に約３ｍまでは一見壁面の石積みが良く残っているようだが、これらの石積みの裏側には裏込めの土がなく、特に上部の石は不安定であり、後世の改変を受けて積み直された状態である可能性が高い。現状では、３～４段ほど数えることができる。石材は基本的に横置きであるが、天井石下付近の壁面の中央付近の石材には縦方向で置かれているものがある。0.3～0.8mほどの石材を主に使い、それらの隙間に0.1～0.2mの小形の石が充填されている。小形の石は、大形の石の隙間にしっかりと積まれており同時並行で積まれていったと考えられる。玄門付近の床面の階段を下りた付近の壁面から、それまでとは一変し壁面の石積みが、最下段（ただし床面は未検出であり、これらの下に石材が存在する可能性もある）を除いて消失している。現状での最下段は、0.2～1.0mの石材を小口積みした１段の石列が並び、右側壁と類似する状況を呈する。右側壁は階段を下りた付近に小形の石材の集積があり、同付近から幅が広がっていくが、左側壁はそのような傾向が見られず、玄室左側壁に引き続き南へ直線状に伸びていく。

羨道天井部

天井石は前壁に接する幅約2.0mの石材１石のみが残存する。石材上部の墳丘盛土は流出している。

玄　　門

右側の袖部は高さ1.2m、幅0.75mの巨石１石を立てて玄門立柱状にしている。玄門幅は玄室幅の約４分の３である。

前　　壁

高さ0.7m、幅1.1mの巨石１石を小口積みし、石材上部両端の隙間に大きさ0.2m程の石材を挟み込むように積んでいる。

玄室右側壁

現状で６段程が確認できる。最上部の１段を除いて基本的に0.5～1.0mの石材を横置きし、それらの隙間に0.1～0.4mの小形の石材が充填されている。ほとんどの小形の石材は大形の石材を固定するために同時並行で積まれていったと考えられるが、中には触ると動きそうなものもあり、積み上げた後で隙間に挟み込むようにして設置されたものも存在する可能性がある。下から３～４段目付近から持ち送りが生じる。持送りの角度は奥壁付近で約60°あり、玄室左側壁より約10°急傾斜である。また、玄門付近の持送りは右・左側壁ともに70～80°であるが、奥壁に近くなるほど持送りが急になっていく。最上段はほかの部分と異なり、0.2～0.3mの扁平な石材を横置きしている。下から４段目と袖部立柱石の上部が一致する。

玄室左側壁

現状で５段程確認できる。基本的に大きさ0.5～1.0mの石材を横置きにし、隙間に0.1～0.3mの小形の石材を充填しているが、最下段に使われている石材は、他の部分より大形で方形に近いものが多い。小形の石材は右側壁と同じく大形の石材と同時並行で積まれていったと考えられるが、右側壁と同様に触ると動きそうなものもある。下から３段目付近から持送りが生じる。その角度は奥壁付近で70°あり、右側壁よりも若干緩やかである。また、奥壁付近ほど持送りが急になっていく。持送りが生じる箇所のレベルは右側壁とほぼ一致する。

奥　　壁

現状で４～５段確認できる。下から１～２段目は大きさ１～４ｍの石材を横置きにしており、その隙間に0.2～0.5mの小形の石材を充填している。下から２段目と３段目の間には0.1m程の小形石材が６～７石積まれている。下から３段目は縦約1.5m、横約3.5mの巨石１石を横置きしている。最上段は下段と異なり、0.3～0.4mの石材が３石置かれている。両端の２石の積み方が特徴的である。この２石はそれぞれ両側壁の角と接している。本報告では奥壁の石材としたが、側壁の石材であると見なすこともできる。これらのことから両者に架けてドーム状にしていたことがわかる。また奥壁上部の天井石との配置の関係から、３石が天井石より後に積まれた可能性を読みとれる状況にある。さらに実測図中に表記できていないが、天井石と３石の上部の隙間には、0.1～0.15mほどの小形の石材が挟み込まれ、持送りの影響による調整などの目的で配置されている可能性がある。

玄室天井部

大きさ約４ｍの石材２石で構成される。奥壁最上部の石材とのかみ合わせ方から、奥壁完成以前に設置された可能性がある。

墳丘との関係

墳丘と石室との関係を表わすために、図10に断面図を作成した。そのうち、南北方向に割った断面ａ－ｂを見ると、現状では石室が墳丘の大部分に及んでおり、墳丘盛土の多くが流出している可能性がある。東西方向に割った断面ｃ－ｄを見ると、石室は墳丘のほぼ中央に位置している。また、現状での玄室床面付近はT.P.85.0m付近になり、側面側の墳丘では墳丘裾付近にあたる位置

に石室が築造された可能性が考えられる。

神社関連石造物など

現状では古墳そのものが神社として祀られているため、石室内部には複数の神社関連石造物が配置されている。羨道部は床面が参道として改変されており、床面全体に敷石が施されている。玄門～玄室南側には木製扉と２本の木枠が設置されている。玄室奥壁から南に約２mの範囲には３つのラントウが設置されている。ラントウの下と北側の木枠の東側には一辺約１～２mの薄い石材が置かれている。これらより0.3m程南の入口側には、ラントウに関連すると考えられる径0.5mの台石状の石材が置かれている。

特　　徴

芦屋神社境内古墳の横穴式石室の特徴として、奥壁最上段付近の構造があげられる。特に奥壁最上段の石材と天井石の積み方から、天井石が奥壁完成以前に設置された可能性があることと、最上段の３石の内、両端の２石の積み方が持ち送りを意識していると考えられることなどが特徴となる。

以上のように芦屋神社境内古墳の横穴式石室の実測調査成果をまとめたが、築造時期の判断や八十塚古墳群などの周辺の古墳の横穴式石室との比較検討などが十分に行えなかった。これらについては次年度に報告する予定である。

４．芦屋神社境内西半の状況

今回測量を行った神社境内西半の範囲を「芦屋神社墳丘周辺」「芦屋神社境内南」「芦屋神社境内中央」「芦屋神社境内北西」「芦屋神社境内内猿丸殿内」の５つに分けて説明する。

芦屋神社境内南

南は、芦屋神社最南端鳥居が境内中央へ入る階段手前にある。東に手水舎があり、西に参集所がある。鳥居と階段をつなぐ道は長さ17.0m、幅2.8mである。階段手前には2.2m×2.2mを測る大きい２基の花崗岩の石燈籠がある。これらには「昭和五（1930）年貳月拾壹日」の記念銘がある。鳥居は阪神淡路大震災からの復興を願い1999年に建てられた。鳥居南側の花崗岩の石燈籠には「昭和五（1930）年十月建之」の記念銘がある。

芦屋神社境内中央

本殿前道に入る階段は約幅3.3m、長さ2.5mであり全11段である。階段の最下段はT.P.82.480m、最上段はT.P.84.200mであり、約１m強程度の高低差がある。

本殿前面西南には、花崗岩の石燈籠が10基建てられる。石燈籠の大きさは様々であり最大のもので1.7m×1.2mであり、最小のものは0.6m×0.5mである。また、最西南に位置するものがこの区画内の最古の石塔であり「享保五庚子（1720）九月吉日」の銘がある。さらに、最古の北隣にあるものには「文政一三（1830）年寅年」の銘があり２番目に古い。さらに、最古の石燈籠から東に５

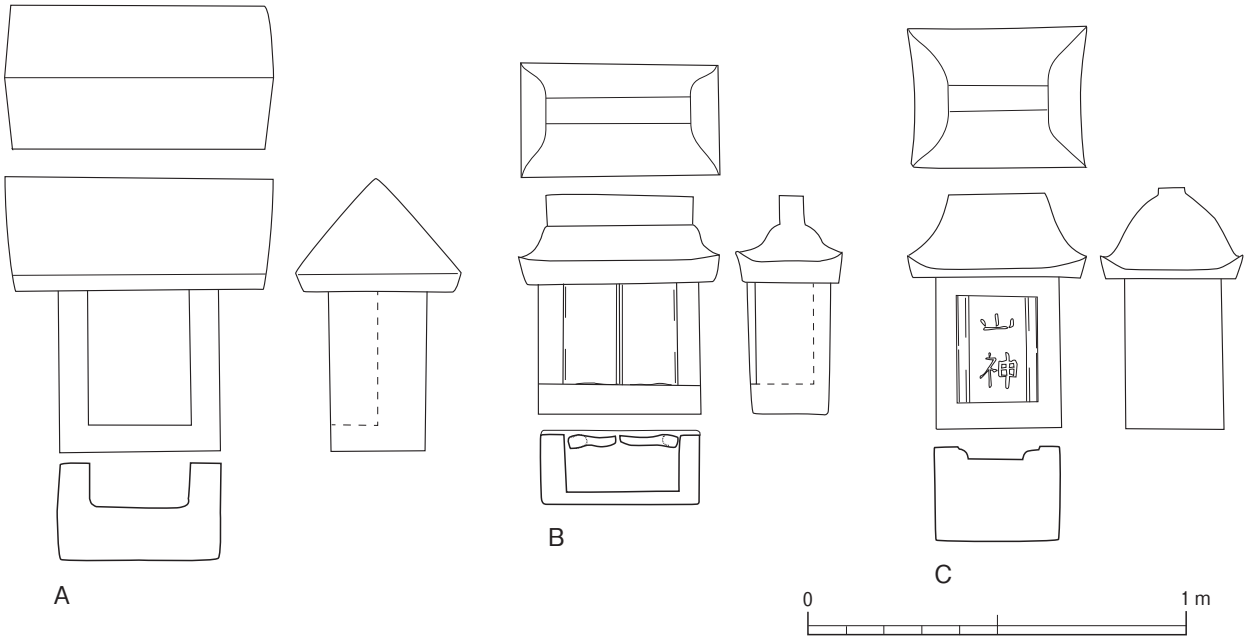


図12　芦屋神社境内古墳　玄室内ラントウ

写真26　芦屋神社境内古墳　遠景（南より）

写真27　芦屋神社境内古墳　石室前面（南東より）

写真28　芦屋神社境内古墳　墳丘東側面（東より）

写真29　芦屋神社境内古墳　墳丘北側面（北より）

写真30　芦屋神社境内古墳　東側裾（東より）

写真31　芦屋神社境内古墳　墳丘背面下段（北より）

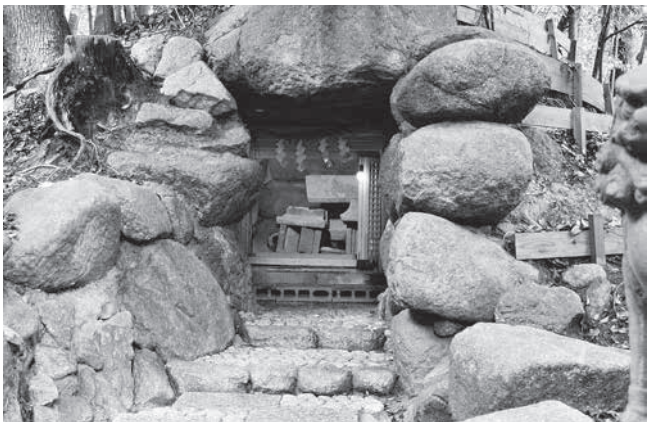


写真32　芦屋神社境内古墳　石室羨道から玄室内（南より）

写真33　芦屋神社境内古墳　玄室内ラントウ設置状況（南より）

写真34　芦屋神社境内古墳　石室前壁（北より）

写真35　芦屋神社境内古墳　石室奥壁（南より）

写真36　芦屋神社境内古墳　石室右側壁（東より）

写真37　芦屋神社境内古墳　石室左側壁（西より）

写真38　芦屋神社境内古墳　石室羨道左袖（北西より）

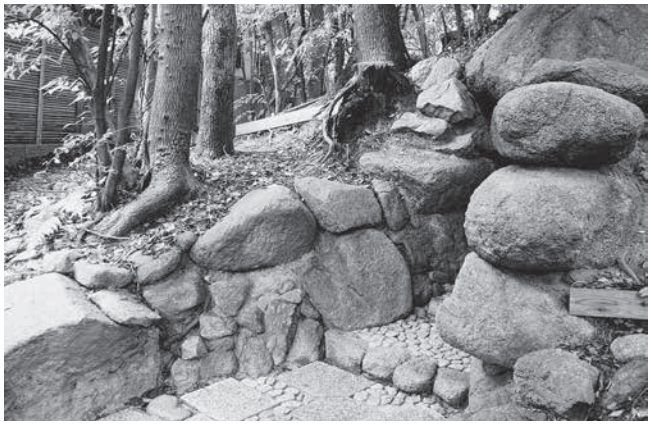


写真39　芦屋神社境内古墳　石室羨道右側壁（東より）

写真40　芦屋神社境内古墳
石室羨道（北より）

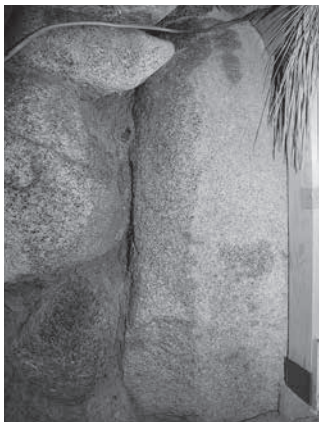


写真41　芦屋神社境内古墳　石室
羨門右袖石（北東より）

写真42　芦屋神社境内古墳
右側壁前面側（東より）

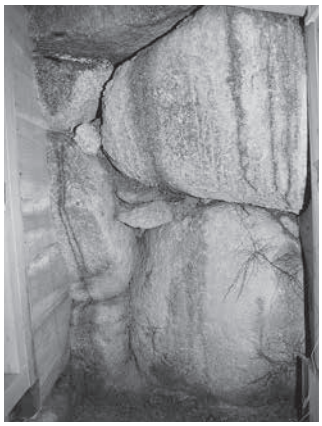


写真43　芦屋神社境内古墳
左側壁前面側（西より）

番目にある石燈籠が次に古く「明治二歳（1869）巳九月」の銘がある。また、その石燈籠の東隣にある石燈籠には「明治卅一（1898）年１月建之」の銘がある。

階段と本殿とをつなぐ道は、幅３ｍで長さは約25ｍである。その道より西側には、東西道が南北に３本結ぶ。そのうち中央の道の先には約10ｍ×10ｍの神輿庫があり、建物西半にある古墳墳丘の一部はこれに削平を受けている。建物の前には２基の狛犬が建つ。両狛犬とも基礎は花崗岩 であり狛犬本体は砂岩である。向かって右が高さ78.0㎝、左が高さ77.0㎝である。また、狛犬前には花崗岩の石燈籠が２基建っており、「弘化五戌申（1848）年正月吉日」と銘が刻まれている。最南の東への道は横穴式石室の入口、水神社へと伸びる。北側の道は途中、猿丸神社への階段道、芦屋神社境内北西への階段道に分岐している。また、猿丸神社前は庭園が広がり、この周辺から徐々に傾斜する。下降したところに狛犬が建ち、狛犬とも基礎は花崗岩 であり、狛犬本体は砂岩である。猿丸神社に向かって右が高さ78.0㎝、左が高さ70.0㎝である。

芦屋神社境内北西

北東には猿丸神社東側の土塀に沿って石垣がある。石垣は南北長さ約７ｍでゆるく東が高く西側に張り出す円弧を描く。高さは残りの良いところで1.0ｍ程度である。石垣は２段から３段に積まれる。石垣の南側には近世瓦の破片がはさまれている。石垣北側にはコンクリート片が入り込んでおり若干の削平が確認できる。北側に比べ南側は残りが良い。この石垣の西南西は備品倉庫があり、南側に権宮社がある。

境内北西には、社が３つある。１つは古墳墳丘裾にある祖霊社で東を向く。北側にある２つのうち東側が稲荷社で南を向く。その南東には鳥居があり石燈籠が建つ。鳥居、石燈籠の石種はすべて花崗岩である。鳥居の北西側の石燈籠は左右対になり「享和三（1803）年六月吉日」の銘が彫られる。北東にある出雲社の前には狛犬が建つ。狛犬の基礎には「文久二（1862）年壬戌二月」の銘が彫られ、花崗岩である。本体は砂岩である。社に向かって右が高さ66.0㎝、左が56.0㎝である。当範囲は社などの周辺は削平を受けており鳥居周辺は平たくなっているが石垣周辺は雛壇となって傾斜する。

芦屋神社境内猿丸神社内

猿丸太夫の墓とされる宝塔が建つ。鎌倉時代後期の花崗岩製である。全高は166.3㎝、相輪全高59.5㎝、宝珠径12.5㎝、請花（上段）径13.4㎝、九輪全高30.0㎝、請花（下段）径18.0㎝、塔身全高77.5㎝、露盤辺19.6㎝、笠辺53.2～54.2㎝、輪部全高49.8㎝、（首）径23.6～26.4㎝、（体部）径39.4㎝、基礎辺53.6・高26.8㎝。宝塔の周辺は石垣が築かれており高くなっている。宝塔前には玉垣

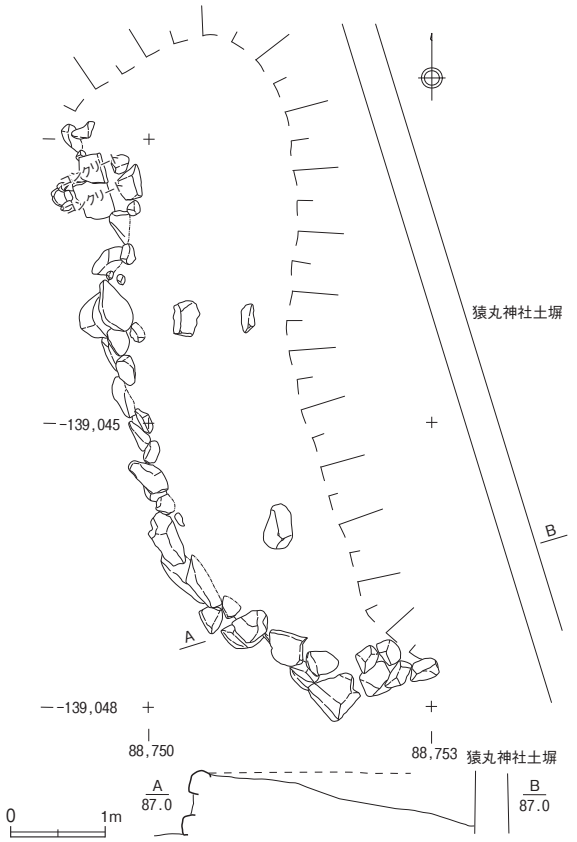


図13　芦屋神社境内古墳　猿丸神社西側石垣

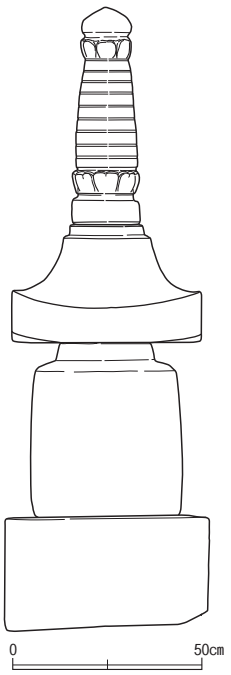


図14　芦屋神社境内古墳　猿丸神社宝塔

があり「大正六（1917）年五月建」の記念銘が彫られている。石種は花崗岩である。さらに手前には花崗岩製の石燈籠が建っている。

5．まとめ

今回の測量・実測調査によって得られた芦屋神社境内古墳の墳丘と横穴式石室の基本データをまとめる。

墳　　丘

墳形は円墳であり、径19.0m・高さ3.5mを測る。周溝の可能性を持つ範囲を含めると全長24.5mとなる。墳頂部の標高は87.75mである。墳丘の特徴として北側T.P.86.2mと南側T.P.84.8m付近から急傾斜になり、墳丘の中心部から径9.5m程が截頭円錐形の土饅頭状に盛り上がっていることがあげられる。北側と南側の墳丘裾付近の参道の状態から、周溝（掘割）を持つ可能性がある。

石　　室

南方向に開口する横穴式石室を１基持つ。石室の主軸はS－8°－Wである。平面プランは右片袖式であり、玄室は平面長方形である。各部分の現状での基本数値は次の通りである。全長（現状）10.4m、羨道長（現状）6.2m・北端幅1.2m・南端（石燈籠付近）幅2.0m、玄門幅1.4m・同高さ1.2m、前壁幅1.2m・同高さ0.8m、玄室長3.6m・同幅1.7m・高さ（最大）2.1mとなる。使用石材は、奥田尚氏の分析によると、黒雲母花崗岩Ａ・花崗斑岩・石英斑岩・輝石安山岩の４種類であり、すべて自然石である。石室の特徴として、持送りが見られることがあげられる。

芦屋神社境内古墳石室と芦屋八十塚古墳群石室との関係

図15に見るように、本墳から東方にある八十塚古墳群は全体に玄室が幅細い傾向がある。芦屋川を隔てて西にある城山古墳群の石室もまた幅細いものが多い。全体に両袖のものが幅２ｍとやや広くなり、芦屋川の西に単独で立地する旭塚古墳のものと、芦屋川の東にある本墳は同様に、畿内の標準的な１：２という比率になる。ただし、長さの方は群集するものに比べ突出するようなことはなく、平均的なものである。こうした石室規模の分布範囲を大きく逸脱しないことから考えて、周囲に古墳が存在した可能性は極めて高いであろう。

参考文献

芦屋市教育委員会1992『芦屋廃寺遺跡ほか発掘調査概要報告書』平成３年度国庫補助事業　月若遺跡第12次地点　月若遺跡第14次地点　八十塚古墳群岩ヶ平支群第50号墳

芦屋市教育委員会2007『八十塚古墳群・岩ヶ平石切場　岩ヶ平第45・46・58号墳と第108地点の発掘調査成果』芦屋市文化財調査報告第67集

芦屋市教育委員会2012『原始から近現代へ―土中からのメッセージ―』広報あしや考古連載記事にみる

関西大学文学部考古学研究室2002『八十塚古墳群の研究』関西大学文学部考古学研究第７冊

西宮市教育委員会1978『苦楽園の古墳』西宮市文化財調査報告書第２集

西宮市教育委員会2000『西宮市埋蔵文化財発掘調査報告書』西宮市文化財資料第44号

西宮市立郷土資料館1994『八十塚発掘』第９回特別展展示図録

武藤誠編1971『新修芦屋市史』本編　芦屋市役所

武藤誠編1976『新修芦屋市史』資料編　芦屋市役所

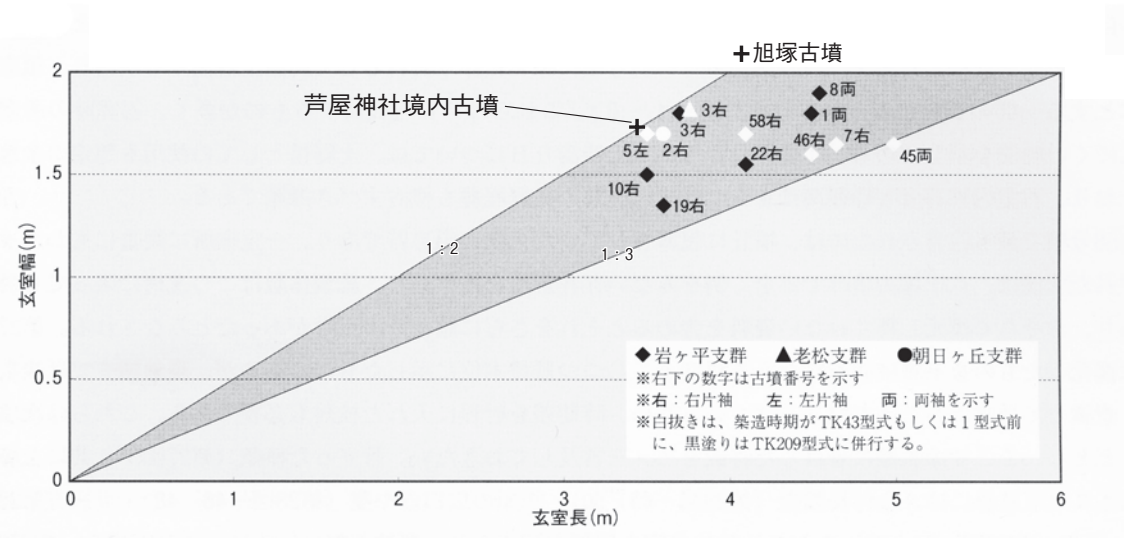


図15　芦屋八十塚古墳群（有袖式）　玄室幅・玄室長比率分布（芦屋市教育委員会『八十塚古墳群・岩ヶ平石切場―岩ヶ平第45・46・58号墳と第108地点の発掘調査成果―』に加筆）

第４章

鹿谷古墳群茶ノ木山支群18号墳測量調査

（ゴーランド・コレクション調査プロジェクト）

１．調査に至る経緯など

（１）鹿谷古墳群概要

鹿谷古墳群では、京都府亀岡市稗田野町大字鹿谷北部の行者山南麓丘陵の南北約1500m×東西約1400mの範囲に古墳が分布する。この古墳群は、東側の丘陵頂部から西に向かってのびる尾根の裾付近に分布する鹿谷古墳群茶ノ木山支群、同じ尾根の南側裾に集中して分布する鹿谷池田古墳群、反対の西側丘陵頂部に分布する稗田野西山古墳群、そして２つの丘陵の谷間から丘陵尾根稜線付近に分布する鹿谷古墳群大市支群の４つを合わせて鹿谷古墳群となる。明治時代にイギリス出身であり、日本考古学の父とされるウイリアム・ゴーランド（1842－1922）が調査を行ったことで著名であり、この時の調査によって得られた遺物がイギリス大英博物館にあるゴーランド・コレクションの中に保存されている。ゴーランド・コレクションとは、明治時代、ゴーランドが1872年から1888年の16年間に渡る日本滞在中に蒐集した須恵器・馬具などの実物資料、古墳の撮影写真・計測資料といった考古資料の一群である。

（２）調査に至る経緯など

今回の鹿谷古墳群茶ノ木山支群18号墳（以降18号墳と表記する）の墳丘測量調査は、現在、大英博物館の収蔵品を中心に進められているゴーランド・コレクション調査プロジェクトの一環として行った。このプロジェクトは、海外に所在する日本の古墳時代遺物の基礎資料化、及び調査記録データの共有化を通じて、日本の古墳時代研究の多様化・国際化を目指すものである。このプロジェクトでの主な作業は、イギリスの大英博物館所蔵ウイリアム・ゴーランド・コレクション内にある古墳出土資料の網羅的・総合的研究を行うとともに、ゴーランドが残した日本各地の古墳の測量図や写真記録についても、資料を観察・図化することであり、そうすることによって現在の古墳時代研究の水準で、ゴーランド・コレクションを再評価することを主な目的としている。この調査の目的の一つとして、ゴーランドが関わった日本国内の遺跡や古墳を詳細に調査することを掲げている（科学研究費：助成事業（基盤研究（Ｂ））「ゴーランドの古墳研究の総合的検証と古墳文化に対する国際的理解への活用」平成24年度～平成27年度、MEXT/JSPS KAKENHI Graut Number 2432016の助成による）。

鹿谷古墳群については、2010年８月・2011年８月に大市支群Ⅲ－１～５号墳の墳丘測量調査、2012年８月に大市支群Ⅳ－１・４号墳の墳丘と周辺の測量調査、2012年２・３・11・12月・2013年３月に18号墳の墳丘測量調査を実施している。ここでは、18号墳の墳丘測量調査成果を報告する。なお、鹿谷古墳群中の古墳の名称は、大市支群については龍谷大学考古学研究会が作成した分布図にて使用されている名称に従い[(1)]、18号墳をはじめとするそれ以外の群中の古墳の名称は亀岡市史にて使用された名称に従う[(2)]。

２．地理・歴史的環境

鹿谷古墳群が所在する亀岡市は旧丹波郡南部に含まれ、丹波の入り口に位置することから口丹波と呼ばれる。亀岡盆地を囲むように丘陵が位置しており、盆地のほぼ中央を大堰川が南北方向に流れる。盆地から北方へ進むと北丹波・丹後・日本海地域に、西方に進むと西丹波・篠山盆地に、南方に進むと北摂津に抜けることができ、特に日本海地域と畿内とを結ぶ交通の要衝として重要視されていた。

亀岡盆地と周辺の丘陵には、さまざまな時期の古墳が数多く分布している。古墳時代各時期の主な古墳や周辺の遺跡について見ていく。

古墳時代前期の主に４世紀代では、丹波全域で見ると、４世紀後半に築造された園部の垣内古墳（前方後円墳・墳長82m）が有力古墳としてあげられる。亀岡盆地では、南東部の山城～丹波に入る主要道路である古山陰道を眼下に望む交通の要衝に、向山古墳（円墳・墳長32m）が築造される。前方後円墳ではないが、1926年の土取りの際に、鼉龍鏡、石釧、車輪石、銅鏃、鉄鏃、直刀、鉄剣、鉄斧、鑿、鉄板片（以上すべて東京国立博物館蔵）などの豊富な遺物が出土した。これらの遺物により、古墳の築造年代は４世紀末とされる。この他にも、盆地南東部の三ッ塚古墳群や北部の池尻古墳群、西部丘陵上の穴太古墳群において、この時期に古墳の築造が始まったと考えられている。さらに近年、武式古墳（円墳・墳長19m）や保津東山古墳（前方後円墳・墳長60m）などが確認されている。武式古墳は墳丘は削平されるが、周濠から石釧の破片が出土し、４世紀後半頃の築造と考えられる。

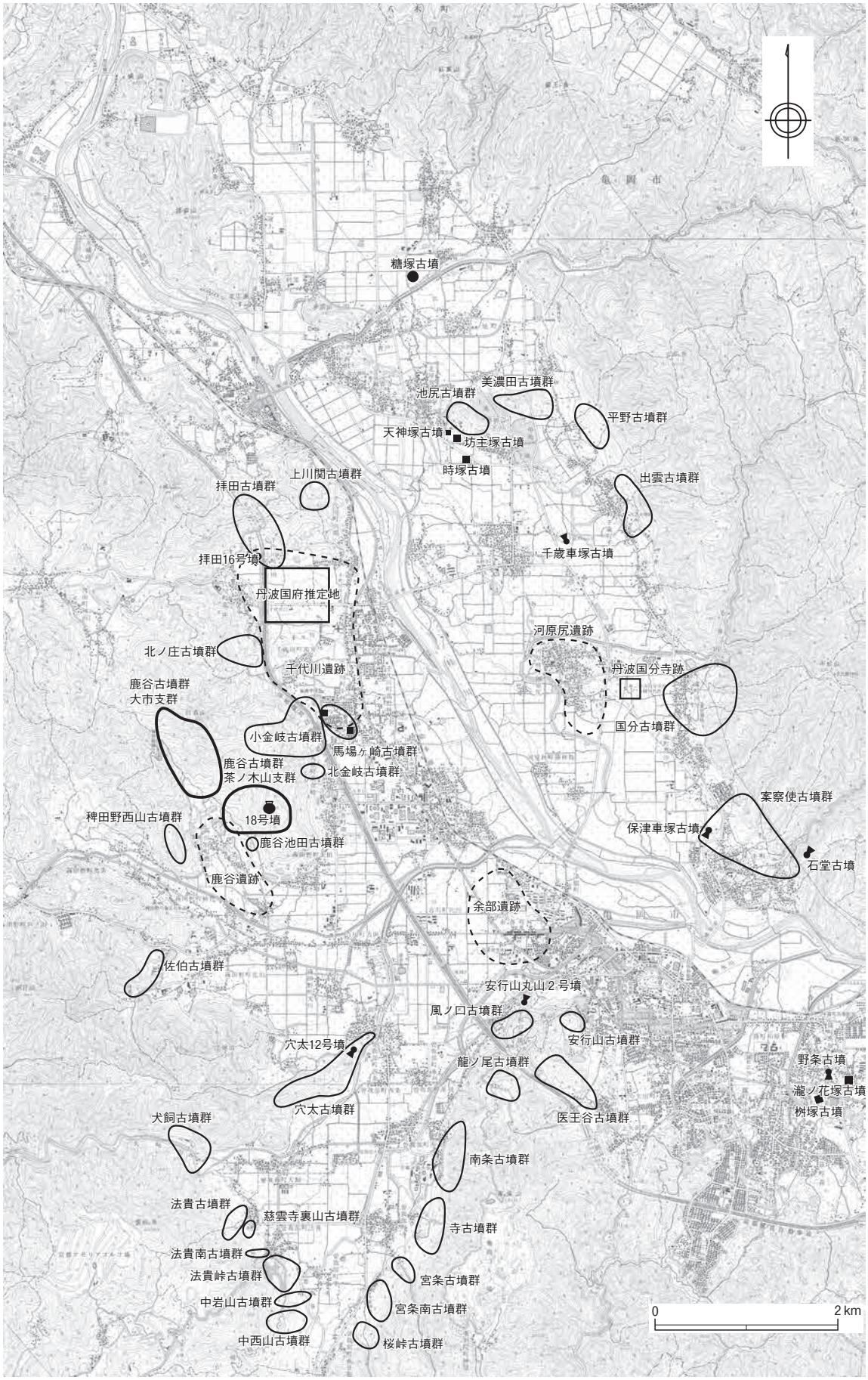


図16　鹿谷古墳群及び関連古墳分布

保津東山古墳は前期では亀岡盆地最大の古墳であるとされる。

中期の５世紀代になると、丹波最大の古墳である雲部車塚古墳（前方後円墳・墳長140m）が西丹波に築造されるが、その他には、目立った前方後円墳は見られない。亀岡盆地では、主に平地に円墳や方墳が築造される。方墳の数がやや多く、南東部に枡塚古墳（方墳・33m）・瀧ノ花塚古墳（方墳・30m）、北東部に坊主塚古墳（方墳・38m）・天神塚古墳（方墳・30m）、北西部に馬場ヶ崎１・２号墳（方墳・12m・30m）というように、盆地内の平野部の各拠点に方墳が２基並んで築造される特異な分布状況を呈する。方墳以外では、南東部の浄土寺１号墳（円墳・30m）や保津山古墳（墳丘削平により墳形不明）などがある。また時期が不明瞭であるが、前～中期の間に築造されたと考えられる古墳に穴太12号墳（前方後円墳・30m）や糠塚古墳（長楕円形墳・50m）などがある。

後期の６・７世紀代では、６世紀前半にこの時期の丹波最大の古墳である千歳車塚古墳（前方後円墳・墳長88m）が盆地北東部の平地に築造される。墳丘は三段築成で左くびれ部に造出を持ち、外表施設として葺石、埴輪、盾形の二重周濠を備える。また、墳丘と周濠ともに左右非対称であることが特徴である。千歳車塚古墳と同じ６世紀前半には、西南部の行者山北西部の丘陵の平地寄りに、石棚付石室を持つ拝田16号墳（前方後円墳・墳長44m）が築造される。和歌山県の岩橋千塚古墳群中の石室に見られるような、小さく扁平な石材を積み上げた横穴式石室を持つ。こうした石室は、亀岡盆地内でも古い様相を持つものの１つである。またこれらと前後する時期には、南東部の丘陵上に石堂古墳（前方後円墳・墳長39m）や南東部平地の保津車塚古墳（前方後円墳・墳長34m）などの30～40m規模の前方後円墳が盆地内に点的に築造される。６世紀後半になると、盆地を囲むように位置している丘陵上の至る所で群集墳の築造が活発化する。分布の多い場所として、北東部の丘陵、南部の曽我部町付近の谷を挟んだ丘陵付近、西部の行者山麓付近があげられ、特に行者山麓には、鹿谷古墳群や小金岐古墳群中の石棚を持つ石室や、小金岐１号墳・拝田９号墳などの石障、北ノ庄13・14号墳の導入期のものなど、九州系の要素を持つ横穴式石室が集中して分布することが特徴である。

亀岡盆地内の後期群集墳の特徴の１つに、石棚付石室

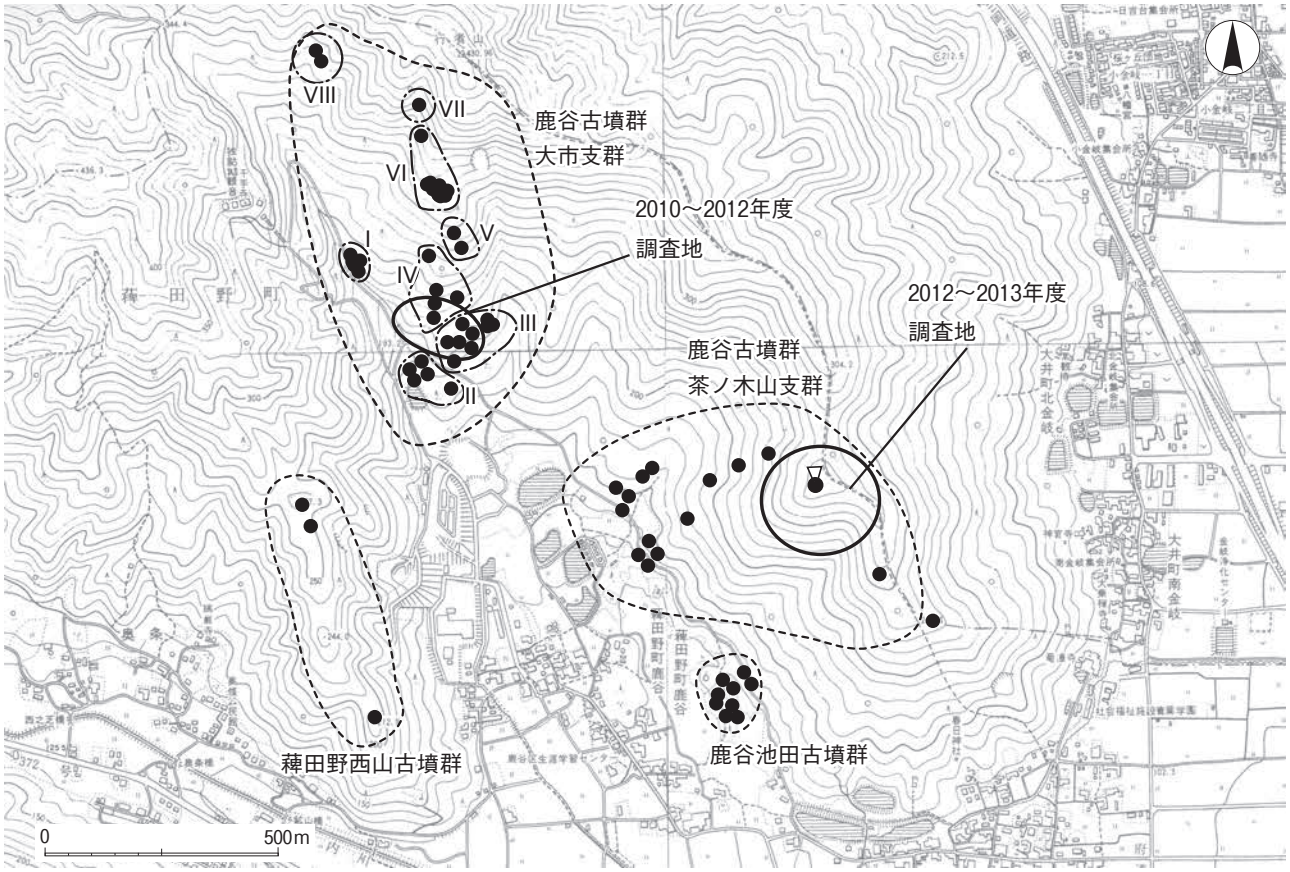


図17　行者山南麓古墳分布

を持つ古墳が複数存在することがあげられる。これらの古墳については、ゴーランド自身も注目し調査を行っており、鹿谷古墳群を考える上で重要な要素となるので、簡単に触れておく。

石棚とは、横穴式石室の奥壁から室内に板石を突出させ棚状の施設を形成している状態の石室を指し、西日本の限られた地域に分布する。これまでに、福岡、熊本、大分、広島、岡山、愛媛、徳島、香川、兵庫、京都、大阪、奈良、和歌山、滋賀、福井の各府県で計約160基が確認されている[3]。この中で分布が集中する地域として、北九州、和歌山県の岩橋千塚古墳群周辺、瀬戸内、徳島県の吉野川中流域、京都府亀岡市行者山麓付近、福井県の敦賀平野周辺があげられ、特に岩橋千塚古墳群周辺には、現在確認される石棚付石室の約半数近くが集中する。亀岡盆地には、拝田16号墳、小金岐76・78・112号墳、鹿谷古墳群中の18号墳、同大市支群のⅣ－１号墳他２基の計８基の石棚付石室が所在する。全国的に見ても特に分布の集中する地域の１つに数えられる。さらに、８基すべてが亀岡市西部の行者山麓付近に集中する。亀岡市内には、平野部を囲むように丘陵が位置しており、それらの丘陵のいたるところに後期古墳が分布するが、石棚付石室を持つ古墳は行者山麓付近のみである。このような特徴的な分布が何を示すのかは明らかでない。

亀岡盆地に分布する古墳時代の集落遺跡として、鹿谷遺跡、千代川遺跡、余部遺跡、河原尻遺跡などがあげられる。鹿谷古墳群の分布する行者山南麓の平野に位置する鹿谷遺跡では、中期の５世紀中頃に集落が成立したと考えられており、古墳時代のものを中心に約100棟の竪穴建物跡などが検出される。また、カマドや陶質土器や韓式系土器なども出土し、広域的な地域交流を行っていた集落であると考えられ、近接する鹿谷古墳群との関連も検討していく必要がある。千代川遺跡は盆地のほぼ中央部の行者山北麓の扇状地上に展開する。弥生時代末～古墳時代初頭にかけて集落が成立し、古墳時代前期～中期に最盛期を迎え、古墳時代中期末以降は衰退すると考えられている。また、この遺跡周辺は整然とした方形地割が残ることから、丹波国府の有力な推定地とされる。余部遺跡は盆地中央の大堰川右岸の河岸段丘上に立地する。古墳時代中期～後期の集落関連遺構や墓域が見つかっており、特に５世紀後半の土壙墓の中には、懸垂鏡や朝鮮半島との関連が考えられる鉄鎌や鉄鋌などが出土するものもある。河原尻遺跡は大堰川左岸の扇状台地先端部に立地し、後期の６世紀後半の集落関連遺構が検出されている[4]。

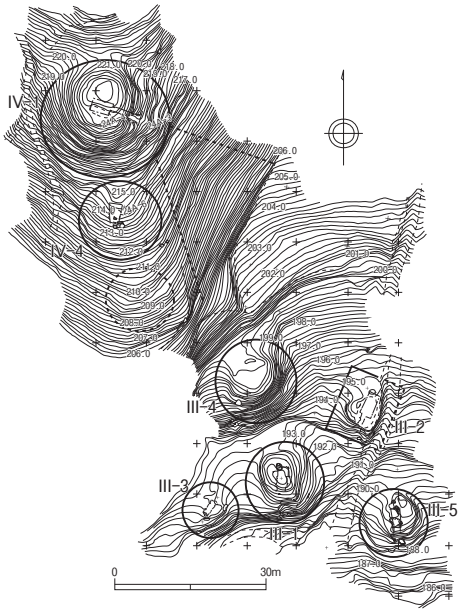


図18　鹿谷古墳群大市支群Ⅲ・Ⅳ群墳丘復元

３．既往の調査

（１）明治時代に行われた調査

鹿谷古墳群は、ウイリアム・ゴーランドが調査し、その折に作成した記録や出土遺物がイギリス・大英博物館のゴーランド・コレクション内に保存されていることで著名であるが、同時期に地元民によっても発掘が行われ、詳細な絵図が作成されている。まずはこれらの経緯について記述を進める。

1881（明治14）年４月、鹿谷古墳群の内、北東の茶ノ木山の丘陵頂部に位置する古墳１基が、鹿谷村民により発掘された。この時に遺物が出土したために、京都府知事宛てに届書が提出され、同年５月に京都府より派遣された役人と絵師の２名がその状況調査と記録のために村を訪れた。この時は雨天であり、発掘された古墳には入れなかったが、周辺にある同じような古墳の石室に入るなどするとともに、発掘した村人に発掘時の状況などの聞き取り調査を行い、複数の書類や絵図を作成している。この調査の後に、鹿谷村の古墳の発掘の話を聞いたゴーランドが、同年の内に村を訪れたと見られるが、発掘された古墳は、遺物を石室内から移動した直後に嵐によって崩壊したらしく、ゴーランド自身は調査の際に詳細な計測や石室内の写真撮影はできなかったようである。しかし、他の３基の石棚付石室を持つ古墳と３基の横穴式石室を持つ古墳の計６基の計測を行い、石棚付石室３基

については写真撮影も行った。また、MIDODUKAと書かれた石棚付石室１基の実測図を残している。発掘された古墳の副葬品類は豊富で、石室の各所から小玉、耳環、大刀、脚付の子持有蓋壺、金銅装馬具が出土したとされ、これらの一部は後にゴーランドの手に渡り、大英博物館に収められゴーランド・コレクション内に保存される。

上記の一連の調査の際に作成された書類や絵図やゴーランド自身がそれらを写し取った資料などの一部は、京都国立博物館の考古資料部門とイギリス・大英博物館のゴーランド・コレクション内に伝わっている。京都府から派遣された絵師が作成した絵図が、当時の水準からすると考古学的な学術性が非常に高く、現在から見ても有用な資料であり、絵師が図面を描く際に考古学的知識を持つゴーランドが何らかの形で関わった可能性が指摘される。また、ゴーランドの持つ図面は絵師が描いたものであるから、ゴーランドと絵師の間に直接的な関わりがあったことは確かなようである[5]。

（２）明治時代以降の調査

ゴーランドらが行った調査以降、発掘した古墳や３基の石棚付石室を持つ古墳は、茶ノ木山の名が廃れたために、その所在は長らく掴めないままであった。しかし、近年の調査の進展により徐々に様相が判明しつつある。

2005（平成17）年に、宮川禎一氏によって京都国立博物館所蔵の絵図面が紹介される[6]（写真44）。

2009（平成21）年、龍谷大学考古学研究会が亀岡市稗田野町鹿谷一帯の古墳分布調査を行ったところ、これらの古墳の内、使用石材の特徴がゴーランドの撮影した写真と類似することから、稗田野町鹿谷大市付近所在のものがかつてゴーランドが内部を撮影した石棚付石室と関連を持つであろうことが知られるようになった。同研究会はその他にも、この古墳周辺にて、分布調査を行い計39基の古墳及び古墳状隆起を確認している。それらを８つの小支群に分け、この付近を鹿谷古墳群大市支群と設定した[7]。

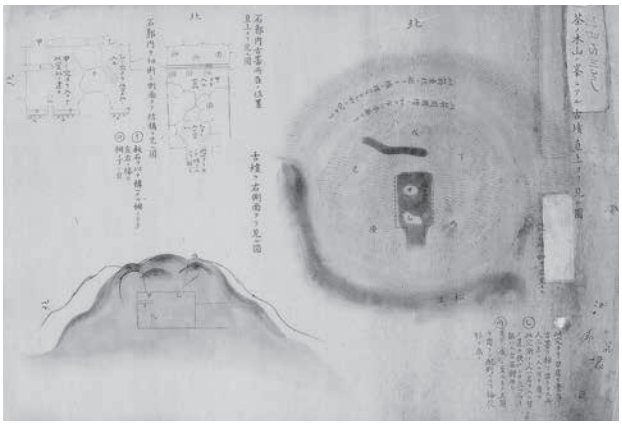


写真44　鹿谷古墳群茶ノ木山支群　茶ノ木山ノ峯ニアル古墳図・墳丘及び石室図（京都国立博物館提供）

2010（平成22）年には、ゴーランド・コレクション調査プロジェクトの一環として、ゴーランドが撮影した石棚付石室を持つ古墳の南東に集中する古墳５基（大市支群Ⅲ－１～５号墳）について、墳丘測量調査を行った[8]。

2011（平成23）年８月には、2010年に引き続きゴーランド・コレクション調査プロジェクトのメンバーと本学で、昨年の５基の古墳周辺の測量調査の補足を行い、それぞれの古墳の詳細が判明した[9]（図18）。詳細は以下の通りである。

大市支群Ⅲ－１号墳：円墳　南北15.0m・東西13.0m　高さ約3.8m　横穴式石室

大市支群Ⅲ－２号墳：方墳　一辺12.0m　高さ3.4m　横穴式石室

大市支群Ⅲ－３号墳：円墳　径10.0m　高さ2.8m　横穴式石室

大市支群Ⅲ－４号墳：円墳　径14.0m　高さ5.0m　横穴式石室？

大市支群Ⅲ－５号墳：円墳　径12.0m　高さ2.0m　横穴式石室

2012（平成24）年８月には、測量した５基の古墳の北西方向に近接する大市支群Ⅳ－１・４号墳の墳丘と周辺地形の測量調査を行った。Ⅳ－１号墳は円墳である。規模は墳径南北約22m×東西約24m、高さが南側で6.0m、北側で1.2mを測り、大市支群中でも屈指の規模を持つ。墳丘背後には築造時の掘割が北側を中心に半円形にめぐっている。外表施設として、テラスが一段入る可能性がある。内部構造は東方向に開口する横穴式石室であり、特に石棚付石室であることが注目される。現在でも石室内部に入ることが可能であるが、天井付近が陥没しており注意が必要である。また、この古墳の東側には東に向かって傾斜する斜面があるが、石室の開口部付近を中心に谷状に窪んでおり、このことから石室からのびる墓道状の施設が存在する可能性が考えられる。Ⅳ－４号墳はⅣ－１号墳に南接する。円墳で径14.0m、高さ3.0mを測る。内部構造は南方向に開口する横穴式石室と考えられる。石室内部に入ることはできないが、墳頂付近に石室構築石材と思われる石材が散乱している。この古墳下方の斜面には、石室構築石材と推定できる石材が散乱しており、さらに古墳状隆起と思われる地形もみとめられることから、古墳が存在する可能性がある[10]。

一方、茶ノ木山支群の18号墳についても2012年２月から2013年３月にかけて断続的にプロジェクトメンバーと本学で墳丘測量を行った。

2013年度刊行の報告書では、18号墳の円丘部周辺の測量図を提示し、18号墳が北側に突出部（前方部）を持つ前方後円墳となる可能性を指摘するとともに、調査の過程で18号墳が明治時代に描かれた絵図の古墳と一致する可能性を指摘したが、墳丘裾周囲の測量成果を報告することが出来なかった。また18号墳周辺を踏査したところ、18号墳より南東方向の支尾根稜線上に２基の古墳を確認した。それぞれGPSによる位置の測定とエスロン・テープによる墳丘の略測を行った。その結果､東尾根側先端に位置する古墳（2013年度報告書では仮称No.11の古墳とした）は円墳で径25.0mを測り、特徴として墳頂平坦面が広く竪穴系埋葬施設を有する可能性がある。また、この古墳より西に位置する古墳（2013年度報告書では仮称No.12の古墳とした）は円墳で径12.5mを測るが、墳丘は半壊している[11]（図19）。

４．茶ノ木山支群18号墳の調査概要

（１）調査目的

前述のように、茶ノ木山支群18号墳の墳丘測量調査はゴーランド・コレクション調査の一環として行った。また、調査を進める過程で、明治時代に描かれた絵図との類似や周辺地形の状態から円墳ではなく前方後円墳か造出付円墳の可能性も浮上したことなどから、絵図との比

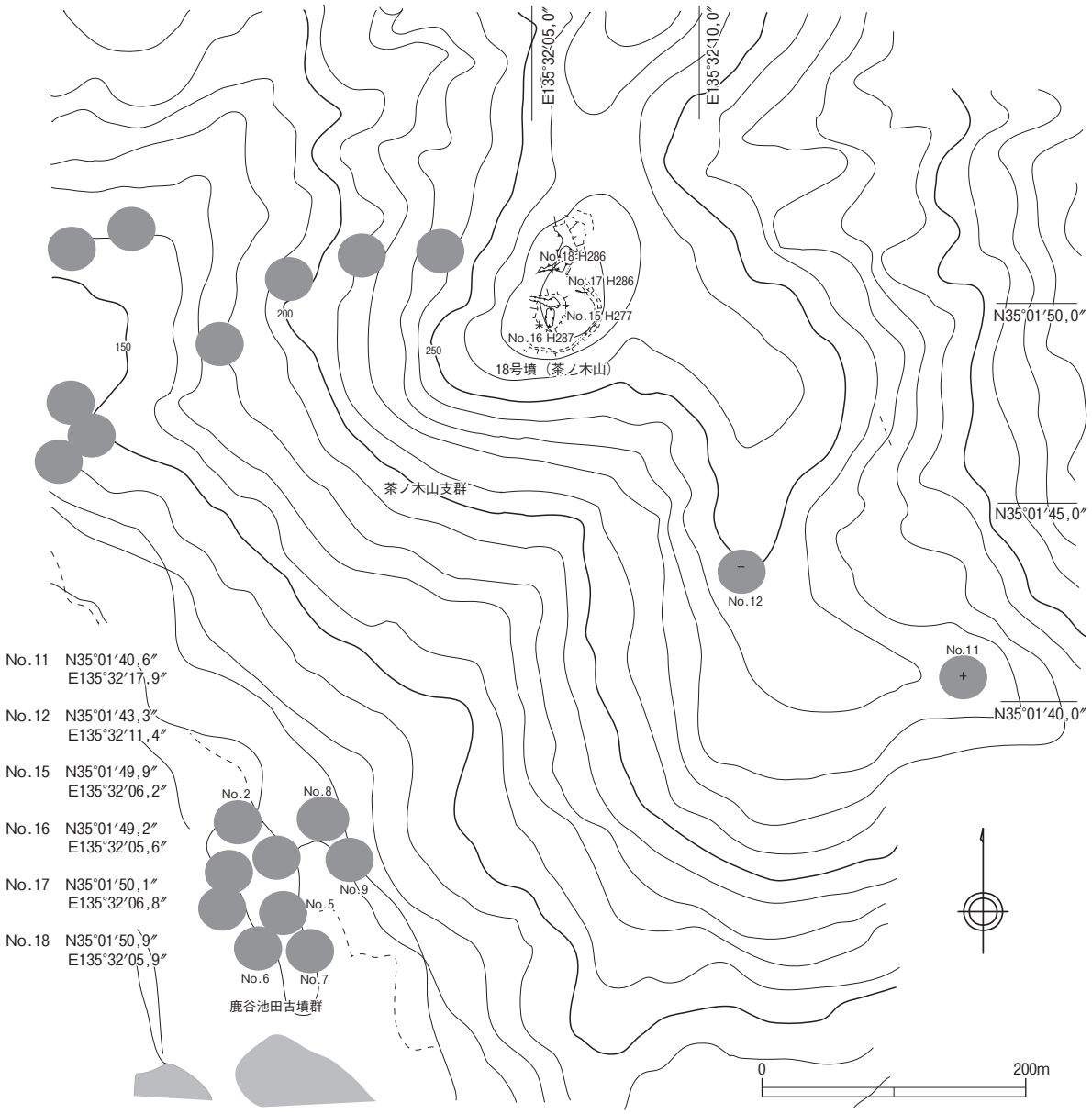


図19　鹿谷古墳群茶ノ木山支群とその周辺古墳の分布

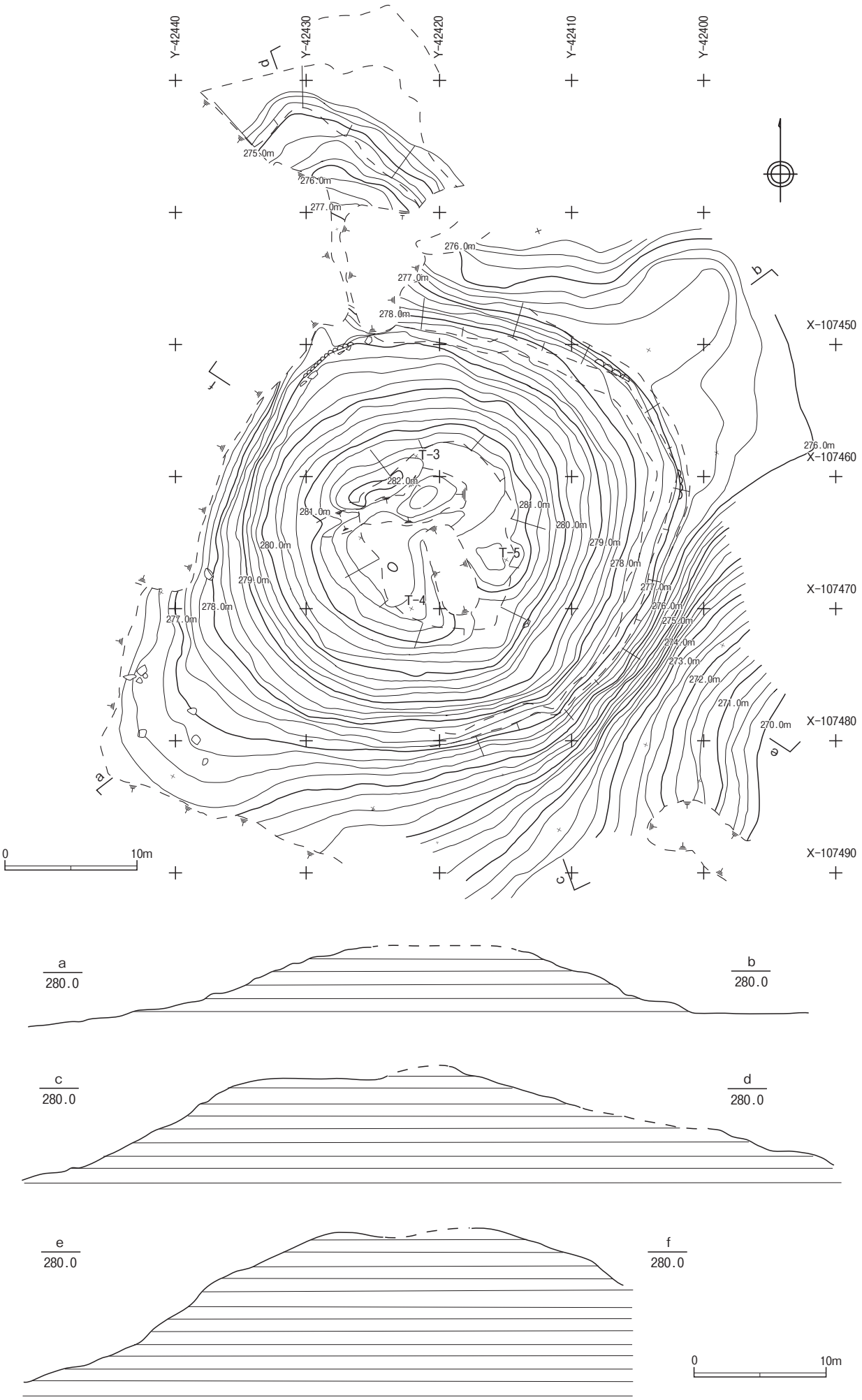


図20　鹿谷古墳群茶ノ木山支群　18号墳墳丘

較検討を行うことと、墳形を再検討することなども目的として調査を進めた。

（2）調査方法

調査は平板測量で行い、測量図は25㎝コンター、縮尺1/100で作成した。基準杭は世界測地系に基づいて18号墳周辺に計11点を設置した。それぞれの基準杭の数値は以下の通りである。

基-1　：X＝-107459.757 Y＝-42348.049 Z＝268.925
基-2　：X＝-107461.136 Y＝-42343.956 Z＝269.508
T-1　：X＝-107454.174 Y＝-42375.764 Z＝273.176
T-2　：X＝-107450.788 Y＝-42403.961 Z＝276.791
T-3　：X＝-107458.600 Y＝-42421.587 Z＝281.836
T-4　：X＝-107470.167 Y＝-42421.952 Z＝281.644
T-5　：X＝-107466.305 Y＝-42414.789 Z＝281.580
T-6　：X＝-107458.831 Y＝-42398.836 Z＝276.457
T-7　：X＝-107459.526 Y＝-42369.450 Z＝271.731
T-3-1：X＝-107441.777 Y＝-42427.543 Z＝277.398
T-4-1：X＝-107468.555 Y＝-42440.595 Z＝276.679

測量を行った範囲は、南北約70m、東西約55m、総面積約3850㎡となった。

（3）調査経過

18号墳の現地調査期間は2012年２月12日・３月18～20日・11月23日・12月29・30日・2013年３月23日の合計８日間である。その後2013～2014年度にかけて図面の整理作業を行った。2013年度報告書で、円丘部分の墳頂部付近の図面を提示し、完成している部分と絵図とを比較した結果などを報告した。2014年度には調査範囲全域の図面と墳丘部分の断面図を作成した（図20）。

５．調査成果

墳丘測量調査成果

18号墳は従来円墳であるとされてきたが[12]、調査を進める過程において、北側の地形の状況から前方後円墳あるいは造出付円墳となる可能性が出てきた。しかし今回の調査成果からは墳丘裾周囲の崩壊が著しいことから明確な根拠は得られなかった。本報告では円墳とされてきた部分を円丘部、前方部あるいは造出と考えられる部分を突出部と表記する。

立　　地

丘陵尾根頂部に位置する。円丘部の墳頂部の標高は約282mである。尾根がちょうど北から東に曲がる角の部分にあたり、墳頂からは、南側の鹿谷の平野部が見渡せる。また、この平野部には18号墳が築造された時期と重複する可能性のある鹿谷遺跡が存在する。古墳の立地する丘陵の南側平野には、亀岡盆地から西丹波・篠山盆地へ抜けるルートが通り、このルート上の要衝を意識した立地と考えられる。18号墳の西側斜面には円墳が一列に並ぶように分布する。また、尾根稜線に沿って南東方向に約200m進むと仮No.12の古墳、そこからさらに約150m進むと仮No.11の古墳の２基が点在する。

墳 丘 部

円丘部は、南でT.P.274.0m付近、北東でT.P.277.0m付近、南西でT.P.277.75m付近をそれぞれ墳丘裾の傾斜変換点と考えると径38.0mに復元できるが、コンターのふくらみから南部と南西部の墳丘裾付近の盛土は流出している可能性がある。高さは一番高い南東部で8.0m、他の部分で約５～６mとなる。墳頂平坦面の径は13.0mである。墳頂部には石室陥没坑と考えられる窪みと、北東から南西方向に走る不整形の溝がある。石室による陥没と考えられる坑は断面U字形で長軸7.0m、短軸約2.5～３mとなる。溝は長約12mで北東最大幅は4.0m、南西最大幅は2.0mとなり、北東部の5.0mは楕円形状に陥没する。円丘部西側の墳丘裾付近は崖となっており測量することはできなかった。また外表施設の項目でも触れるが、２本目テラスが入る可能性のあるT.P.277.0～278.25m付近から傾斜が変わり、特に北・東側の墳丘裾付近は他の部分より急傾斜になっており、この影響から北・東側から見ると円丘部が腰高な印象を受ける。この様子は北西－南東に割った図20の断面ｅ－ｆで確認できる。

突出部は、北部に位置する幅３～４mの掘割の手前まで測量した。しかし、この掘割は尾根筋の南側で顕著に見られる中世の城郭関連遺構の一部である可能性もある。茶ノ木山周辺には、土塁などの城郭関連遺構と思われるものが所々に分布しており、これらによる改変を受けていることも考慮しなければならない。また、墳形の判断について問題となる円丘部との境界付近のくびれ部に相当する可能性のある部分の現状は、東西両側が大きく削平・崩落しており、その箇所の間に幅0.2～0.3mの旧地形と考えられる部分がかろうじて残る状態である。

これらの事を踏まえて現状での計測を行う。北部についてはT.P.275.0m付近に傾斜変換点があるのでこの付近を墳丘裾とする。くびれ部にあたる円丘部との境界の部分については不明瞭であるが、T.P.277.5m付近のコンターが北に向かいそうなのでこのコンターから南部が突出部であるとして計測すると、長さ16.0m、残存部の

最大幅8.0m、高さ2.0mとなる。円丘部の頂部とくびれ部にあたる部分の頂部との高低差は4.5mである。

外表施設

円丘部には葺石・埴輪・周濠（掘割）は見られなかったが、２本のテラスが存在する可能性がある。１本目のテラスは墳頂平坦面の下部にあたるT.P.279.0～280.0m付近をめぐる。幅は3.0mであるが東部や北西部では不明瞭になる。このテラスと石室陥没坑の底のレベルが一致する可能性がある。２本目のテラスは墳丘裾より1.0m上部にあたるT.P.277.0～278.75m付近をめぐると考えられる。幅は2.0mを測るが、北西部と南部では不明瞭になり全周しない可能性もある。このテラスより下部斜面は北と東で急傾斜になっている。また２本目テラスの北部と東部の下部斜面に大きさ１m未満の石材が散乱し、これらが並ぶ箇所も見られ、石列のような施設があった。場所により異なるが各部分の高低差はそれぞれ墳頂平坦面と１本目テラスは約0.5m、１本目テラスと２本目テラスは2.0m、２本目テラスと墳丘裾は1.0～2.0mである。１本目と２本目の間の距離が他の部分より広い。

突出部には、葺石・埴輪は見られないが、くびれ部付近の西側の削平箇所に大きさ１m未満の石材が散乱する。テラスも明確には確認できないが、T.P.275.0～275.5m付近がやや平坦になり、この部分にテラスが存在する可能性はある。また北側に掘割があるが、中世の城郭関連遺構の可能性もある。

内部構造

円丘部頂部の陥没坑の状態から南東方向に開口する横穴式石室であると考えるが、石室構築石材などは露出していない。また開口方向の下部のT.P.276.0～280.5m付近の墳丘は南東方向に向かってやや膨らんでおり、この部分に前庭部や墓道が存在する可能性がある。

突出部には、埋葬施設の痕跡が見られなかった。

採取遺物など

今回の調査では遺物を採取することはできなかった。

周辺地形

北東部と南西部に平坦面が認められるが、古墳築造当時のものであると断定することはできない。南西部の平坦面には大きさ１m程の石材が複数散乱している。また、くびれ部にあたる部分の東部や円丘部より約５m南東方向に不自然な陥没地形が存在する。これらは形状が類似しており、同時期に人為的に掘削された可能性がある。

墳形について

現時点で前方後円墳や造出付円墳である可能性の根拠として考えられることを以下にまとめる（図20）。

①突出部の北側に切断痕の可能性がある掘割が見られること。

②円丘部北部のT.P.276.25～277.5m付近のコンターが北に曲がりくびれ部を形成すること。

③断面ｃ－ｄを見ると、突出部裾のレベル（T.P.275m付近）と、反対側の円丘部南側の墳丘裾のレベル（T.P.275～276m付近）がほぼ一致しそうな状態であり、また円丘部の墳丘裾に注目してみると、円形に回らずに北西側で突出すること。

④コンターの変化状況から、円丘部頂上から突出部へと向かう方向の円丘部の墳丘の傾斜が他の部分に比べて緩やかであり、前方後円墳に見られるような前方部頂からと後円部頂との間のスロープ状の施設を形成すること。

①については、上記のように城郭関連遺構である可能性があるので現時点では根拠として不十分である。②については、円墳であるならばこの部分に切断痕が入る可能性が高いので、根拠の一つとして検討してもよさそうだが、削平により明確なくびれ部が見られないので、確定的ではない。③については、墳丘裾が確定したわけではないので確定的ではない。④については現時点では不明瞭な部分もあり断定できない。以上のように、今回の墳丘測量調査からは前方後円墳や造出付円墳である可能性を残しつつも、墳形の最終判断には至らなかった。

前方後円墳あるいは造出付円墳であるとした場合、墳長55mになる。主軸はN－19°－Wである。北西方向に突出部を向ける。また、円丘部の陥没坑の状態から横穴式石室の主軸は墳丘の主軸とほぼ一致し、突出部と反対の南東方向に開口すると考えられる。

絵図との比較検討結果

2013年度報告書での検討から、本報告の18号墳と京都国立博物館に保存されている1881年に茶ノ木山で古墳の発掘が行われた際に絵師・遠藤茂平によって作成された絵図の中の１枚である（写真44）。「茶ノ木山ノ峯ニアル古墳直上ヨリ見ル圖」と題された絵図に描かれている古墳が一致することがわかった。そのことについて、本報告において全体の測量図が完成したので（図20）、再度絵図との比較を行った結果を以下に箇条書きで列挙する。

絵図との類似箇所

・絵図中の古墳の墳丘南部の「甲」・「乙」と書かれた石室らしき部分が、18号墳円丘部頂部の石室の陥没坑とほぼ一致する。

・絵図中の石室の北にある西側に向かって傾斜する溝と、18号墳の石室陥没坑の北の溝状の落ち込みの形状が類似する。
・絵図中の北側半分に巡る「此筋周囲壇ノ如ク少シ平面アリ」と書かれた部分と、18号墳北側のT.P.279.0～280.0m付近のテラスと推定される傾斜が緩やかな部分がほぼ一致する。しかし、その下段にある「此筋東北二巡リテ堀ノ埋マリタル如ク凹ナリ」と書かれた箇所と類似する部分は確認できなかった。
・絵図中の古墳の東側の墳丘裾付近に「此処石垣ノ如キ石見エル」と書かれた石垣状の箇所と18号墳円丘部東側墳丘裾付近の石列状施設が一致する。ただし不明瞭であるが、現状では石垣のように複数の石段があるわけではなく、一段の石列が残存している状態である。

絵図との相違箇所

・絵図中の古墳の墳頂部には、絵図右下の説明に「丙ヨリ庚ニ至ルモノ五箇ヲ周リニ配列スルフ梅花形ヲ為ス」とあるように、北から時計回りに「戊」・「丁」・「丙」・「庚」・「己」と書かれた５つの盛土が石室を囲むように梅花形に配置されている様子が見られるが、現状の墳頂部にはこれらに該当するような盛土状の痕跡は認められない。これらは発掘時の上げ土で、今日流出した可能性がある。
・今回の測量調査では18号墳の北西方向に存在する前方部あるいは造出の可能性がある突出部状の地形部分について測量・検討したが、絵図中の古墳は円墳状であり、この部分については描かれていない。

以上の検討結果からも18号墳が絵図中の古墳と一致すると言えるが、相違する箇所も存在するので、時間的な経過による変化を考える必要がある。

６．ま と め

（１）茶ノ木山支群18号墳の調査成果まとめ

今回の調査によって得られた18号墳の基礎データをまとめる。

円 丘 部

墳頂部の標高は282.0mである。径38.0m、高さ５～８m、墳頂平坦面径13.0mとなる。墳丘は二段築成の可能性がある。また、北・東側の墳丘裾付近に石列状施設が断片的に残存する。墳頂部に石室陥没坑が１箇所存在し、陥没坑の状況から南東方向に開口する横穴式石室を持つと考えられる。

突 出 部

円丘部の北西側に接しており、北西－南東に長軸を向ける。くびれ部に該当する可能性のある部分の東西の地形が削平・崩落しており残存状況は悪い。頂部の標高は277.0mである。長さ16.0m、最大幅8.0m、高さ2.0mとなる。不明瞭であるがテラスが１本入る可能性がある。埋葬施設の痕跡は見られない。北側に時期不明の掘割が存在する。

前方後円墳（造出付円墳）である場合

墳長55.0m、円丘部と突出部の高低差は4.5mとなる。主軸はN－19°－Wであり北西方向に前方部（造出）を向ける。円丘部墳頂部の陥没坑の状況から、横穴式石室と墳丘の主軸は一致する可能性がある。

また、再度絵図との比較検討を行った結果、相違箇所も見られるが、確実な類似箇所が複数存在することから18号墳が絵図の古墳と一致することが確定した。

（２）茶ノ木山支群18号墳の築造時期について

今回の調査は墳丘測量のみであるが、18号墳の内部構造が絵図にある横穴式石室と考えられることから、古墳時代後期に築造されたことは確実である。

18号墳と一致すると考えられる絵図の左上には、内部構造の横穴式石室の図が描かれる。富山直人氏はこの絵図の石室とそこから出土したであろうゴーランド・コレクション内の遺物を検討している[13]。遺物・石室の時期の特徴を参考にすると18号墳の横穴式石室の年代は古墳時代後期の６世紀中～後半頃と考えられる

（３）亀岡盆地における茶ノ木山支群18号墳の位置付け

最後に、今回の調査成果を踏まえ、墳丘を対象として亀岡盆地に所在する主要古墳の内、18号墳と前後する時期に築造された古墳とを比較検討し、亀岡盆地内での18号墳の位置付けを行う。

亀岡盆地の古墳時代後期の前方後円墳として、千歳車塚古墳、拝田16号墳、保津車塚古墳（按察使１号墳という表記もあるが、本報告では保津車塚古墳の名称に統一する。）、石堂古墳などがある。以下に各古墳の概要を整理する[14]。

千歳車塚古墳は古墳時代後期の丹波最大の前方後円墳であり、墳長81.0m・後円部径46.0m・同高さ7.5m・前方部幅49.0m・同長40.0m、同高さ7.0mを測る。前方部を北西方向に向け、墳丘は三段築成であり、葺石・埴輪・盾形の二重周濠を持つ。さらに左くびれ部に造出を持つ可能性がある。埴輪などに同時期の摂津の今城塚古墳との類似点が見られる。埴輪などから６世紀前半に

築造されたと考えられる。

拝田16号墳は、墳長44.0m・後円部径30.0m・同高さ6.0m・前方部幅23.0m・同長14.0m同高さ5.0mを測り、西方向に前方部を向ける。内部構造は横穴式石室であり、石棚を持つ。６世紀前半に築造されたと考えられる。

保津車塚古墳は墳丘全体が削平されているが、周濠などから墳長34.0m・後円部径24.0m・前方部長10.0mを測る。周濠から出土した須恵器により、６世紀前半頃に築造されたと考えられる。

石堂古墳は、墳長39.0m・後円部径20.0m・同高さ5.0m・前方部幅25.0m・同長16.0m・同高さ3.5mを測る。墳丘は北東方向に前方部を向け、左くびれ部に造出を持つ可能性がある。埴輪が採取されており、これにより６世紀前半頃に築造されたと考えられている。

亀岡盆地では、千歳車塚古墳の出現と前後して30～40m級の前方後円墳が複数築造される。18号墳は千歳車塚古墳以外の中・小規模前方後円墳と前後する時期に築造されており、18号墳が墳長55mの前方後円墳（または造出付円墳）であるならば、これらの古墳より若干規模が大きくなる。またそれぞれの古墳の円墳部分に注目すると、千歳車塚古墳と18号墳以外の３基は20～30m級であり、18号墳の円丘部が若干大きくなることに加え、二段築成であることや墳丘裾付近に石列がめぐる可能性があることから、円墳部分のみならば18号墳は千歳車塚古墳に次ぐ内容を持っている。さらに、2013年度報告書で調査成果を発表した鹿谷古墳群大市支群Ⅳ－１号墳は円墳であるが、径約22～24mを測り、テラスを一本持つ可能性があることなどから、この古墳についても円墳部分のみならば３基の前方後円墳と対比できるかもしれない。

これらのことから、18号墳は亀岡盆地内の後期古墳の中でも千歳車塚古墳に次ぐ墳丘を持つ可能性があり、二段築成や石列などから、拝田16号墳・保津車塚古墳・石堂古墳などの中・小規模前方後円墳よりも円墳部分を重視しており、前方部（または造出）に相当する可能性のある突出部が円丘部と比較して小規模であることからも、これらの３基の古墳とは相違する墳丘を持ち、異なった経緯で築造された可能性がある[15]。

以上の調査結果から、18号墳は亀岡盆地の古墳時代の動向を考える上で極めて重要な内容を持つことを確認できた。

注

（１）龍谷大学考古学研究会2011「京都府亀岡市所在鹿谷古墳群大市支群分布踏査」『古代学研究』192号　古代学研究会。

（２）亀岡市史編纂委員会2000『新修亀岡市史』資料編第１巻　亀岡市。

（３）河上邦彦1995『後・終末期古墳の研究』雄山閣出版。

（４）亀岡市の地理・歴史的環境については、亀岡市史編纂委員会2000『新修亀岡市史』通史編　第１巻　亀岡市を参考にした。

（５）明治時代にゴーランドらが行った調査については以下の文献を参考にした。
富山直人2009「ガウランドと鹿谷古墳―大英博物館所蔵資料の調査から―」『日本考古学』第28号　日本考古学協会。土井孝則2010「石棚古墳の研究（３）―ガウランドが撮影した鹿谷古墳とその所在―」『亀岡古墳研究』No.１　亀岡古墳研究会。宮川禎一2005「描かれた古墳出土品―明治14年の発掘調査―」『学叢』第27号　京都国立博物館。

（６）宮川禎一2005「描かれた古墳出土品―明治14年の発掘調査―」『学叢』第27号　京都国立博物館。

（７）（１）に同じ。

（８）京都橘大学2011『京都橘大学文化財調査報告2010』。

（９）京都橘大学2012『京都橘大学文化財調査報告2011』。

（10）京都橘大学2013『京都橘大学文化財調査報告2012』。

（11）（10）に同じ。

（12）（２）など。

（13）富山直人2009「ガウランドと鹿谷古墳―大英博物館所蔵資料の調査から―」『日本考古学』第28号　日本考古学協会。

（14）それぞれの古墳の概要については以下の文献を参考にした。
千歳車塚古墳・拝田16号墳：近藤義郎編1992『前方後円墳集成』近畿編　山川出版社。亀岡市史編纂委員会2000『新修亀岡市史』資料編第１巻　亀岡市。保津車塚古墳・石堂古墳：高野陽子2012「大堰川流域の古墳と継体大王」『古事記・日本書紀とやましろ―淀川水系と継体大王―』特別展記念シンポジウム配布資料　ふるさとミュージアム山城。亀岡市文化資料館2014「つちのなかからお宝発見！？―亀岡の遺跡を知ろう！学ぼう！！―」亀岡市文化資料館第55回企画展。

（15）ただし、３基の古墳すべてが同じ経緯のもとに築造されたわけではなく、拝田16号墳の岩橋千塚古墳群と類似する横穴式石室や石堂古墳の円筒埴輪などにそれぞれ特徴的な要素が見られることから、３基の古墳にもそれぞれ異なった築造背景が存在すると考える。

第５章

丹後地域における弥生時代後期墳墓の埋葬施設

１．はじめに

京都府北部に位置する丹後地域は、日本海に面した丹後半島全域を中心とする地域と若狭湾に面した由良川流域からなる。本稿で取り上げるのは丹後半島域の竹野川、福田川、野田川の３河川流域で標高833mの大江山をはじめ600m前後の山々に囲まれた山間部のため小規模な平野が広がる。竹野川と福田川の河口には潟湖があり、また野田川も宮津湾を天橋立によって仕切られた阿蘇海に流れ出ており、日本海を通じた交易が行われていたであろう港湾拠点をもつ河川である。これらの流域では古墳時代になると墳丘長が145m蛭子山古墳、190mの神明山古墳、198mの銚子山古墳、といった巨大な前方後円墳が築かれる。

丹後地域における弥生時代墳墓は台状墓を中心として発展し、とりわけ弥生時代後期は独特の墓制を展開していく。これについては肥後弘幸氏が「近畿北部型弥生時代後期墓制」とし丹後、但馬及び南を除く丹波地域を対象に４つの特徴をあげている[1]。

第１に墳墓の立地と形状、第２に埋葬施設の構成、第３に土壙に納めた木棺の周囲や蓋上に破砕した土器を置く埋葬行為の墓壙内破砕土器供献、それぞれの定義は「まず、墓壙を穿ち、墓壙底に木棺を組むか置くかの行為があり、続いてその内部に遺体を安置し、蓋をした後に行われる葬送儀礼行為で、破砕した土器を棺の周囲や蓋板上に置く行為」であるとする[2]。そして第４に副葬品をあげている。

この論考を踏まえ、ここでは丹後地域における弥生時代後期の埋葬施設のあり方を取り上げる。

弥生時代墳墓の独特な性格をもつ時期であり、特に後期後葉を境に埋葬施設・副葬品共に変化が現れる。墓壙規模や木棺規模及び形態での埋葬施設の分類と副葬品の関係から、変化の過程と玉類や鉄製品といった豊富な副葬を行う埋葬施設の性格を検討する。

２．丹後地域における弥生時代後期の墳墓

丹後地域の弥生時代の代表的な集落の竹野川河口付近にある京丹後市竹野遺跡は弥生時代前期から中世まで続く集落で、良好な港であったであろう潟湖に面することから、交易の拠点となった集落である。集落は河川上流に向くことで広がりをみせる。竹野川中流域丘陵上に立地する前期末から中期初頭の高地性集落である京丹後市扇谷遺跡は丘陵の周りに２重の深い環濠を巡らせ、環濠からは鍛冶滓や玉作り関連の遺物が出土する。中期になると集落の範囲は広がり、与謝野町日吉ヶ丘遺跡や京丹後市奈具岡遺跡群のように居住域の周辺に生産域や墓域をもつ集落が確認できる。竹野川下流域丘陵上に立地する奈具岡遺跡では中期中葉から後半中心に水晶玉などの玉作りを行い、関連する工具類や未完成品、原料となる石英魂や緑色凝灰岩が出土する。後期になると目立った集落はなくなるが、墳墓の数が増加してゆく。

丹後地域の弥生時代の墳墓は前期末から中期初頭に扇谷遺跡に隣接する丘陵上に２基の方形台状墓を築いた七尾遺跡に始まる。中期では、代表的なものとして京丹後市奈具岡遺跡や小池遺跡といった墳丘の斜面に石を貼る方形貼石墓が出現する。与謝野町日吉ヶ丘遺跡は墳丘規

図21　丹後地域弥生時代後期主要遺跡と大型墳墓及び大型前方後円墳の分布（京都府立丹後郷土資料館2007『王墓の考古学―丹後の弥生王権成立の謎を解く―』より加筆）

模が長辺32m、短辺20mでなかでも最大規模のものである。しかし、後期には方形貼石墓は姿を消す。

後期になると、後期前葉の段階で京丹後市三坂神社墳墓群や左坂墳墓群のように丘陵尾根に沿って連続して台状墓を築くものが多くなる。後期中葉以降、不明確な規格から定型的な区画墓の築造に向かい、大型の方形墳丘墓が出現する。墳頂部平坦面の埋葬空間は築造契機となる中心埋葬の墓壙周囲に大小の埋葬墓壙が取り囲むような配置となる。

こうした動向のなかで本稿は主に後期をとりあげる。まず、後期時期順に９つの墳墓群の概要をあげる。

竹野川流域の後期前半

（１）三坂神社墳墓群（京丹後市大宮町）　後期前葉

竹野川中流域、標高69～83mの丘陵上に立地する。丘陵頂部から北に向かって下る尾根先端部を階段状に削り出し平坦面を築く６基の台状墓からなる。最高位置にある３号墓と最下段の８号墓は方形の墳頂平坦面をもつが、４～７号墓は半円形または三日月形といった不整形な墳頂平坦面をもつ。埋葬施設は木棺墓27基・土壙墓８基・土器棺墓４基、計39基である。この墳墓群の築造契機となった３号墓の中心埋葬施設である第10主体部は長軸5.69m、短軸4.27m、深さ1.80mの巨大な墓壙をもち、副葬品には素環頭鉄刀１点、鉄鏃２点、鉇１点などの鉄製品とガラス製勾玉１点、ガラス製管玉13点、水晶算盤玉16点などの玉類がある。墓壙内破砕土器供献は土器棺墓を除く、ほぼすべての埋葬施設で行う[3]（図22）。

（２）左坂墳墓群（京丹後市大宮町）　後期前葉～中葉

竹野川中流域の丘陵上に立地する。南向き尾根と西向き尾根を持つ東丘陵と独立丘陵の西丘陵からなる台状墓である。墳丘平坦面は方形または三日月形に削り出すが墳丘区画は不明瞭なものである。東丘陵の西向き尾根に位置する18号墓が築造契機となり、17号墓、16号墓へと尾根頂部に向かって広がり、南向きの尾根上でも１号墳下層墓、24-1号墓などで一斉に築造されてゆく。埋葬施設は木棺墓105基・土壙墓28基・土器棺墓１基・不明５基の計139基である。埋葬施設の大半に鉄製品や玉類の副葬品があり、ガラス製小玉は6,000点以上にもなる。墓壙内破砕土器供献は主に甕が使われ、次いで壺や鉢で行う[4・5]（図22）。

（３）大山墳墓群（京丹後市丹後町）　後期前葉～中葉

竹野川河口付近の低丘陵上に立地する。丘陵稜線上に連接して築造され、３～６号墓は方形の低墳丘をもつ台状墓、７・８号墓は舌状の台状墓である。６号墓と周辺から木棺墓29基・土壙墓５基・土器棺墓９基、計43基の埋葬施設が検出された。副葬品には鉄鏃、鉇を中心とした鉄製品とガラス製勾玉、ガラス製小玉などの玉類がある。11基の埋葬施設で墓壙内破砕土器供献を行う[6]（図23）。

（４）古天王５号墓（京丹後市弥栄町）　後期中葉～後葉

竹野川中流域、標高48mの丘陵尾根先端部に立地する。尾根と直交する２本の区画溝（SD01とSD02）によって墳頂部平坦面を独立させており、墳丘規模は北西SD01の裾側で幅9.8m、南東SD02側で幅約７m、区画溝間は11.3mである。埋葬施設は木棺墓10基・土器棺墓３基・不明１基の計14基である。副葬品を納めているのは築造契機となった第１主体部と次の築造契機となる第９主体部の鉄剣１点と第７主体部の鉇１点、第11主体部の緑色凝灰岩製管玉１点のみである。墓壙内破砕土器供献は第１・７・９・10主体部で行い、第１・３・９主体部では墓壙上破砕土器供献を行う[7]（図23）。

野田川流域後期後半

（５）大風呂南墳墓群（与謝野町岩滝）　後期中葉

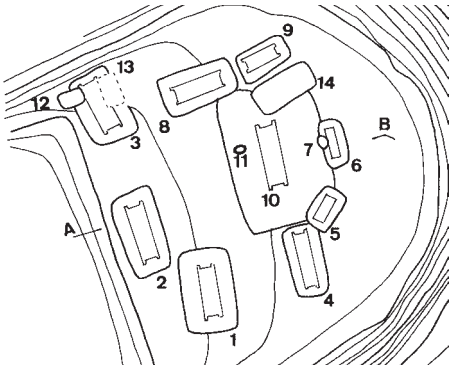
野田川河口域、阿蘇海を東方に見下ろす標高59.5mの丘陵端部に立地する。丘陵先端部側の１号墓とその西に隣接する２号墓とは陸橋部を持つ区画溝によって明瞭に区画している。１号墓第１主体部と２号墓第１主体部及び陸橋部は同一線上にある。埋葬施設は木棺墓５基・土壙墓１基・不明４基の計10基である。１号墓第１主体部は長軸7.3m、短軸4.3m、深さ2.1mの巨大な墓壙に舟底状木棺を納め、副葬品には鉄剣11点、鉄鏃４点、鉄製漁撈具13点、銅釧13点、ガラス釧１点、貝輪１点、ガラス製勾玉10点、碧玉製管玉272点があり豊富な鉄製品を保有している[8]（図23）。

福田川流域後期後半

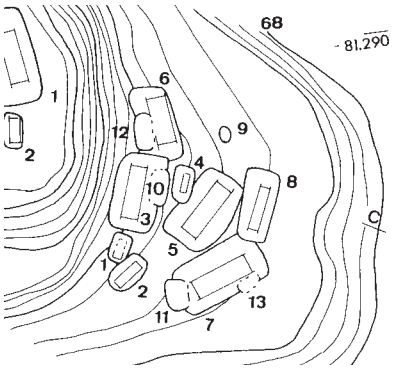
（６）浅後谷南墳墓（京丹後市網野町）　後期後葉

福田川中流域の丘陵先端部に立地する。尾根筋の上部側を大規模に削り、斜面を地山削り出しと一部盛土によって整形された一辺約20m、高さ約1.5mの方形台状墓である。中心埋葬施設の第１主体部を囲むように位置する埋葬施設は木棺墓８基・土壙墓１基の計９基である。第１主体部は長軸6.5m、短軸4.4m、深さ1.7mの墓壙に舟底状木棺を納め、鉇１点のほかガラス製小玉が多量に副葬されており、棺外からは鉄剣２点が出土した。鉄

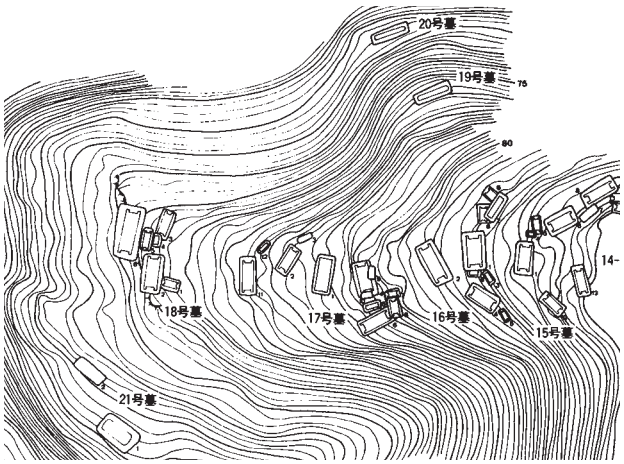
竹野川流域の後期前半



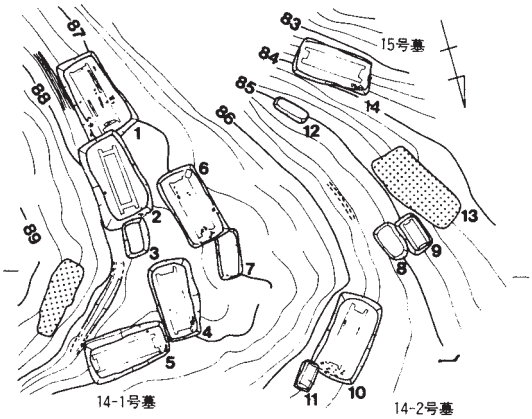
三坂神社墳墓群３号墓



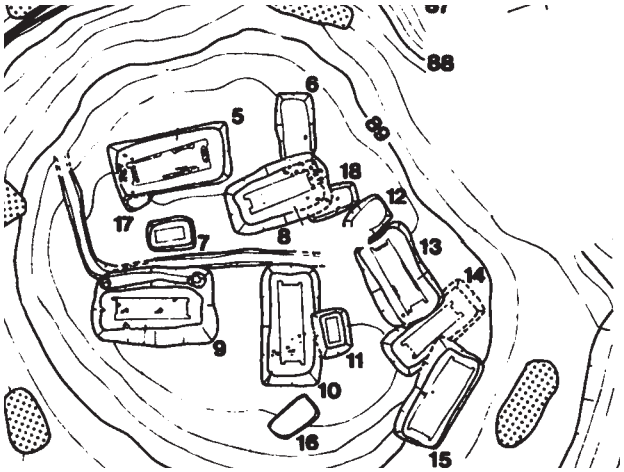
三坂神社墳墓群８号墓



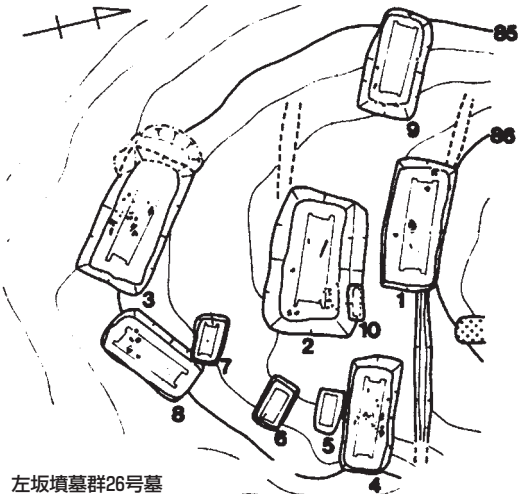
左坂墳墓群18・17・16・15号墓



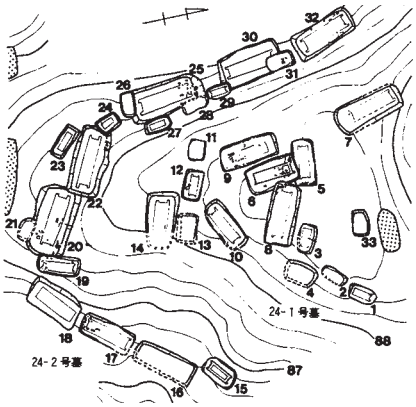
左坂墳墓群14-１・２号墓



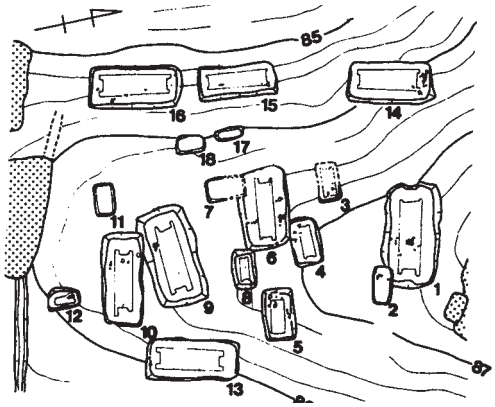
左坂墳墓群１号墳下層墓



左坂墳墓群26号墓



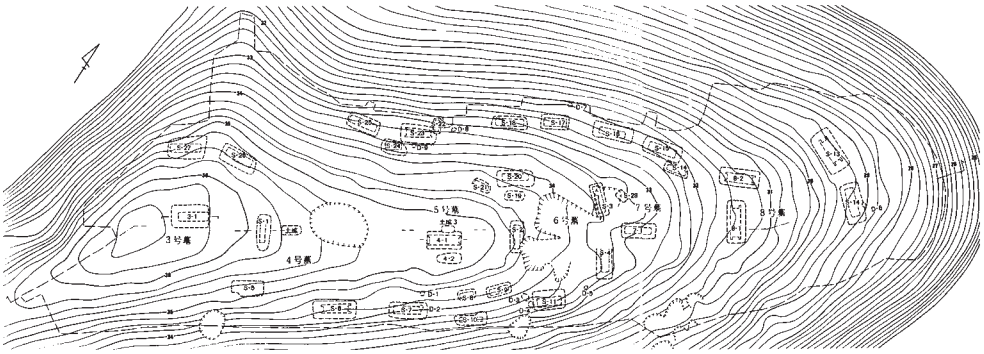
左坂墳墓群24-１・２号墓



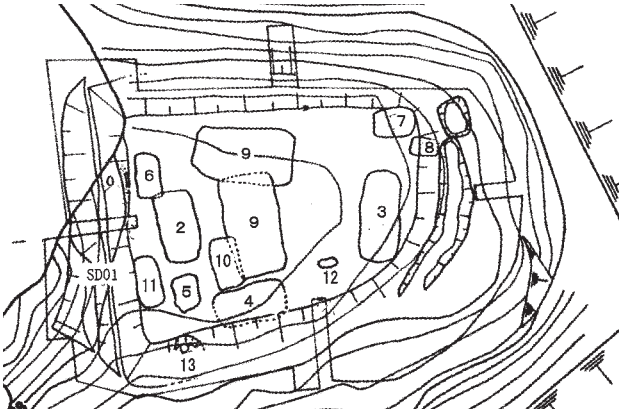
左坂墳墓群25号墓

図22　丹後地域弥生時代後期墳墓埋葬施設検出状況（１）（各報告書より）

竹野川流域後期中葉前後

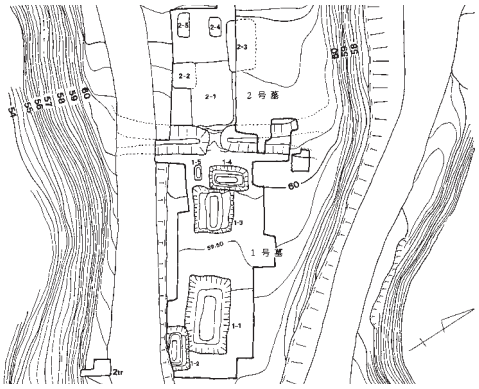


大山墳墓群



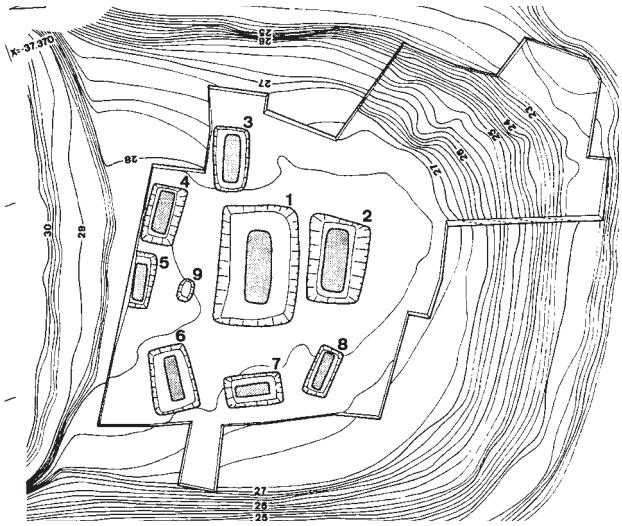
古天王５号墓

野田川流域後期後半



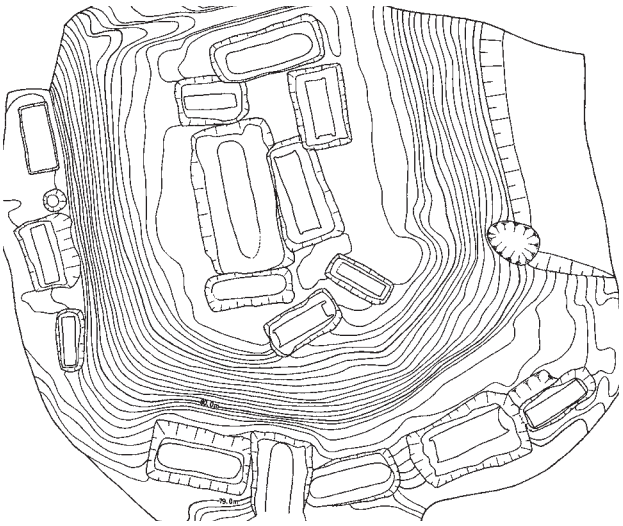
大風呂南墳墓群

福田川流域後期後半

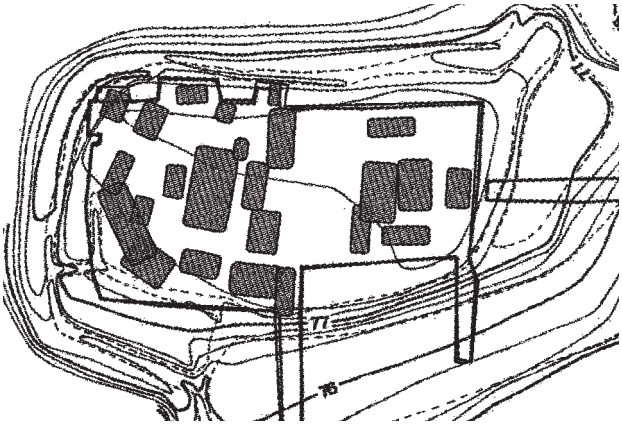


浅後谷南墳墓

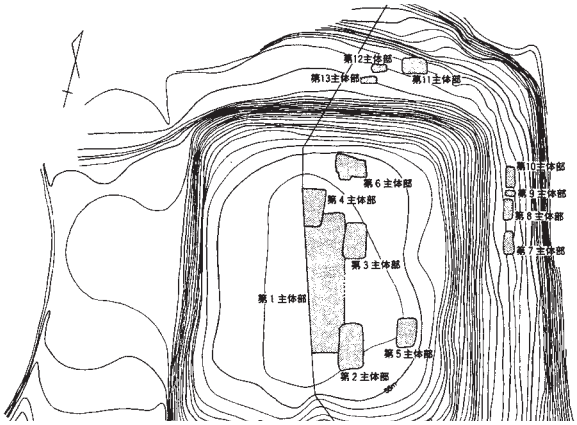
竹野川流域後期後半



金谷１号墓



帯城墳墓Ｂ支群



赤坂今井墳丘墓

図23　丹後地域弥生時代後期墳墓埋葬施設検出状況（２）（各報告書より）

剣は第２主体部から２点と第５主体部から１点が出土している。墓壙内破砕土器供献は第９主体部の土壙墓を除くすべての埋葬施設で行う[9]（図23）。

竹野川流域後期後半

（７）金谷１号墓（京丹後市峰山町）　後期後葉～末葉

竹野川上流域の支流の鱒留川流域にある丘陵尾根先端に立地する。東西15m・高さ２mの方形台状墓で墳頂部平坦面は東西９m・南北10mを測る。周辺三方の地山を削り出し平坦なテラスを設け墳丘基底部を造る。埋葬施設は墳頂部とテラスに造られ、木棺墓16基・土壙墓１基の計17基である。築造契機となった第１主体部は長軸５m、短軸2.7m以上、深さ0.7mの墓壙に舟底状木棺を納める。副葬品については鉄剣と鉇の鉄製品を豊富に保有している。墓壙内破砕土器供献は第10・12・17主体部で行う[10]（図23）。

（８）帯城墳墓Ｂ支群（京丹後市大宮町）　後期後葉～末葉

竹野川中流域、標高79mの丘陵上に立地する。帯城墳墓群は三坂神社墳墓群と左坂墳墓群との間に位置し、丘陵先端部にあるＡ支群と東に100mほど離れた地点にあるＢ支群からなる。丘陵の鞍部に長辺約25m・短辺約15mの方形台状墓を築き、墳頂部平坦面は幅3.5mの中央空間を挟み北群と南群に分かれている。埋葬施設は北群が木棺墓10基・土壙墓１基・土器棺墓２基・不明３基、南群が木棺墓４基・不明２基の計22基である。北群・南群ともに中心埋葬施設に鉄製品を副葬しており、玉類の副葬はない。墓壙内破砕土器供献は行わない[11]（図23）。

（９）赤坂今井墳丘墓（京丹後市峰山町）　後期末葉

竹野川中流域の中郡盆地から福田川流域へ抜ける谷筋を望む丘陵先端部に立地する。墳丘の規模は一辺約40m、高さ３mを測り、基底部には幅５～６mのテラスが巡る。埋葬施設は木棺墓10基・土壙墓２基・土器棺墓１基・不明12基の計25基である。第１埋葬は長軸14m、短軸10.5m、深さ1.8m以上と突出して巨大な墓壙である。中心主体部である第１主埋葬に次ぐ規模の第４埋葬は長軸７m、短軸4.2m、深さ1.8mの二段墓壙に舟底状木棺を納める。墓壙上には円礫を用いた集石遺構が第１埋葬からも検出された。副葬品には鉄剣１点、鉇１点、頭飾りと耳飾りに用いられたガラス製勾玉22点、ガラス製管玉57点、碧玉製管玉39点がある。墓壙内破砕土器供献は第４埋葬と第12周辺埋葬で行う[12]（図23）。

３．埋葬施設の構造

（１）埋葬施設の構造

埋葬施設はまず墳頂部に埋葬空間である平坦面を築く。墳頂部平坦面の形状は後期前葉段階では左坂墳墓群のように区画が方形や三日月形など不明瞭である。しかし、後期中葉以降より定型的な区画をもつようになる。古天王５号墓では２本の区画溝により方形の墳頂部平坦面をつくり、大風呂南墳墓群においても１号墓と２号墓を区画溝で明瞭に区画する。後期後葉になると墳丘規模が一辺約10mの金谷１号墓や一辺約20mの浅後谷南墳墓といった方形台状墓や一辺約40mという大型の方形墳丘墓である赤坂今井墳丘墓が出現し、明瞭な方形の墳頂部平坦面をもつようになる。墳頂部平坦面の埋葬空間は三坂神社墳墓群３号墓第10主体部のように築造契機となる中心埋葬の墓壙周囲に大小の埋葬墓壙が取り囲むような配置となる。また金谷１号墓や赤坂今井墳丘墓では墳丘基底部に築いたテラスにも埋葬施設がある。

埋葬施設は木棺墓・土器棺墓・土壙墓の３つに分けることができる。丹後地域のものは木棺墓中心であり、次いで土壙墓、土器棺墓である。被葬者を埋葬するために掘られた穴を墓壙といい、木棺墓や土壙墓の墓壙は長方形を呈するもので土器棺墓は楕円形が主である。

（２）墓壙規模

墓壙は墳頂平坦面に大小さまざまな規模で築かれ、大規模なものでは大風呂南墳墓群１号墓第１主体部や赤坂今井墳丘墓第４埋葬のように長軸が７mにもなる。さらには赤坂今井墳丘墓第１埋葬のように長軸が14mを測る巨大なものがある。墓壙には地山面から直接掘り込んだ素堀墓壙と２段に掘り込んだ２段墓壙の２種類がある。深く掘り込んだものでは三坂神社墳墓群３号墓第10主体部のように２m近く掘り込んだ墓壙がある。このように丹後地域の墓壙規模は際立って大きなものから小型なものまでさまざまであるため、長軸と短軸の規模を基準に３つに分けてみた（図24）。

長軸が2.1m以下、短軸が1.4m以下をⅠ類、長軸が2.2～3.5m、短軸が0.9～２mをⅡ類、長軸が3.6m以上、短軸が２m以上をⅢ類とした。Ⅰ類とⅡ類、Ⅱ類とⅢ類の各分類の境が必ずしも明確ではないため、墓壙の長軸、短軸、深さからも検討を行った。

すなわち、金谷１号墓第10主体部は長軸が2.1mのためⅠ類に分類されるが、短軸と深さが若干ほかの墓壙より規模が大きいためⅡ類に分類した。三坂神社墳墓群３

号墓第３主体部、８号墓第５主体部と左坂墳墓群１号墳下層墓第９主体部、16号墓第１主体部は長軸が3.5m以下となるが、短軸が２m以上と大きいこと、三坂神社墳墓群３号墓第３主体部、左坂墳墓群１号墳下層墓第９主体部、16号墓第１主体部の深さが１m以上や墳墓の中心埋葬施設になるためⅢ類に分類した。

Ⅰ類と埋葬施設の関係をみると、土壙墓と土器棺はすべてⅠ類に属している。土壙墓は小規模なものに限られ、土器棺も墓壙に納めた土器のサイズに対応するようなごく小規模なものである。墓壙規模が集中しているのは、長軸１～1.5m、短軸0.6～１mの範囲で、土壙墓と木棺墓ともにこの範囲におさまる。

Ⅱ類になると長軸が長くなる傾向にあり、丹後地域の基本的な埋葬施設の規模に達する。大山墳墓群では最大規模の墓壙はⅡ類でとどまる。古天王５号墓も同様であるが、長軸が3.3m、短軸が1.85mとⅡ類の中でもⅢ類に極めて近い。

Ⅲ類は長軸3.5～4.5m前後、短軸２～2.5mの範囲で１つのまとまりがあるものの、長軸が4.5m以上になると規模はばらつく傾向にある。その規模は一気に拡大し、金谷１号墓第１主体部では長軸５m、短軸2.7mある。三坂神社墳墓群３号第10主体部では長軸5.69m、短軸4.27mと短軸が広い。浅後谷南墳墓第１主体部では長軸6.5m、短軸4.4m、大風呂南墳墓では長軸7.3m、短軸4.3mと長い。赤坂今井墳丘墓第４埋葬では長軸７m、短軸4.2m、第１埋葬の方は長軸14m、短軸10.5mという巨大な墓壙規模となる。

Ⅰ～Ⅱ類の各墳墓で配置位置をみると、三坂神社墳墓群３号墓にみるように埋葬空間の中心となる埋葬施設にⅢ類の大型墓壙やⅡ類の中型墓壙といった規模の大きな墓壙を配し、その周囲にⅡ類とⅠ類の小型墓壙を配する（図22）。Ⅰ類はⅢ類やⅡ類に切り込んだ位置や周囲に配する。また中心に大型の墓壙を置かず、左坂墳墓群25号墓のように同規模のⅡ類を置く形態がある（図22）。

（３）木棺形態と規模

埋葬施設の大半は木棺墓が占める。丹後地域の木棺墓は箱形木棺と舟底状木棺の２種類がある。

箱形木棺には長側板が小口板を挟むものと長側板が小口板よりも突出しているものがある。したがって、長側板が小口板を挟むものを箱形木棺と称し、長側板が小口板よりも突出している類型をH形木棺と呼び分ける。

舟底状木棺は石崎義久氏の分類に従いⅠ～Ⅲ類に分ける[13]。Ⅰ類は棺平面の小口部分の一方が鋭角をなし、もう一方の小口が緩やかな弧をなし、縦断面形は鋭角部分のほうが緩やかに立ち上がる。Ⅱ類は棺平面の両端がほぼ同じ緩い弧をなし、縦断面は両小口の縦断面がほぼ同様の弧をなす。Ⅲ類は不整形な隅丸長方形をなすものでやや特異な形態である。

箱形木棺とH形木棺は木棺の長辺と短辺の規模でそれぞれ分類をする。まず箱形木棺は長辺が1.5m未満、短辺0.5m以下を箱形木棺Ａ類、長辺が1.6m以上、短辺が0.3～0.6mを箱形木棺Ｂ類とする（図25）。帯城墳墓Ｂ支群北群第４主体部、第５主体部、第８主体部と大風呂南墳墓群２号墓第４主体部は短辺がＡ類の範囲からはずれるが、長辺の規模よりＡ類にいれる。Ｂ類も分類範囲からはずれる木棺がいくつかあるが、Ａ類と同様に長辺規模にあわせる。採用する墳墓にＡ類とＢ類で数量の差はあまりないが、各墳墓でみると大山墳墓群はＢ類の採用率が高く、三坂神社墳墓群では４号墓第１主体部以外すべてＡ類になる（図27）。

H形木棺は長辺が１m前後、短辺が0.3～0.5m前後をH形木棺ａ類、長辺が1.5m以上、短辺が0.5～0.8m前後をH形木棺ｂ類とする（図26）。箱形木棺と比べH形木棺では採用する数量に大きな差があり、ｂ類の採用率が圧倒的に高い。また、H形木棺は採用する墳墓がわかりやすく、ａ類を採用するのは三坂神社墳墓群と左坂墳墓群のみである。ｂ類に関しても三坂神社墳墓群と左坂墳墓群が中心で他に採用している墳墓は大山墳墓群、金谷１号墓、赤坂今井墳丘墓のみである（図27）。

舟底状木棺はⅠ類が金谷１号墓第１主体部をはじめ５主体部で採用し、Ⅱ類は最も多く10主体部で採用し、Ⅲ類は浅後谷南墳墓の主体部のみ第２・３・８主体部の３主体部で採用する。各墳墓の埋葬施設の配置から分類すると、浅後谷南墳墓では中心埋葬の第１主体部をⅡ類とし、その周辺の第２・３・８主体部がⅢ類となる。また金谷１号墓においては中心埋葬の第１主体部をⅠ類とし、周辺の第６主体部は同じくⅠ類、第４主体部はⅡ類とし、テラス上にある第12・13・14主体部もⅡ類としている。ただ、大風呂南墳墓群や赤坂今井墳丘墓ではこのように中心埋葬と周辺の舟底状木棺の種類がわかれないことから、規則性はしぼれない（図21）。

各種木棺の変化を検討すると後期前葉では箱形木棺Ａ・Ｂ類とH形木棺ａ・ｂ類が採用されており、特にH形木棺は三坂神社墳墓群と左坂墳墓群の採用数が多く、H形木棺ａ類に関してはこの２墳墓に限定される。後期中葉になるとH形木棺の採用が減少し、箱形木棺中心に

なる。そして後期後葉になると舟底状木棺が出現し１つの墳墓でも採用する率が高くなる。箱形木棺の採用は後期前葉から後期後葉まで続く（図27）。

４．副葬品の出土状況

（１）副葬品の構成

丹後地域で副葬が開始され始めるのは弥生時代後期初頭からであり、三坂神社墳墓群３号墓や左坂墳墓群17号墓が初期の段階といえる。三坂神社墳墓群３号墓第10主体部には素環頭鉄刀１点、鉄鏃２点、鉇１点、漆塗り杖状木製品１点、ガラス製勾玉１点、ガラス製管玉13点、水晶算盤玉16点、ガラス製小玉10点が副葬されている。丹後地域の副葬品の特徴である鉄鏃や鉇などの鉄製品とガラス製勾玉やガラス製小玉などの玉類を中心に構成されている。鉄製品は鉄鏃・銅鏃の武器類、鉄刀や鉄剣の刀剣類、鉇や刀子などの工具類がある。玉類はガラス製勾玉などの勾玉類、ガラス製小玉、ガラス製管玉、碧玉製管玉、緑色凝灰岩製管玉などの管玉類があり、ガラス製小玉の出土数が圧倒的に多い。

玉　　類

玉類の副葬は主に頭部付近や頭部から頸部付近、頭部から胸部付近より装着したような状態で出土し、頭飾り、首飾り、耳飾り、手玉などの装身具がある。ガラス製小玉やガラス製管玉の原料はカリガラスや鉛バリウムで空色や淡青色、淡青緑色などの青色系である[14]。

三坂神社墳墓群３号墓第10主体部では頭頂部付近から頭飾りとみられるガラス製管玉13点と頭飾りから垂れ下がるような状態で耳飾りまたは垂飾りとみられるものが、水晶算盤玉・ガラス製小玉・水晶算盤玉・ガラス製勾玉の順で出土している。赤坂今井墳丘墓第４埋葬では頭飾りと耳飾りが顕著に出土した。頭飾りはガラス製勾玉とガラス製管玉、碧玉製管玉で構成したものが３連ある。外側の１連はガラス製勾玉13点、ガラス製管玉57点で構成し、基本的にガラス製勾玉の間にガラス製管玉を４点の順で配する。中央の１連はガラス製勾玉９点、碧玉製管玉39点で構成し、ガラス製勾玉の間に碧玉製管玉４点を配している。内側の１連はガラス製勾玉３点以上、細身のガラス製管玉31点以上で構成し、風化により正確な

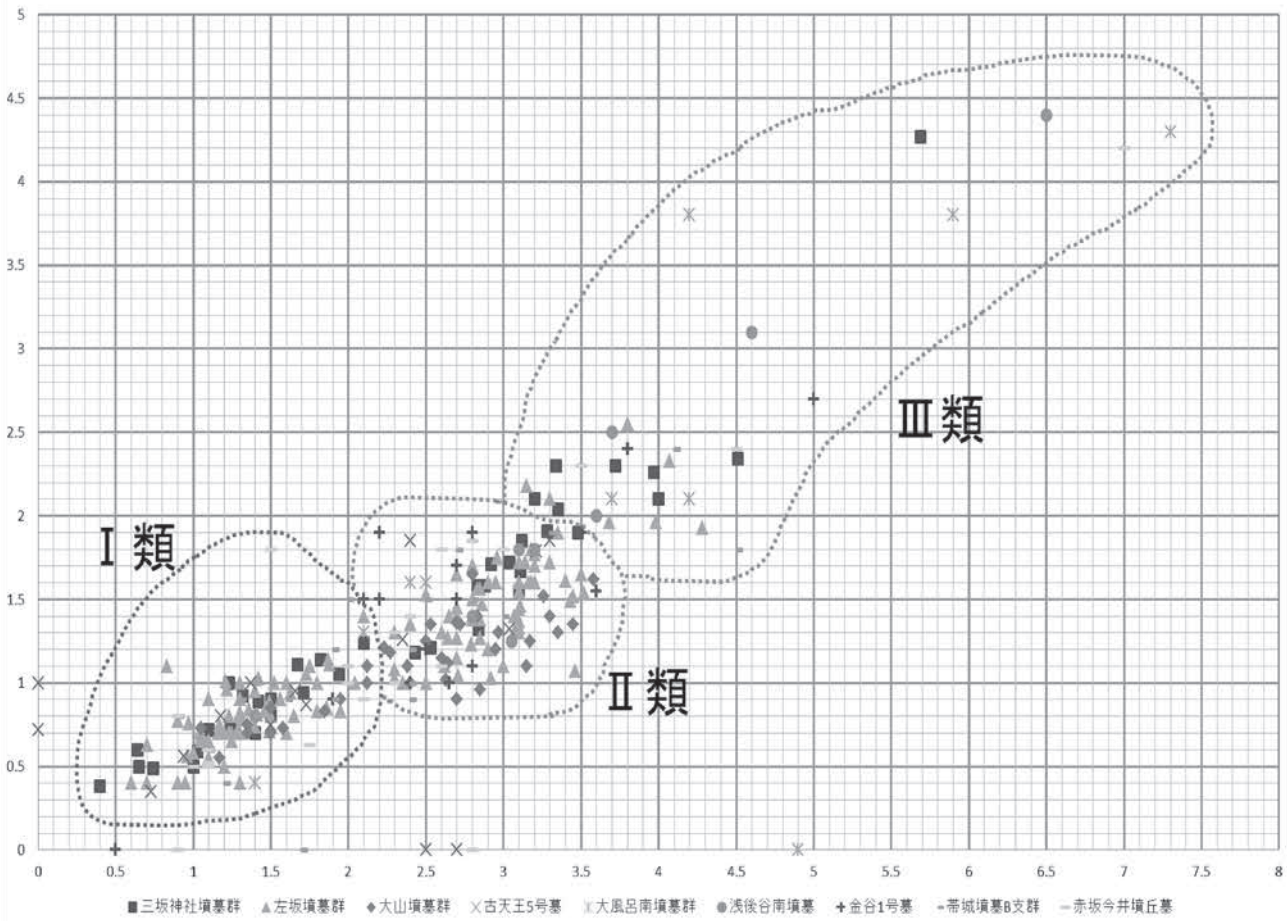


図24　墓壙規模の分布

配列は不明であるが、外側と中央の２連同様に規則性をもった配列と推測する。耳飾りは両耳一対で出土し、右耳側は碧玉製管玉を簾状に４段で構成し先端に勾玉を２点付け、左耳側は碧玉製管玉を簾状に５段で構成し先端に勾玉を３点付ける。

首飾りは左坂墳墓群25号墓第９主体部よりU字状に連なったガラス製小玉や同墳墓群14-1号墓第２主体部より中央にガラス製管玉、両端にガラス小玉を配したものがある。これらの装身具は主にガラス製小玉で構成されており、三坂神社墳墓群と左坂墳墓群が主な副葬墳墓となっている。

また、玉類の副葬では装身具以外に、被葬者の頭部から胸部にかけて意図的にばら撒かれたような状態のものが左坂墳墓群や大風呂南墳墓群でみられる。

鉄 製 品（図28）

鉄製品は鉄鏃などの武器類と鉇や刀子の工具類を組合せ副葬している器種が多く、三坂神社墳墓群や左坂墳墓群では鉄鏃と鉇の組み合わせが目立つ。

鉄鏃は鏃身部が三角形を呈するものと柳葉形を呈し、大半が無茎である。矢柄の木質が残存することから矢柄の付いた弓矢の状態で副葬されたとみられる。鉇は刃部横断面が三日月形と鎬がありＶ字形の２種類があり、布に包まれた状態で副葬されていたものもある。

鉇の副葬方法については、福島孝行氏が副葬位置で分類している[15]。副葬が開始された時期の三坂神社墳墓群３号墓第10主体部や左坂墳墓群17号墓第１主体部では被

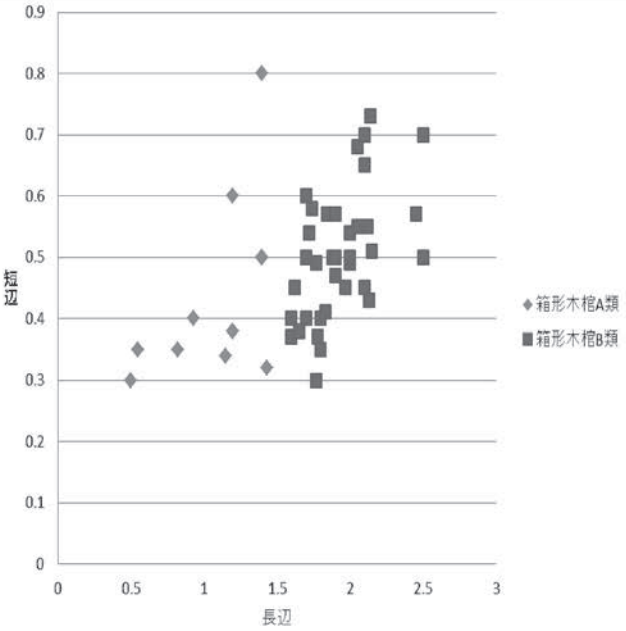


図25　箱形木棺規模

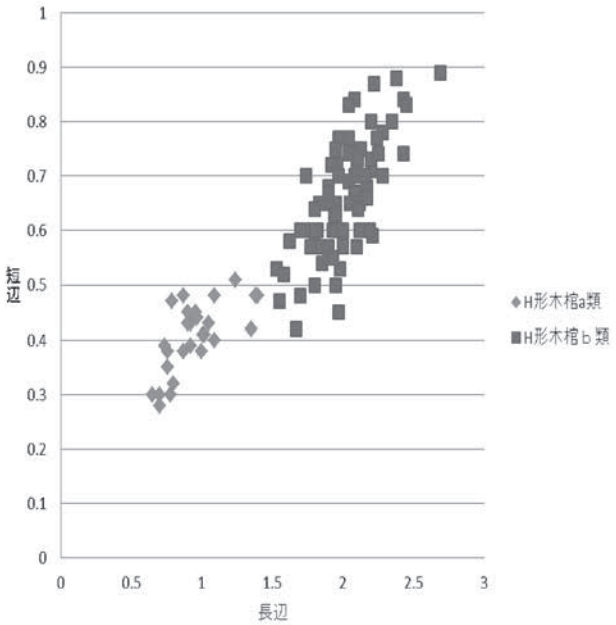


図26　H形木棺規模

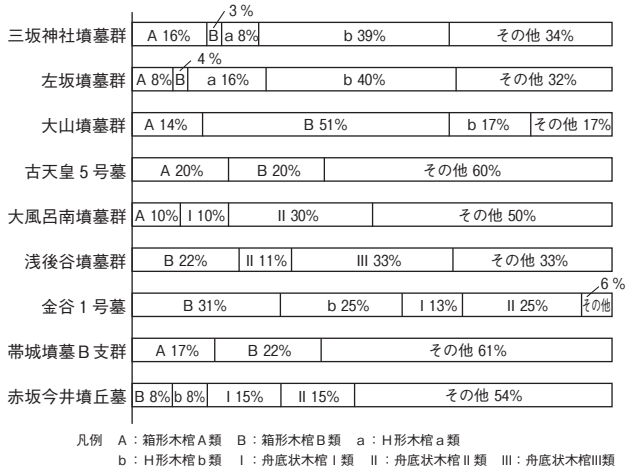


図27　各類型木棺の採用

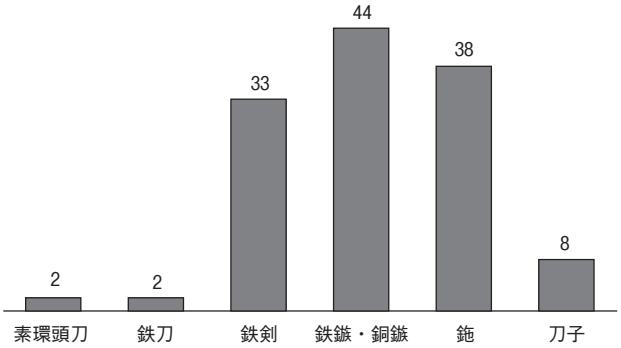


図28　鉄製品器種別出土

葬者の上半身付近右側に切先方向が爪先側を向き長側板と平行する状態で出土する。切先方向は頭部側と爪先側があるが、この副葬位置を副葬開始時期の標準的なものとしている。後期中葉では副葬位置が多様になり下半身付近、小口板と平行し頭部付近に置く。後期後葉になると被葬棺内中央付近、被葬者の上に置くようになる。基本的に被葬者の横に置く場合は右側であるが、後期後葉になると金谷１号墓第12・15主体部にみるように被葬者の左側にも置かれる。

鉄剣は、刃部断面がレンズ状と鎬がある菱形状の２種類がある。関部も直角のものとなだらかなものがある。また茎部に目釘穴を１つ穿つものや大風呂南墳墓群出土鉄剣には関部の剣身には小孔を２つ穿つ刃関双孔がある。大風呂南墳墓群第１主体部には11点と大量に副葬されており、１点を除き布で巻かれた状態で副葬されていた。鞘に収めない場合は布が巻かれたとみられる。福島氏が鉄剣についても法量や位置から副葬方法を検討している[16]。剣身を身部長、身部幅で４段階に分類したものと茎部を茎長、茎幅で３段階にしたものを統合した類型でみる。後期後半は剣身が長さ23～36cmで幅３～4.5cm、茎が長さ３cmまでで幅２cm前後が卓越している。後期中葉では剣身が短く茎がやや長めの傾向で、後期後葉以降は短い剣に台形状の茎をもつものがみられる。副葬位置については大風呂南墳墓群第１主体部をみると、剣身長が30cm前後の物を頭部左右に、長剣を腰から足にかけての右側に置く配置である。後期後半から腰や足の横に置くようになり、頭部付近に置くものは短剣に限られてくる。

（２）副葬品の出土状況

副葬が始まる弥生時代後期前葉は三坂神社墳墓群、左坂墳墓群、大山墳墓群にみるように玉類と鉄鏃や鉇、刀子の副葬が目立つ。玉類はガラス製小玉だけでも１万点を超え、その数は北部九州に並ぶ。

三坂神社墳墓群と左坂墳墓群では１つの埋葬施設に数百個単位でガラス製小玉があり、その数は圧倒的である。三坂神社墳墓群３号墓第２主体部では被葬者の首から胸付近にかけてガラス製管玉13点を中心に両端にガラス製勾玉１点ずつとガラス製小玉50点ずつで構成されるものである。この一連の玉類とともにガラス製小玉16点からなる手玉が出土し、ガラス製小玉は合計で117点となる。また同墳墓群４号墓第４主体部では被葬者の頭部と胸部付近から568点ものガラス製勾玉が出土しており、胸部付の４連の首飾りがその大半を占める。

装身具以外に玉類を意図的に被葬者の上にばら撒かれる。左坂墳墓群25号墓第５主体部ではガラス製小玉102点、第６主体部ではガラス製小玉288点、26号墓第８主体部ではガラス製小玉438点、碧玉製管玉24点、ガラス製管玉１点、26号墓第９主体部ではガラス製小玉300点がある。最も多くばら撒かれていたのは左坂墳墓群第14－1号墓第６主体部である被葬者の頭部付近から出土するガラス製小玉535点である。

鉄製品に関しては鉄鏃と鉇の副葬が中心である（図28）。鉄鏃は三坂神社墳墓群、左坂墳墓群、大山墳墓群が全体の出土数の約９割を占め、主に後期前葉から中葉にかけて副葬される。鉄鏃は１つの埋葬施設に対し、１点ないしは２点が副葬されている。２点以上副葬するのは大風呂南墳墓群第１主体部の４点のみである。鏃身部は左坂墳墓群26号墓第２主体部のような三角形を呈するものと、左坂墳墓群26号墓第３主体部のような柳葉形を呈するものがある。三角形を呈するものには左坂墳墓群25号墓第１主体部や32号墓第３主体部のように脚が長い両脚式のものもみられる。三角形鏃は鏃身長が４cm、幅が３cm前後で柳葉形鏃は鏃身長が６cm、幅が２cm前後である。副葬位置は大半が被葬者の左側、頭部付近から腰部付近にかけて置かれている。

鉇は後期全体を通して副葬されるが、後期前葉から中葉にかけての副葬が目立ち、１つの埋葬施設に対して１点のみでの副葬である。刃部は横断面が左坂墳墓群26号墓第３主体部のような三日月形と左坂墳墓群１号墳下層第９主体部のように鎬がありＶ字形を呈する。後期後葉では金谷１号墓で４点、赤坂今井墳丘墓で７点が出土し、大半の鉇に布の痕跡がつく。布に巻かれた状態での副葬である。

刀子の出土は８点で、帯城墳墓B支群の１点以外は三坂神社墳墓群、左坂墳墓群、大山墳墓群の後期前葉から中葉にかけての墳墓群である。いずれも布に巻かれた状態であったと考えられる。大山墳墓群第４主体部の刀子は全体に巻かれており、三坂神社墳墓群４号墓第５主体部や左坂墳墓群26号墓第１主体部でも布の付着した刀子が出土している。三坂神社墳墓群３号墓第２主体部からは柄付きのものが出土する。

後期前葉の鉄製品で、鉄刀や鉄剣の刀剣類の副葬はごくわずかであるが、後期前葉にしか出土しない素環頭鉄刀が２点ある。三坂神社墳墓群３号墓第10主体部では全長29cm、柄の先端に最大径6.3cmの環頭部をもち、木製の鞘に納め、柄部に布を巻いた状態で出土した。また、左坂墳墓群26号墓第２主体部では全長40.7cmの素環頭鉄

刀が出土し、鞘の木質の痕跡と環頭部と刃部の布の付着から、鞘に納め、布を巻いた状態での副葬と考えられる。

後期後半になると玉類の副葬が大幅に減少し、鉄製品も鉄鏃と鉇中心の副葬から鉄剣などの刀剣類へと副葬品の様相は大きく変化する。

玉類ではガラス製小玉の副葬が後期前葉から中葉では三坂墳墓群や左坂墳墓群から数千点単位で出土していたのが、後期後葉では浅後谷南墳墓群と金谷１号墓で各約300点のみである。装身具はガラス製小玉で主に構成していたものから、ガラス製勾玉などの勾玉類と碧玉製管玉や緑色凝灰岩製管玉などの管玉類を配した装身具へと変化する。丹後地域の装身具で最も顕著に出土した例は、赤坂今井墳丘墓第４埋葬のガラス製勾玉とガラス製管玉、碧玉製管玉で構成した３連の頭飾りと両耳一対で碧玉製管玉と小型の勾玉で構成した簾状の耳飾りである。また、大風呂南墳墓群１号墓第１主体部より日本での出土例は４遺跡しかない透明度の高いガラス製釧が１点、被葬者の胸部付近から出土した。形状は外側がほぼ正円形で外径9.7㎝、内径5.8㎝、厚さ1.8㎝、外側に明確な稜線をもつ。ガラス製釧はドーナツ状の鋳型にカリガラスを流し、磨いて仕上げたと考えられている[17]。大風呂南墳墓群１号墓第１主体部ではガラス製釧以外に上下と右側の３ヵ所に突起をもつ銅釧が被葬者の頭部付近から重なり合うように13点出土している。

後期後半から鉄製品の副葬の中心となる鉄剣は鉄鏃、鉇に次ぐ出土数であり、後期後葉で32点が出土している。最も出土数が多い大風呂南墳墓群１号墓第１主体部では被葬者の頭部付近右側から５点、左側から４点、腰部付近右側から１点、足元付近右側から１点、合計11点出土した。鉄剣の副葬は基本的に１つの埋葬施設に１点であるため、鉄剣を豊富に保有していたことがわかる。大風呂南墳墓群では他に１号墓第２主体部で２点、１号墓第３主体部で１点、２号墓第４主体部で１点、合計15点の鉄剣が出土している。浅後谷南墳墓では棺外出土の２点を含めた５点が出土し、金谷１号墓でも同じく５点の鉄剣が出土し、帯城墳墓群Ｂ支群では北群で棺外から１点、南群で３点の合計４点が出土した。また古天王５号墳で２点、赤坂今井墳丘墓で１点の鉄剣が出土した。

福島氏の鉄剣分類からみると、後期後半は古天王５号墓第１主体部と第９主体部、大風呂南墳墓群１号墓第１主体部の被葬者の頭部付近から出土した９点や浅後谷南墳墓第１主体部の１点、金谷１号墓第６主体部、帯城墳墓Ｂ支群北群第１主体部から出土した、剣身が長さ23～36㎝で幅３～4.5㎝、茎が長さ３㎝までで幅２㎝前後の鉄剣が卓越している。

また、後期後葉では浅後谷南墳墓第１・２・６主体部、金谷１号墓第15主体部などの剣身が短く茎がやや長めの鉄剣傾向になる。鉄剣の形状は刃部断面が大風呂南墳墓群１号墓第１主体部や金谷１号墓出土のようなレンズ状と浅後谷南墳墓出土のような鎬があり菱形状の２種類がある。関部は直角を呈するものが基本的であるが、大風呂南墳墓群１号墓第１主体部では関部がなだらかなものもある。また、茎部に金谷１号墓第５・６主体部のように目釘穴を１つ穿つものや、大風呂南墳墓群の鉄剣のように関部の剣身に小孔を２つ穿つ刃関双孔がある。鉄剣の副葬状態は大風呂南墳墓群１号墓第２主体部や浅後谷南墳墓第１主体部のように鞘に入った状態もあるが、布に巻かれた状態であったと考える。

（３）副葬品のまとめ

丹後地域の弥生時代後期の副葬品は、後期前葉から中葉にかけて、三坂神社墳墓群３号墓第10主体部や左坂墳墓群25号墓第９主体部のように玉類で構成された装身具、鉄鏃や鉇、刀子の鉄製品を副葬する埋葬施設が中心であった。しかし、後期後半より玉類は大幅に減少し、鉄剣中心の副葬へと変化するのである。大風呂南墳墓群１号墓第１主体部のような多量の鉄剣副葬をはじめ、その変化は明瞭である。

５．埋葬施設と副葬品の関係性とその性格

（１）埋葬施設の性格

ここでは３節において行った墓壙規模と木棺規模と形態の分類から木棺を納める墓壙規模を基本とし、墓壙Ⅰ～Ⅲ類に各種木棺分類をあてはめ埋葬施設の性格をみていく。

土壙墓と土器棺墓を含む小規模な墓壙Ⅰ類には、例外として大山墳墓群周辺第17主体部と金谷１号墓第11主体部の箱形木棺Ｂ類、赤坂今井墳丘墓第８埋葬の舟底状木棺Ⅱ類がある。長辺が1.5m以下の箱形木棺Ａ類とＨ形木棺ａ類を納める。墓壙Ⅱ類においては長辺が1.5m以上の箱形木棺Ｂ類とＨ形木棺ｂ類を納め、箱形木棺とＨ形木棺は長辺が1.5mを境にして墓壙の規模が変化することがわかる。墓壙規模の拡大が著しい墓壙Ⅲ類では木棺規模の大きな変化はみられず、墓壙だけが拡大する傾向にある。舟底状木棺においても墓壙規模に比例して長辺が３m前後から７mと拡大するものの、金谷１号墓第14主体部のように墓壙の掘形いっぱいに納めるものもあ

り、丹後地域の埋葬施設は大型の墓壙に特徴があるといえる。

基本的な埋葬施設の配置において中心埋葬施設となるのは墓壙Ⅲ類であり、後期後葉の舟底状木棺が出現するまではH形木棺ｂ類を納める。墓壙Ⅲ類に属する規模の墓壙をもたない大山墳墓群や古天王５号墓であっても中心埋葬には規模の大きな墓壙Ⅱ類に箱形木棺Ｂ類またはH形木棺ｂ類を納める。そして周囲にはそれを取り囲むように墓壙Ⅱ－Ｂ・ｂ類を配し、墓壙Ⅰ－Ａ・ａ類は他の墓壙の周囲または重なる位置に配するのである。三坂神社墳墓群３号墓のように後期前葉から中葉ではこれが基本配置となる。また、左坂墳墓群25号墓のように同規模の墓壙Ⅱ類で構成する配置がある。しかし、墓壙が大型化する後期後葉になると大風呂南墳墓群１号墓や金谷１号墓、赤坂今井墳丘墓のように中心埋葬施設の長軸に重なり周囲に埋葬施設を配する形となる。また金谷１号墓や赤坂今井墳丘墓ではテラスにも埋葬施設を設け墳頂部平坦以外にも埋葬空間を設ける。丹後地域の埋葬施設の配置は中心に大型の墓壙をおくことを基本とし、周囲の埋葬施設の配置が変化する（図22・23・29）。

（２）埋葬施設と副葬品の関係性とその性格

まず、鉄製品を副葬している埋葬施設をみると、墓壙Ⅰ類でわずかに副葬がみられるものの、墓壙Ⅱ・Ⅲ類で副葬が行われていることがわかる。また鉄製品を副葬する木棺はH形木棺ｂ類が主である。箱形木棺Ｂ類が多い大山墳墓群やH形木棺が減少する後期後葉では箱形木棺Ｂ類に副葬される。後期前葉から中葉にかけては鉄製品の副葬に変化が現れ鉄剣の副葬が顕著になる後期後葉、鉄剣を副葬しているのは舟底状木棺に集中する。大風呂南墳墓群では鉄剣11点に加え鉄鏃など、多数の鉄製品を副葬する他、金谷１号墓でも第６主体部・第14主体部で鉄剣を副葬する。

舟底状木棺はⅠ～Ⅲ類の形状に関係はなく鉄剣の副葬を行うため、舟底状木棺と鉄剣という組合せに被葬者の階層性があらわれていると考えられる。また、舟底状木棺以外で箱形木棺Ｂ類に鉄剣を副葬する傾向にあり、後期後葉では箱形木棺Ｂ類が箱形木棺Ａ類やH形木棺ｂ類と比べ階層の高い木棺であると考えられる。

玉類の副葬は墓壙Ⅰ～Ⅲ類で行われている。鉄製品の副葬がほとんどない墓壙Ⅰ類では箱形木棺、H形木棺どちらも副葬しており、土壙墓でも玉類を副葬しており、木棺の種類による副葬の優位性は見られない。

埋葬施設の配置から副葬を考えると基本配置の場合、中心埋葬施設には鉄製品と玉類を多数副葬し周囲に鉄製品や玉類を副葬した埋葬施設を配す。

三坂神社墳墓群３号墓では中心埋葬施設の第10主体部に素環頭鉄刀、鉄鏃、鉇、各種玉類で構成された頭飾りと耳飾りを副葬し、周囲の墓壙Ⅱ類にあたる第１主体部・第３主体部に鉄鏃と鉇、第２主体部には刀子と玉類、そして墓壙Ⅰ類に玉類を副葬する。埋葬施設の規模により副葬品の種類や量に明確な差があることがわかる。

他の墳墓においても中心埋葬施設に複数の鉄製品や玉類を副葬しており、周囲の埋葬施設との階層性の違いを明確に示す。一方で同規模の墓壙配置では玉類の副葬を中心としており副葬の量に差はあまりないことから階層性に大きな違いはないと考える。

したがって、後期前葉から中葉の墳墓は中心埋葬施設の被葬者とその家族的な関係にあたる集団で構成されていたと考えられる。

後期後葉の埋葬配置では、基本配置と同様に中心埋葬に複数の副葬品を納める。

しかし、後期前葉から中葉と比べて副葬品の変化から鉄剣主体の副葬となり、また舟底状木棺に鉄剣を副葬することから、基本配置の中心埋葬施設と比べ、より高い次元の階層の被葬者に成長したとみられる。周囲の埋葬施設においても長軸が重なる埋葬施設やテラス上にある埋葬施設でも舟底状木棺に鉄剣を副葬しており、被葬者がある一定の力をもつ特定の集団であることがわかる。

丹後地域の埋葬施設は後期後葉になるにつれ墓壙規模は大型化する傾向にあり、後期後葉を境に埋葬施設、副葬品ともに大きな変化をみせる。

鉄剣の副葬と舟底状木棺の採用で豊富な鉄製品を保有できるようになることや大型化する墳墓から、丹後地域により階層の高い首長層の存在がみえてくる。

日本海に面する丹後半島は海上を通じて交流関係をもち、独自の文化を築き上げてきたが、後期後葉ではその交流関係がより発展するのである。そこで生まれた首長層たちの権威が大型の埋葬施設や墳丘、豊富な鉄製品の副葬に反映されているのである。

本論では明確な被葬者像についてあきらかにすることはできなかった。今後、埋葬施設の築造順の検討や副葬品の埋葬方法など、残された検討・分析がある。これらを具体化することで被葬者像をより明確にしていくことが必要である。

図29　丹後地域弥生時代後期墳墓埋葬施設出土遺物分類模式

注

（１）肥後弘幸「近畿北部の弥生墓制」『四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究』島根県古代文化センター　2007年。

（２）豊岡市教育委員会編「上鉢山・東山墳墓群」『豊岡市文化財調査報告』第26集　豊岡市教育委員会　1992年。

（３）今田昇一・肥後弘幸「三坂神社墳墓群・三坂神社裏古墳群・有明古墳群・有明横穴群」京都府大宮町文化財調査報告書』第14集　大宮町教育委員会　1998年。

（４）今田昇一ほか「左坂古墳（墳墓）群Ｇ支群」『京都府大宮町文化財調査報告書』第20集　大宮町教育委員会　1998年。

（５）肥後弘幸「左坂墳墓群」『埋蔵文化財発掘調査概報（1994）』京都府教育委員会　1994年。

（６）平良泰久「丹後大山墳墓群」『京都府丹後町文化財調査報告』第１集　丹後町教育委員会　1983年。

（７）丸山次郎「（１）古天王墳墓・古墳群（２）太田古墳群試掘調査」『京都府弥栄町文化財調査報告集』第19集　弥栄町教育委員会　2001年。

（８）白数真也ほか「大風呂南墳墓群」『岩滝町文化財調査報告』15集　岩滝町教育委員会　2000年。

（９）竹原一彦「浅後谷南城跡・浅後谷南墳墓」『京都府遺跡調査概報』第84冊　京都府埋蔵文化財調査研究センター　2000年。

（10）石崎善久「金谷古墳群（１号墓）」『京都府遺跡調査概報』第66冊　京都府埋蔵文化調査研究センター　1995年。

（11）岡田晃治ほか「国営農地開発事業関係遺跡昭和62年度発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報（1987）』京都府教育委員会　1988年。

（12）峰山町教育委員会「赤坂今井墳丘墓発掘調査報告書」『京都府峰山町埋蔵文化財調査報告書』第24集　峰山町教育委員会　2004年。

（13）石崎善久「舟底状木棺考―丹後の刳抜式木棺―」『京都府埋蔵文化財論集』第４集　京都府埋蔵文化財センター　2001年。

（14）（３）と同じ。

（15）福島孝行「弥生墳墓における鉇の副葬作法について（１）」『京都府埋蔵文化財情報』第78号　京都府埋蔵文化財センター　2000年。

（16）福島孝行「弥生墳墓における鉄剣の副葬（一）―丹後地域―」『同志社考古学シリーズ』Ⅸ考古学に学ぶ（Ⅲ）　同志社考古学シリーズ刊行会　2007年。

（17）（８）と同じ。

参考文献

石崎善久「金谷古墳群（１号墓）」『京都府遺跡調査概報』第66冊　京都府埋蔵文化調査研究センター　1995年

石崎善久「弥生墳墓の構造と変遷―舟底状木棺を中心として―」『丹後の弥生王墓と巨大古墳』季刊考古学別冊10　雄山閣　2000年

石崎善久「舟底状木棺考―丹後の刳抜式木棺―」『京都府埋蔵文化財論集』第４集　京都府埋蔵文化財調査研究センター　2001年

今田昇一ほか「左坂古墳（墳墓）群Ｇ支群」『京都府大宮町文化財調査報告書』第20集　大宮町教育委員会　1998年

今田昇一・肥後弘幸「三坂神社墳墓群・三坂神社裏古墳群・有明古墳群・有明横穴群」京都府大宮町文化財調査報告書』第14集　大宮町教育委員会　1998年

岡田晃治ほか「国営農地開発事業関係遺跡昭和62年度発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報（1987）』京都府教育委員会　1988年

白数真也ほか「大風呂南墳墓群」『岩滝町文化財調査報告』15集　岩滝町教育委員会　2000年

清家章『古墳時代の埋葬原理と親族構造』大阪大学出版会　2010年

平良泰久「丹後大山墳墓群」『京都府丹後町文化財調査報告』第１集　丹後町教育委員会　1983年

肥後弘幸「左坂墳墓群」『埋蔵文化財発掘調査概報（1994）』京都府教育委員会　1994年

肥後弘幸「丹後地域の弥生時代後期から古墳時代前期の土器編年（上）―弥生時代後期―」『太邇波考古』第７号　両丹考古学研究会　1995年

肥後弘幸「家族墓へのアプローチ―北近畿後期弥生墳墓の場合―」『京都府埋蔵文化財論集』第３集　京都部埋蔵文化財調査研究センター

肥後弘幸「弥生王墓の誕生―北近畿における首長墓の変遷―」『丹後の弥生王墓と巨大古墳』季刊考古学別冊10　雄山閣　2000年

肥後弘幸「近畿北部の弥生墓制」『四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究』島根県古代文化センター　2007年

福島孝行「弥生墳墓における鉇の副葬作法について（１）」『京都府埋蔵文化財情報』第78号　京都府埋蔵文化財調査研究センター　2000年

福島孝行「弥生墳墓における鉄剣の副葬（一）―丹後地域―」『同志社考古学シリーズ』Ⅸ考古学に学ぶ（Ⅲ）　同志社考古学シリーズ刊行会　2007年

丸山次郎「（１）古天王墳墓・古墳群（２）太田古墳群試掘調査」『京都府弥栄町文化財調査報告集』第19集　弥栄町教育委員会　2001年

山岸良二編『原始・古代の墓制』同成社　1991年

大阪府立弥生文化博物館『青いガラスの燦き―丹後王国がみえてきた―』大阪府弥生文化博物館図録24　大阪府弥生文化博物館　2002年

京丹後市史編さん委員『京丹後市の考古資料』京丹後市史資料編　京丹後市　2010年

京都府立丹後郷土資料館『王墓の考古学―丹後の弥生王権成立の謎を解く―』丹後郷土資料館友の会　2007年

峰山町教育委員会「赤坂今井墳丘墓発掘調査報告書」『京都府峰山町埋蔵文化財調査報告書』第24集　峰山町教育委員会　2004年

第６章

芦屋神社境内古墳の石室の石材と芦屋神社の石造物

１．芦屋神社境内古墳の石室石材

芦屋市東芦屋町に芦屋神社がある。当神社の境内西端に自然石を積んだ横穴式石室の古墳がある。石室の石積の様子から判断すれば、石室は６世紀末か７世紀初頭の時期に築造されたと推定される。玄室内に石室を再利用して置かれたと推定される３基のラントウがある。石材の観察は裸眼で行い、石種を同定した。石種の岩相と石材の形状をもとに石材の採取地についても言及する。

（１）石材の使用傾向

石室に使用されている石材は全て自然石で、加工石がみられない。石材の石種は黒雲母花崗岩Ａ、花崗斑岩、石英斑岩、輝石安山岩で、黒雲母花崗岩Ａが殆ど全てを占める。図30に示すように石英斑岩が６個、花崗斑岩が３個、輝石安山岩が１個で、他は黒雲母花崗岩Ａである。玄室にあるラントウは左手前（図30のＢ）のものが安山岩質火山礫凝灰岩製で、右手前（図30のＣ）と奥中央（図30のＡ）のものは黒雲母花崗岩Ｂ製である。

（２）石種の特徴

黒雲母花崗岩Ａ、黒雲母花崗岩Ｂ、花崗斑岩、石英斑岩、輝石安山岩、安山岩質火山礫凝灰岩の特徴について述べる。

黒雲母花崗岩Ａ：色は淡桃色である。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が４～10㎜、量が多い。長石は桃色と灰白色を呈するものがある。桃色の長石は、粒径が５～10㎜、量が多い。灰白色の長石は、粒径が３～10㎜、量が中である。黒雲母は黒色、粒状で、粒径が１～２㎜、量がごく僅かである。

黒雲母花崗岩Ｂ：色は淡桃色である。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が２～８㎜、量が多い。長石は桃色と灰白色を呈するものがある。桃色の長石は、粒径が２～８㎜、量が多い。灰白色の長石は、粒径が５～８㎜、量が中である。黒雲母は黒色、粒状、板状で、粒径が１～３㎜、量が僅かである。

花崗斑岩：色は淡桃色である。斑晶鉱物は石英、長石、黒雲母である。石英は無色透明、粒径が１～1.5㎜、量が中である。長石は桃色と灰白色を呈するものがある。桃色の長石は、粒径が１～２㎜、量が多い。灰白色の長石は、粒径が１～1.5㎜、量が僅かである。黒雲母は黒色、粒状で、粒径が0.5㎜、量が僅かである。石基はややガラス質である。

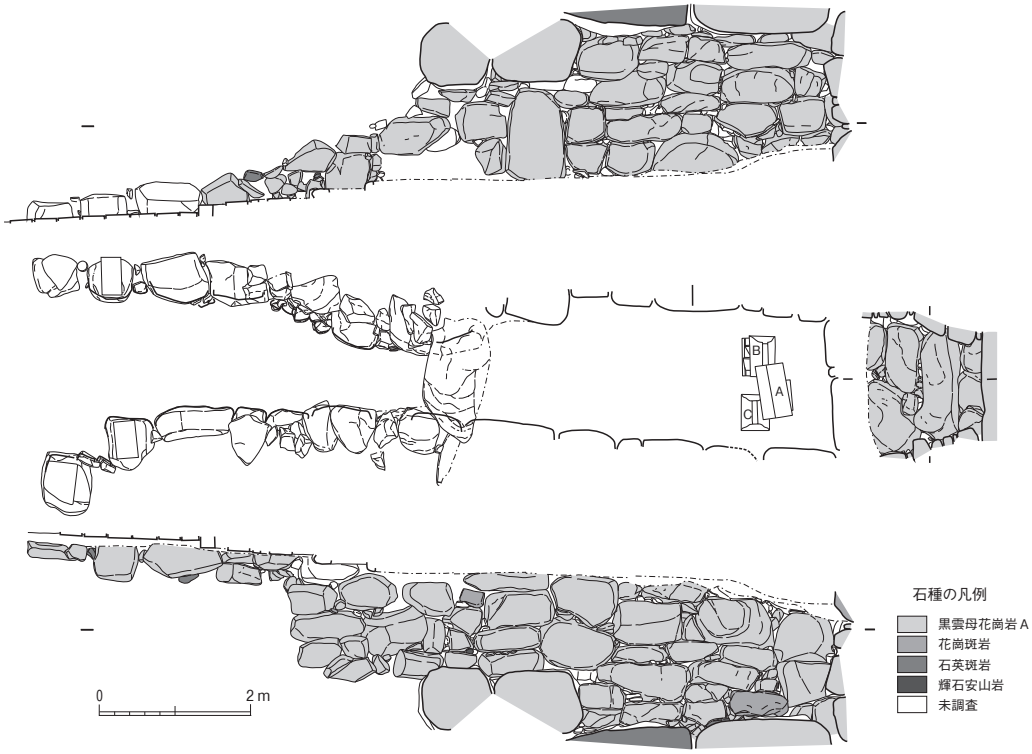


図30　芦屋神社境内古墳の石材の石種分布

写真45　石材に節理面がみられ、その部分に割れ目が入っている。上から圧力がかかれば、この割れ目で石が割れるだろう。

写真46　鉱物粒が剥がれたのみで、石の表面がザラザラしている。

写真47　節理面に沿って割れ目が生じた羨道入口の天井石。山地に転在するような風化面を示す。

写真48　表面剥離がみられる。タマネギの皮をむくような剥がれ方をしている。このような剥離の様子はタマネギ状風化と呼ばれている。

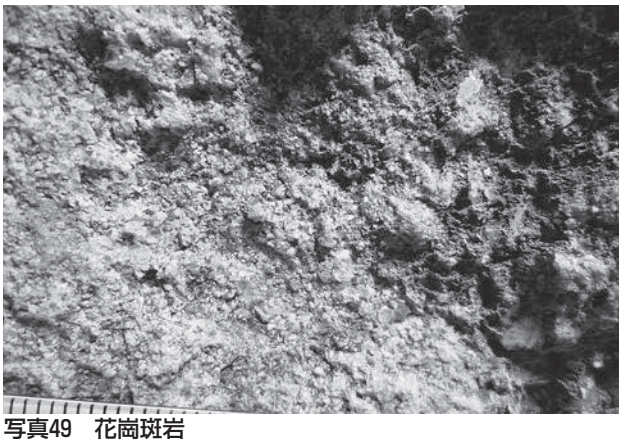


写真49　花崗斑岩

写真50　石英斑岩

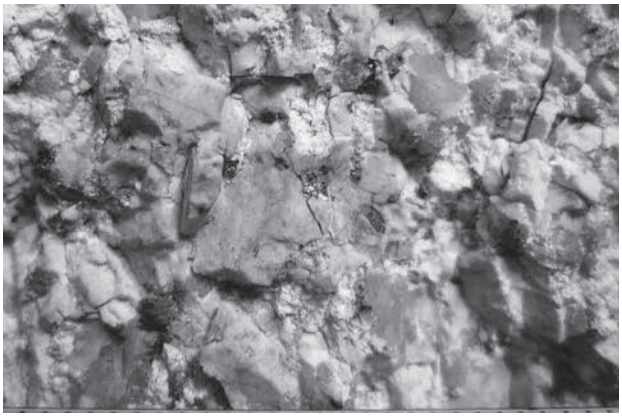


写真51　黒雲母花崗岩Ａ

写真52　黒雲母花崗岩Ｂ　宝塔の塔身

石英斑岩：色は灰色である。斑晶鉱物は石英、長石、黒雲母である。石英は無色透明、粒径が４～10㎜、量が中である。長石は桃色、粒径が２～８㎜、量が多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が１～２㎜、量がごく僅かである。石基はガラス質である。

輝石安山岩：色は灰色で、発泡孔がある。発泡孔は球状で、粒径が２～８㎜、量が多い。基質は灰色で、ガラス質である。

安山岩質火山礫凝灰岩：色は灰色である。構成粒は安山岩、軽石である。安山岩は暗灰色、灰色を呈する。暗灰色の安山岩は、粒形が角、粒径が２～８㎜、量が中、石基がガラス質である。灰色の安山岩は、粒形が角、粒径が１～15㎜、量が多く、石基がガラス質である。軽石は灰白色、粒形が亜角、粒径が２～６㎜、量が中である。基質は灰色、緻密である。

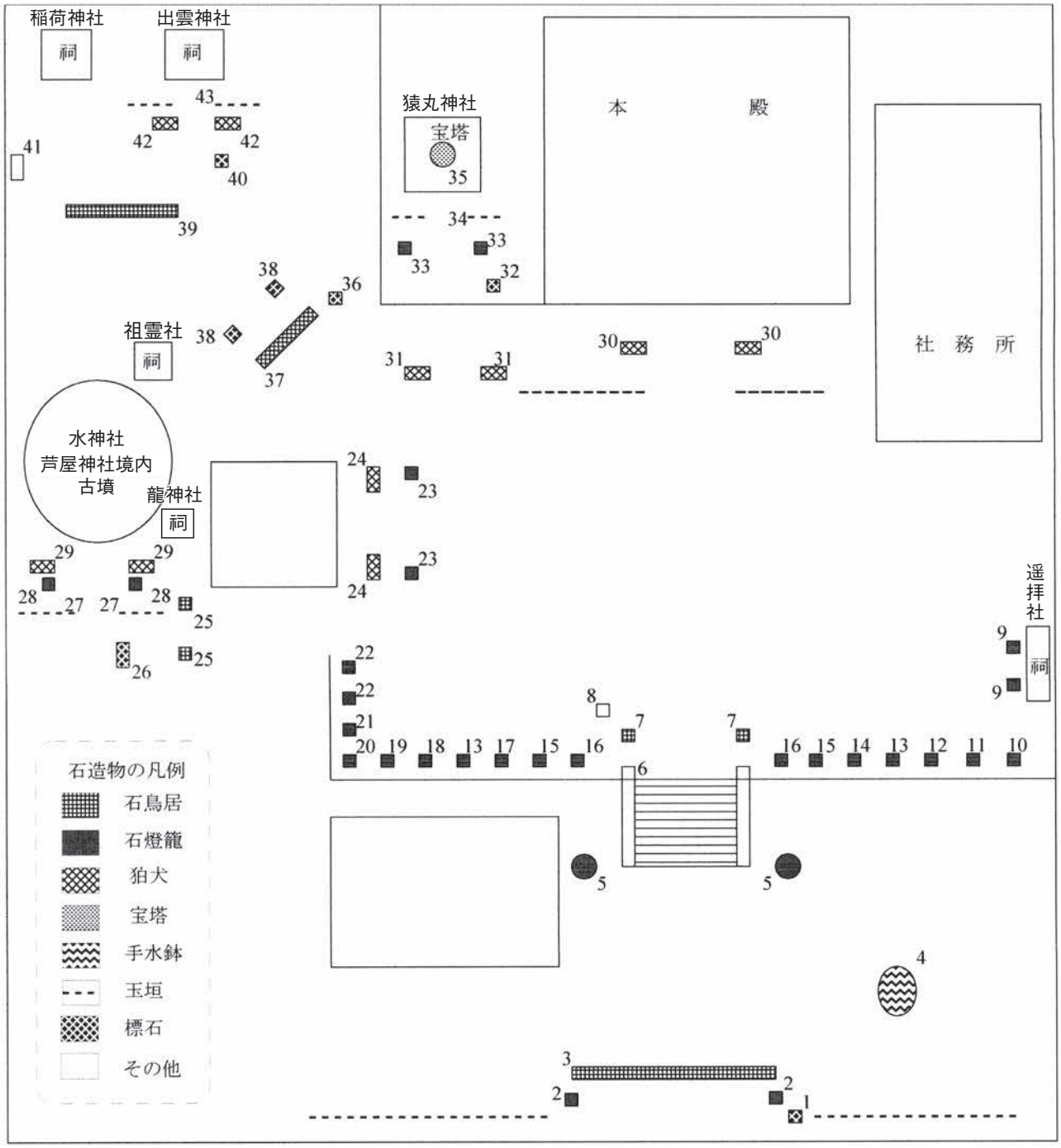


図31　芦屋神社の石造物の位置

表１　芦屋神社の石造物の石種と時期

番号	種　類	時　期	石　種	石材の産地	紀　年　銘　等	備　考
1	標石		黒雲母花崗岩Ｂ	御影付近	「芦屋神社」「祭神　天穂日神」	
2	石燈籠（分）	昭和	黒雲母花崗岩Ｂ	御影付近	「昭和五年（1930）十月建之」	
3	石鳥居	平成	粗粒花崗閃緑岩	産地不明	「平成十一年（1999）七月建之」	
4	手水鉢	昭和	黒雲母花崗岩Ｂ	当付近	「淨水盤」「昭和五年（1930）十月建之」	
5	石燈籠（円）	昭和	黒雲母花崗岩Ｂ	御影付近	「昭和拾五年（1940）貳月拾壹日」	左右対をなす
6	柱石	昭和	黒雲母花崗岩Ｂ	御影付近	「昭和五年（1930）」	耳石の上端
7	門柱石	明治	黒雲母花崗岩Ｂ	御影付近	「明治三十五年（1902）十二月建之」	左右対をなす
8	百度石	明治	黒雲母花崗岩Ｂ	御影付近	「明治三十四年（1901）五月」	
9	石燈籠（角）	大正	黒雲母花崗岩Ｂ	御影付近	「大正四年（1915）十一月十日」	左右対をなす
10	石燈籠（角）	江戸時代	黒雲母花崗岩Ｂ	御影付近	「享保十一年丙午（1726）五月吉日」	
11	石燈籠（分）	明治	黒雲母花崗岩Ｂ	御影付近	「明治□□　　」	
12	石燈籠（分）	江戸時代	黒雲母花崗岩Ｂ	御影付近	「丙安政三年（1856）」	18と対をなす？
13	石燈籠（分）	明治	黒雲母花崗岩Ｂ	御影付近	「天神社」「明治十一年（1878）六月建之」	対をなす
14	石燈籠（角）	江戸時代	黒雲母花崗岩Ｂ	御影付近	「己文政十二□（1829）八月吉日」	
15	石燈籠（分）	明治	黒雲母花崗岩Ｂ	御影付近	「明治二歳（1869）巳九月」	
16	石燈籠（角）	明治	黒雲母花崗岩Ｂ	御影付近	「明治卅一年（1898）一月建之」	左右対をなす
17	石燈籠（分）	明治	黒雲母花崗岩Ｂ	御影付近		
18	石燈籠（分）		黒雲母花崗岩Ｂ	御影付近	「辰正月再建」	12と対をなす？
19	石燈籠（分）		黒雲母花崗岩Ｂ	御影付近		
20	石燈籠（角）	江戸時代	黒雲母花崗岩Ｂ	御影付近	「享保五庚子（1720）九月吉日」	
21	石燈籠（角）	江戸時代	黒雲母花崗岩Ｂ	御影付近	「文政十三寅年（1830）」	
22	石燈籠（角）	江戸時代	黒雲母花崗岩Ｂ	御影付近	「寛政三年（1791）辛亥九月吉日」	左右対をなす
23	石燈籠（分）	江戸時代	黒雲母花崗岩Ｂ	御影付近	「弘化五戊申年（1848）正月吉日」	
24	狛犬		中粒砂岩	産地不明		左右対をなす
	（基礎）		黒雲母花崗岩Ｂ	御影付近		
25	門柱石	明治	黒雲母花崗岩Ｂ	御影付近	「明治廿七年（1894）一月建之」	
26	標石		黒雲母花崗岩Ｂ	御影付近	「水神社」	
27	玉垣	大正	黒雲母花崗岩Ｂ	御影付近	「大正六年（1917）五月建」	
28	石燈籠（自）		黒雲母花崗岩Ａ	芦屋付近		左右対をなす
29	狛犬		中粒砂岩	産地不明		左右対をなす
	（基礎）		黒雲母花崗岩Ｂ	御影付近		
30	狛犬		中粒砂岩	産地不明		左右対をなす
	（基礎）	明治	黒雲母花崗岩Ｂ	御影付近	「明治卅六年（1903）五月献」	
31	狛犬		中粒砂岩	産地不明		左右対をなす
	（基礎）	江戸時代	黒雲母花崗岩Ｂ	御影付近	「文政十三年（1830）八月吉日」	
32	標石		黒雲母花崗岩Ｂ	御影付近	「猿丸太夫之墓」	
33	石燈籠（自）		黒雲母花崗岩Ａ	芦屋付近		
34	玉垣	大正	黒雲母花崗岩Ｂ	御影付近	「大正六年（1917）五月建」	
35	宝塔	鎌倉時代	黒雲母花崗岩Ｂ	御影付近		
36	石燈籠（分）		黒雲母花崗岩Ｂ	御影付近		
37	石鳥居		黒雲母花崗岩Ｂ	御影付近		
38	石燈籠（分）	江戸時代	黒雲母花崗岩Ｂ	御影付近	「享和三年（1803）六月吉日」	左右対をなす
39	石鳥居		黒雲母花崗岩Ｂ	御影付近		
40	石燈籠（分）	明治	黒雲母花崗岩Ｂ	御影付近	「明治二十七年（1894）一月	
41	牛の像		中粒砂岩	産地不明		
42	狛犬		中粒砂岩	産地不明		左右対をなす
	（基礎）	江戸時代	黒雲母花崗岩Ｂ	御影付近	「文久二年（1862）壬戌二月」	
43	玉垣	江戸時代	黒雲母花崗岩Ｂ	御影付近	「嘉永七寅年（1854）九月吉日」	

（石燈籠は竿石の石種を示し、竿石の形状で、分＝分銅形　円＝円筒形　角＝四角柱形　自＝自然石に区分している）

（３）石材の採取推定地

芦屋神社は鉄道が通じている面よりも一段高くなった段丘の南端に位置し、第四紀層の上に建てられている。北方の山地となる付近から基盤をなす黒雲母花崗岩（六甲花崗岩）が分布する。この黒雲母花崗岩分布地には石英斑岩や花崗斑岩の岩脈がみられる。山地の裾となる付近から山地にかけて黒雲母花崗岩や石英斑岩、花崗斑岩の転石が崖堆にみられる。これらの転石は谷川にみられるような表面が滑らかで、節理面がみられないような石ではない。山地の転石は節理面で割れ目が生じていることが多く、表面剥離（玉葱状風化）がみられ、表面に凹凸があり、触るとザラザラしている。芦屋神社付近にみられる黒雲母花崗岩は御影付近の黒雲母花崗岩に比べて、黒雲母の量がごく僅かと少なく、桃色の長石が多い。

当古墳の石室に多量に使用されている黒雲母花崗岩Ａは黒雲母がごく僅かで、桃色の長石が多い芦屋神社の北方の山麓の転石にみられる黒雲母花崗岩と岩相的に似ている。石材の形状からみれば、谷川にみられるような石ではなく、山地に点在するような転石と推定されることから、当古墳北方の山麓付近で採石されたと推定される。また、石英斑岩と花崗斑岩も同様の形状を呈することから、黒雲母花崗岩Ａの採石地と同じ地で採石されたのだろう。しかし、僅か１石しか確認していない輝石安山岩は、表面が滑らかで、角が少し円くなった亜角礫であることから、川原石と推定される。発泡孔がみられる新期の溶岩であり、瀬戸内海一円にみられる火山岩と岩相的に異なる。採取地について推定しがたい。

玄室に置かれているラントウは加工石であり、岩相の比較による石材の産地推定しかできない。２基のラントウは黒雲母花崗岩Ｂ製である。この黒雲母花崗岩Ｂは黒雲母が僅かで、粒状や板状を呈し、構成粒の長石は粗粒で、桃色の長石が多いことから神戸市御影付近に分布する黒雲母花崗岩の岩相に似ている。１基のラントウは安山岩質火山礫凝灰岩で、岩相的に小豆島の西方に位置する豊島の壇山付近に産する火山礫凝灰岩の岩相の一部に似ている。

２．芦屋神社境内の石造物の石種

芦屋神社発行の栞によれば、「主祭神が天穂日命で、明治41（1908）年頃の神社合祀令により芦屋村に点在していた鎮守の社を天神社に合祀した。天神社は菅原道真公を祀る天神社と間違える人が多いことから、昭和21（1946）年に芦屋神社と改称した。境内の整備は昭和５（1930）年、昭和50（1975）年に行われている。平成７年の阪神淡路大震災により石造物の殆どが倒壊し、現在みられるものは復旧されたものである」とされている。

境内にみられる石造物の石種と記年銘を裸眼で観察した。観察した石造物の位置を図31に、石種と記年銘について表１に示す。石燈籠の石種は竿石の石種である。

（１）石造物の種類と石材の石種

観察した石造物は石燈籠が22基（２基が黒雲母花崗岩Ａ、20基が黒雲母花崗岩Ｂ）、石鳥居が３基（２基が黒雲母花崗岩Ｂ、１基が粗粒花崗閃緑岩）、標石が３基（全て黒雲母花崗岩Ｂ）、門柱石が２基（全て黒雲母花崗岩Ｂ）、百度石が１基（黒雲母花崗岩Ｂ）、宝塔が１基（黒雲母花崗岩Ｂ）、玉垣が３ヶ所（全て黒雲母花崗岩Ｂ）、柱石が１基（黒雲母花崗岩Ｂ）、狛犬が５基（全て中粒砂岩）、牛の像が１基（中粒砂岩）、手水鉢が１基（黒雲母花崗岩Ａ）である。２基の黒雲母花崗岩Ａ製の石燈籠は自然石を使用されている。また、粗粒花崗閃緑岩製の鳥居は阪神淡路大震災の復興により建立されたもののようである。狛犬と牛の像は中粒砂岩製であるが、これらの基礎となる石材は黒雲母花崗岩Ｂである。

（２）石種の特徴

黒雲母花崗岩Ａ、黒雲母花崗岩Ｂ、粗粒花崗閃緑岩、中粒砂岩の石種の特徴について述べる。

黒雲母花崗岩Ａ：色は淡桃色である。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が４～８㎜、量が中である。長石は桃色と灰白色を呈するものがある。桃色の長石は、粒径が５～８㎜、量が多い。灰白色の長石は、粒径が３～８㎜、量が中である。黒雲母は黒色、粒状で、粒径が１～２㎜、量がごく僅かである。

黒雲母花崗岩Ｂ：色は淡桃色である。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が３～６㎜、量が僅かである。長石は桃色と灰白色を呈するものがある。桃色の長石は、粒径が５～10㎜、量が多い。灰白色の長石は、粒径が４～10㎜、量が中である。黒雲母は黒色、粒状で、粒径が１～４㎜、量が僅かである（宝塔の塔身での観察）。

粗粒花崗閃緑岩：色は灰白色である。石英・長石・黒雲母・角閃石が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が３～20㎜、量が多い。長石は灰白色、粒径が５～30㎜、量が多い。黒雲母は黒色、粒状で、粒径が１～６㎜、量が僅かである。角閃石は黒色、短柱状で、粒径が１～４㎜、量がごく僅かである。

中粒砂岩：色は淡茶褐色である。構成粒を裸眼で同定

しがたい。

（3）石材の採取推定地

自然面がみられる手水鉢は表面が滑らかな川原石様で、岩相的には当神社北方に分布する黒雲母花崗岩の岩相の一部に似ていることから、芦屋川の谷に転在する石を採取したと推定される。石燈籠に使用されている黒雲母花崗岩Ａの石材は北方山地に転在する石と似ている。多くの石造物に使用されている黒雲母花崗岩Ｂは岩相的に神戸市御影付近の石と推定される。粗粒花崗閃緑岩、中粒砂岩については同様の岩相を示す石を見聞していない。産地不明である。

（4）おわりに

狛犬は４基が同じ形状を示しているが、基礎石に刻まれた紀年銘では文久や文政である。また、１基は明治である。狛犬の形状が同じで、紀年銘からみれば30年や70年の差があるようなことは生じないだろう。現在みられる狛犬は復旧されたものと推定される。石燈籠においても火袋部は修復が繰り返されている場合が多い。紀年銘がみられる竿石での石種の比較が適していると言えよう。

観察した石造物43点をもとに当神社にある石造物の石材の使用傾向をみれば、産地不明のものを除けば、当神社付近で採石された石材の石造物が僅かで、御影付近で制作されたと推定される石造物が多い。この現象は当地の石材を使用して石造物を生産する石工（石屋）が存在しなかったために生じたといえよう。

報告書抄録

ふりがな	きょうとたちばなだいがく　れきしいさんちょうさほうこく
書名	京都橘大学 歴史遺産調査報告 2013
副書名	醍醐寺旧光台院本堂、芦屋神社境内古墳、鹿谷古墳群茶ノ木山支群
巻次	
シリーズ名	京都橘大学 歴史遺産調査報告
シリーズ番号	7
編著者名	一瀬和夫　登谷伸宏　荒木瀬奈　鈴木　茂　鈴木知怜　北垣巴恵　奥田　尚
編集機関	京都橘大学　文学部歴史遺産学科
所在地	〒607-8175　京都市山科区大宅山田町34　TEL. 075-571-1111
発行年月日	2014年3月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
芦屋神社境内古墳	芦屋市東芦屋町	28206		34°44′33″	135°18′09″	2013年8月1日～9月3日、12月20日	2,300㎡	学術調査
鹿谷古墳群茶ノ木山支群	京都府亀岡市稗田野町鹿谷丸ヶ条	26206	32	35°01′50″	135°32′06″	2012年11月23日、12月29・30日、2013年3月23日	3,850㎡	学術調査

所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
芦屋神社 境内古墳	古墳	古墳時代	横穴式石室１基 全長10.4m 羨道長6.2m 北端幅1.2m 南端幅2.0m 玄門幅1.4m 同高さ1.2m 前壁幅1.2m 同高さ0.8m 玄室長3.6m 同幅1.7m 同高さ2.1m		（測量調査・実測調査）
鹿谷古墳群 茶ノ木山支群	古墳群	古墳時代	円墳 前方後円墳（？） 横穴式石室		（整理調査）

京都橘大学 歴史遺産調査報告 2013
醍醐寺旧光台院本堂、芦屋神社境内古墳、鹿谷古墳群茶ノ木山支群

発　行　京都橘大学　文学部
〒607-8175　京都市山科区大宅山田町34　TEL 075-571-1111
発行日　2014年３月31日
印　刷　㈲ 真　陽　社
〒600-8475　京都市下京区油小路仏光寺上ル　TEL 075-351-6034

京都橘大学
KYOTO TACHIBANA UNIVERSITY